

Ⅱ. 評定尺度調査の分析結果

【評定尺度調査の分析にあたって】

今回用いた評定尺度は、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」による4段階評価である。本報告書においては、データの理解や分析のしやすさを考慮し、便宜的に4段階のカテゴリーに4～1の点数を振り、その平均値を算出することによって、データの代表値とした。ただし評定尺度の各カテゴリーに振られた「数字」を「数値」として加減乗除の演算をすることは、厳密に言えば統計処理として適切でない。3が2よりもあてはまる程度が大きいことは言えても、4と3の間と3と2の間が等距離（つまり1の間隔）だという保証はどこにもないからである。しかし4つのカテゴリーごとの相対度数（パーセント）から何らかの傾向を掴み取ることは容易ではないため、平均値を回答の傾向を推察する目安の1つとして用いたい。

また、ここでの平均値は何らかの単位を持つものではないので、データ同士の相対比較でのみ、その傾向を読み取ることになる。仮にある項目の平均値が、他の項目より低かったとしても、大部分の回答者がその項目に対して肯定的な評価をしていれば、その項目の評価は低いと簡単に断言できるものではないからである。つまり絶対的な評価が把握しにくいと言える。そこで、「あてはまる」もしくは「ややあてはまる」と回答した対象者の割合を同時に提示した。これによって、その評価項目に対し肯定的評価をしている学生がいかほどの割合で存在するかを推測する目安とする。

さらに回答者の属性ごとの回答者数を提示する。本来ならば、グラフ等のデータごとに回答者数を示すべきであるが、データの構造上、全てのデータに回答者数を掲載すると極めて煩雑になるため、ここに一括して掲載することにした（次頁表2-1）。以下、本章においては、常に次頁の回答者数に基づいてデータを見る必要がある。特に回答者数の少ない層ほど誤差が大きくなる傾向で、注意が必要である。たとえば、学部の職業別の「農業等」（18人）と「他大学等の学生」（5人）や年齢階層別「19歳以下」（6人）、「夏季集中科目」（11人）などである。

大学院では、職業別の会社員以外の職業（「他大学等の学生」（0人）～「公務員等」（12人）、年齢階層別の「20～29歳」（4人）、「60～69歳」（5人）、「70歳以上」（5人）、プログラム別の「生活健康科学」（7人）、「臨床心理学」（4人）、「情報学」（13人）が挙げられる。

いずれも参考値としてグラフに記載しているが、殆どコメントを割愛した。

表 2 - 1 回答者数一覧

【学部】

全体	(単位:人)	
メディア	年齢階層	
テレビ科目(TV)	1,269	19歳以下 6
ラジオ科目(R)	867	20～29歳 127
職業		30～39歳 258
公務員等	168	40～49歳 551
教員	72	50～59歳 590
会社員	542	60～69歳 497
個人営業・自営業	144	70歳以上 107
農業等	18	コース
看護師等	183	一般科目 231
家事専業	130	外国語 163
パート・アルバイト	309	生活と福祉 367
他大学等の学生	5	心理と教育 411
無職	431	社会と産業 284
その他	134	人間と文化 359
		情報 183
		自然と環境 127
		夏季集中科目(看護) 11

【大学院】

全体	(単位:人)	
メディア	年齢階層	
テレビ科目(TV)	-	20～29歳 4
ラジオ科目(R)	76	30～39歳 22
職業		40～49歳 15
公務員等	12	50～59歳 25
教員	9	60～69歳 5
会社員	28	70歳以上 5
個人営業・自営業	4	プログラム
農業等	1	生活健康科学 7
看護師等	7	人間発達科学 25
家事専業	2	臨床心理学 4
パート・アルバイト	4	社会経営科学 27
他大学等の学生	0	情報学 13
無職	3	
その他	6	

※職業及び年齢には無回答があるため、職業及び年齢階層の回答者数をそれぞれ合計しても、全体の回答者数とは一致しない。

Ⅱ－1. 学部の分析結果

Ⅱ－1－1. 項目平均から見た全体的傾向

ここからは、A-1～B-20 の評価項目ごとに、平均値と肯定的評価のグラフを基に、そのデータから目立つ点や、特徴的傾向を記述していくことにする。

平均値は、評価項目の選択肢である「あてまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」に対して順に 4 点、3 点、2 点、1 点の得点を与え、その得点合計を回答者数で割った値である。全員が「あてはまる」とした場合、平均値は 4.00 で最も高くなり、全員が「あてはまらない」とすると最低の 1.00 となる。

また、肯定的評価は文字通り「あてはまる」と「ややあてはまる」の比率の合計である。

平均値より肯定的な評価の方が（例えば回答者の 80% と）イメージしやすく、平均値と肯定的評価に齟齬が出た場合、どちらを採るか合理的な判断ができないので、記述については肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

また、過去 2 年間との年度間の比較（22 頁、24 頁等）の箇所は、比率の差の検定結果から、回答者数（2136 人～5106 人）が多いため、概ね 2 ポイントで各比率の差が有意となり、2 ポイント以上で差があることにした。

テレビ科目とラジオ科目のメディア間の比較では、同検定結果から概ね 3 ポイントで有意差がみられるため、3 ポイント以上で差があることにした。

図 2－1 の肯定的評価では各項目とも 87% 前後と 8 割後半からの支持率で、特に『全体評価（B-16～B-20）』は 88% の評価であった。

『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』と『全項目平均（A-1～B-20）』はそれぞれ 86% と 87% であった。

図 2－1 【学部】項目平均による全体的傾向

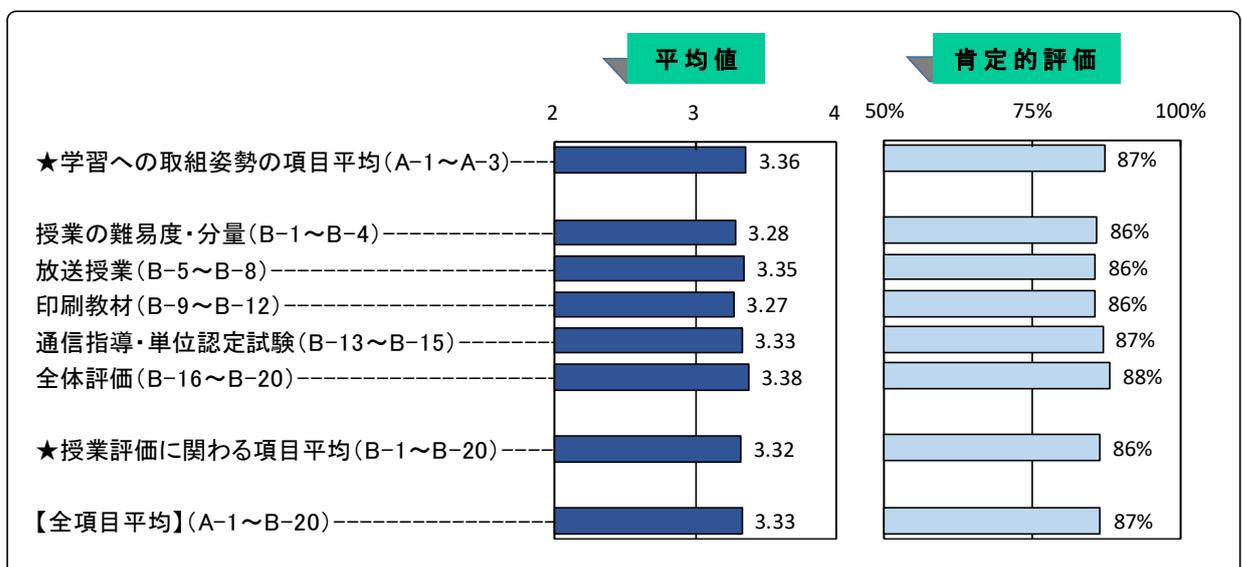
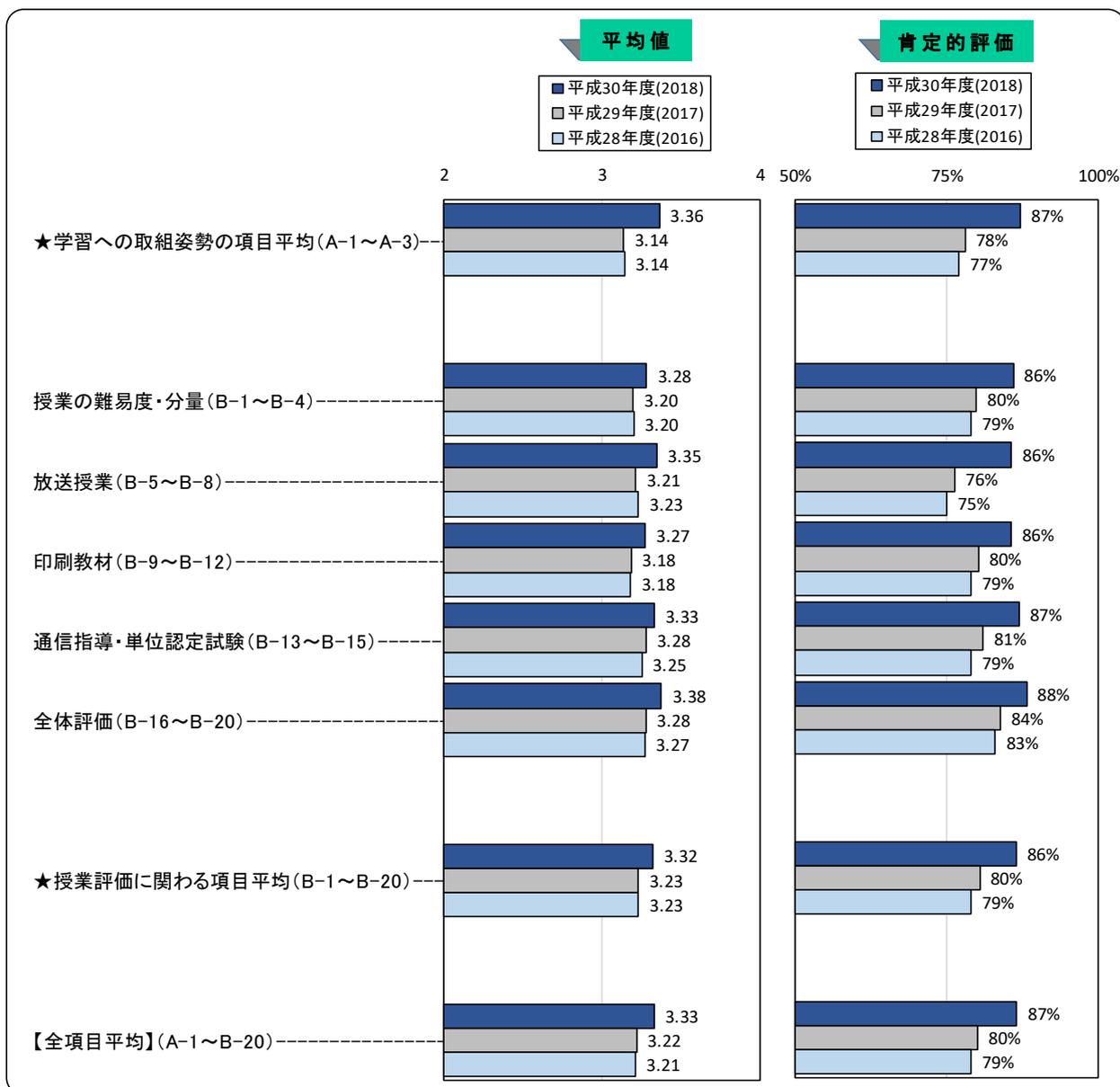


図2-2の項目平均による全体的傾向では過去2年度と本年度を比較すると、少なくとも本年度は+4ポイント以上の差をつけ、特に『学習への取組み姿勢』(87%)と『放送授業』(86%)は共に+10ポイントと大きく評価が上がっていた。

本年度の『全体評価』は昨年度から+4ポイントと上昇幅は最小だか、肯定的評価は88%とほぼ9割に達していた。

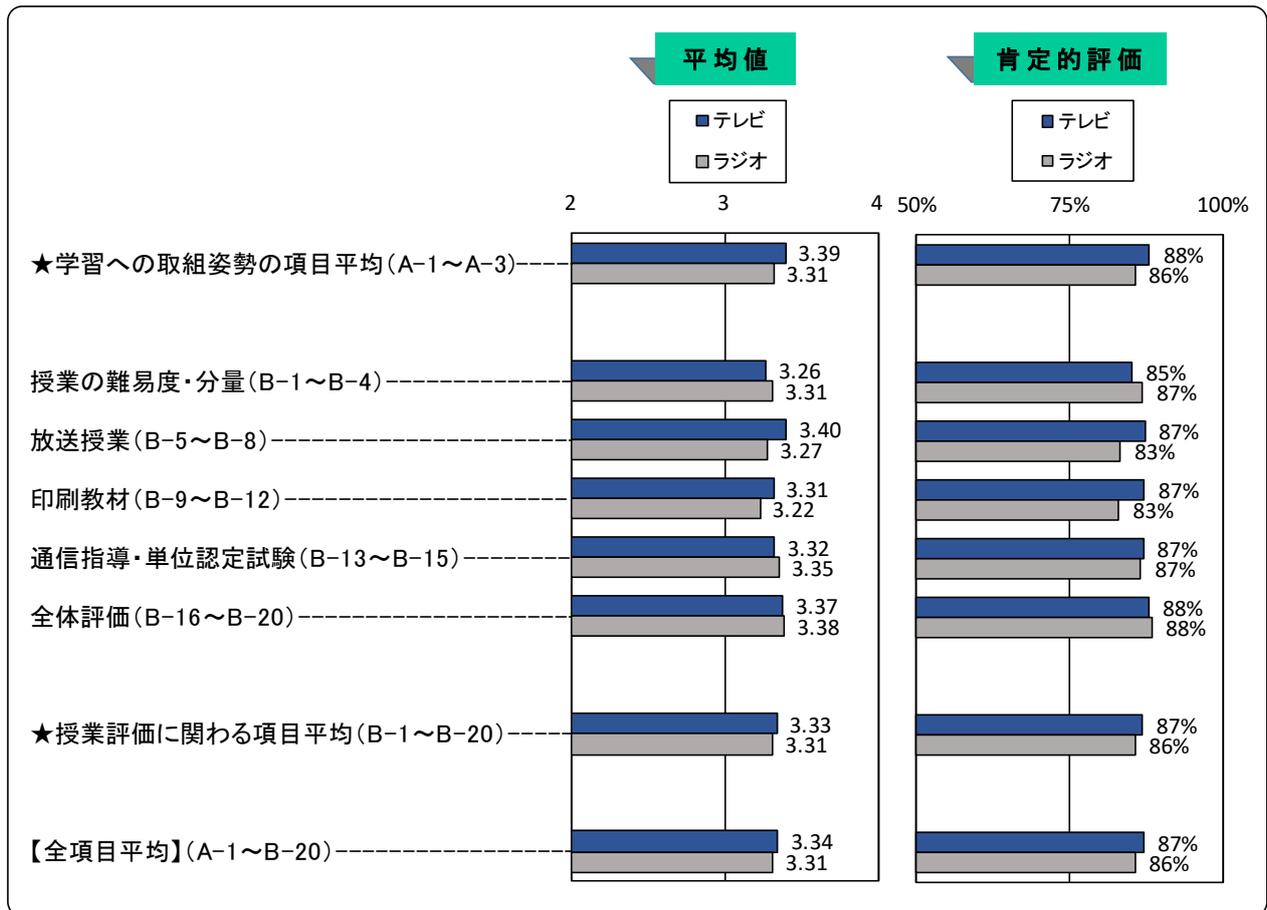
図2-2 【学部】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



メディア別では（図2-3）、テレビ科目（n=1269）とラジオ科目（n=867）のメディア間で『放送授業』と『印刷教材』の差が大きく、4ポイントの差でテレビ科目（各87%）の方が高かった。

逆にラジオ科目が上回ったのは、唯一『授業の難易度・分量』で、+2ポイントの87%であった。

図2-3 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向

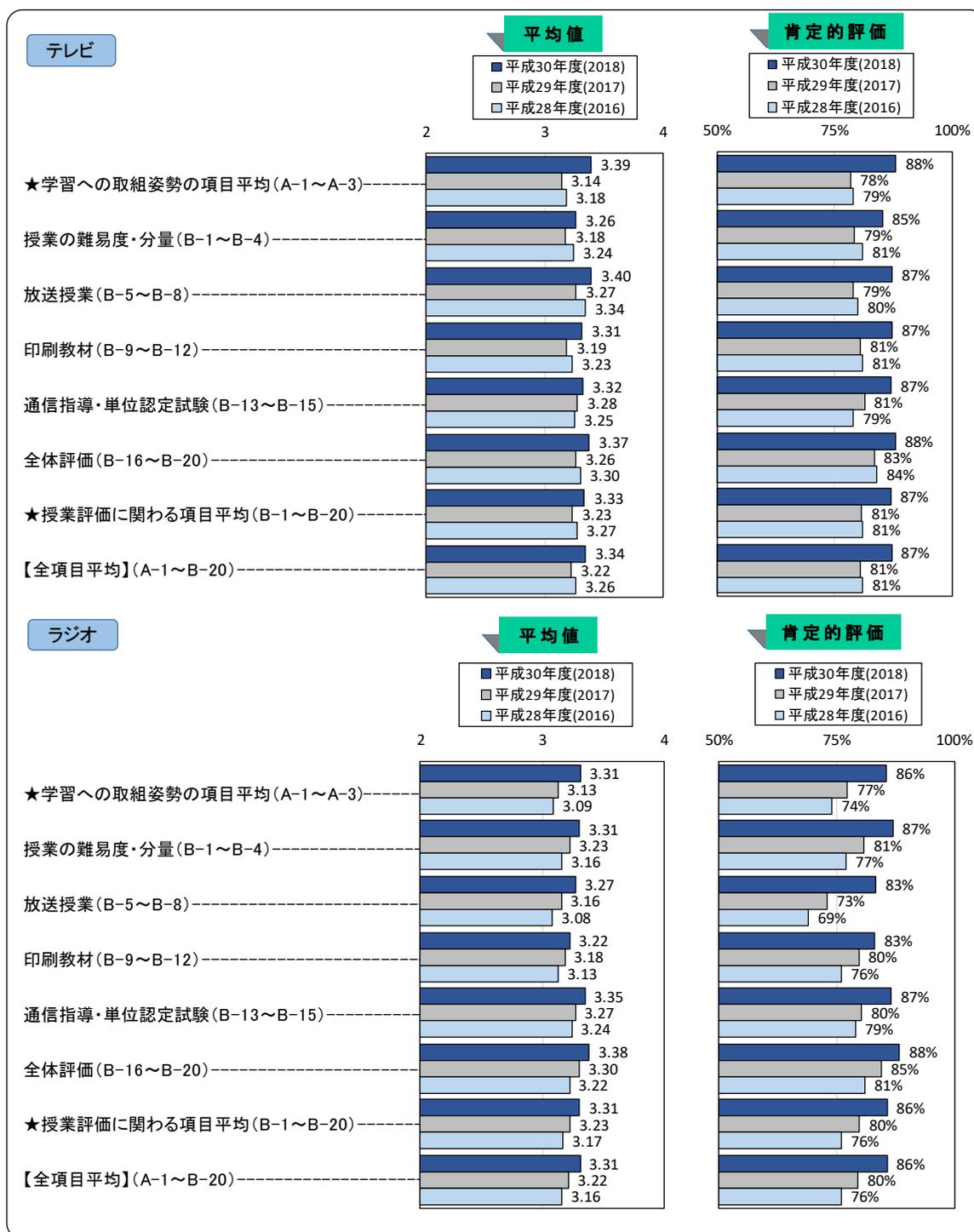


次にメディア別の項目平均を時系列で比較してみると（図2-4）、テレビ科目において、本年度は昨年度までの2年間より全ての項目で上昇が見られ、その差は4~9ポイントであった。特に上昇が大きかったのは『学習への取組み姿勢』（88%）の+9ポイント、次いで『放送授業』（87%）の+7ポイントであった。

ラジオ科目でも全ての項目で上昇があり、最も差が見られたのは『放送授業』（83%）の+10ポイント、次いで『学習への取組み姿勢』（86%）の+9ポイントであった。

反対に最も差が小さかったのは+3ポイントの『印刷教材』（83%）で、他の項目は4から7ポイントで推移していた。

図2-4 【学部】項目平均によるメディア別全体的傾向（開設年度比較）



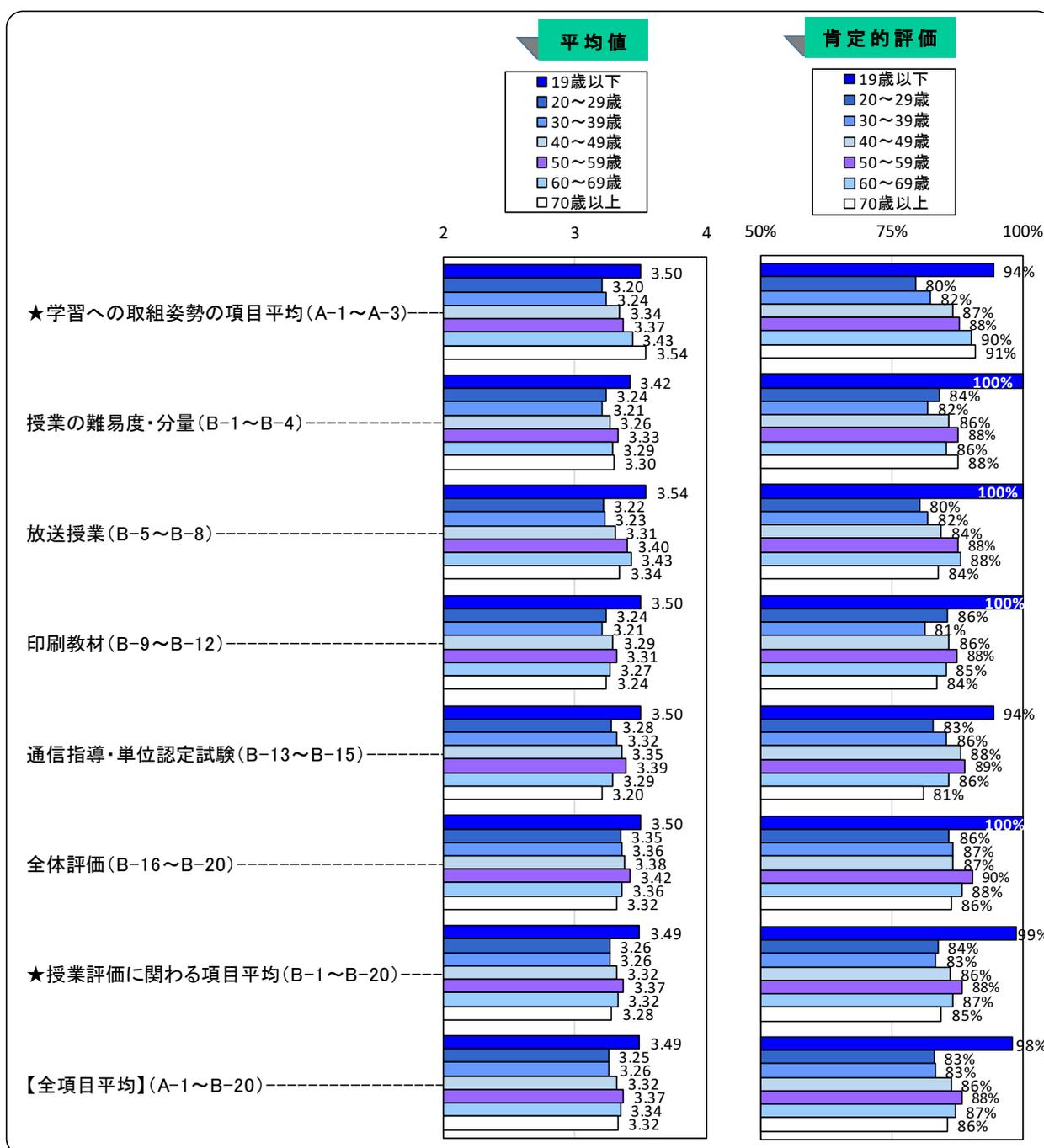
回答者の年齢階層別（図2-5）では、いずれの項目でも19歳以下の評価が突出しているが、19歳以下の回答者が6人と少なく、比率が極端となるため、19頁で述べたとおり、これ以降は言及しないことにする。

他の年代だけで見ると『学習への取組み姿勢』は年代が上がるにつれ、評価の上昇がみられ60歳代で90%、70歳以上で91%に達していた。

他に特徴的であったのは、『放送授業』から最下段の『全項目平均』において、50歳代の評価が最も高く、各項目で88%から90%と高い支持率を示していた。

反対に20歳代と30歳代の若い層は、各項目で評価が低い傾向であったが、それでも8割前半の評価であった。

図2-5 【学部】項目平均による年齢階層別全体的傾向

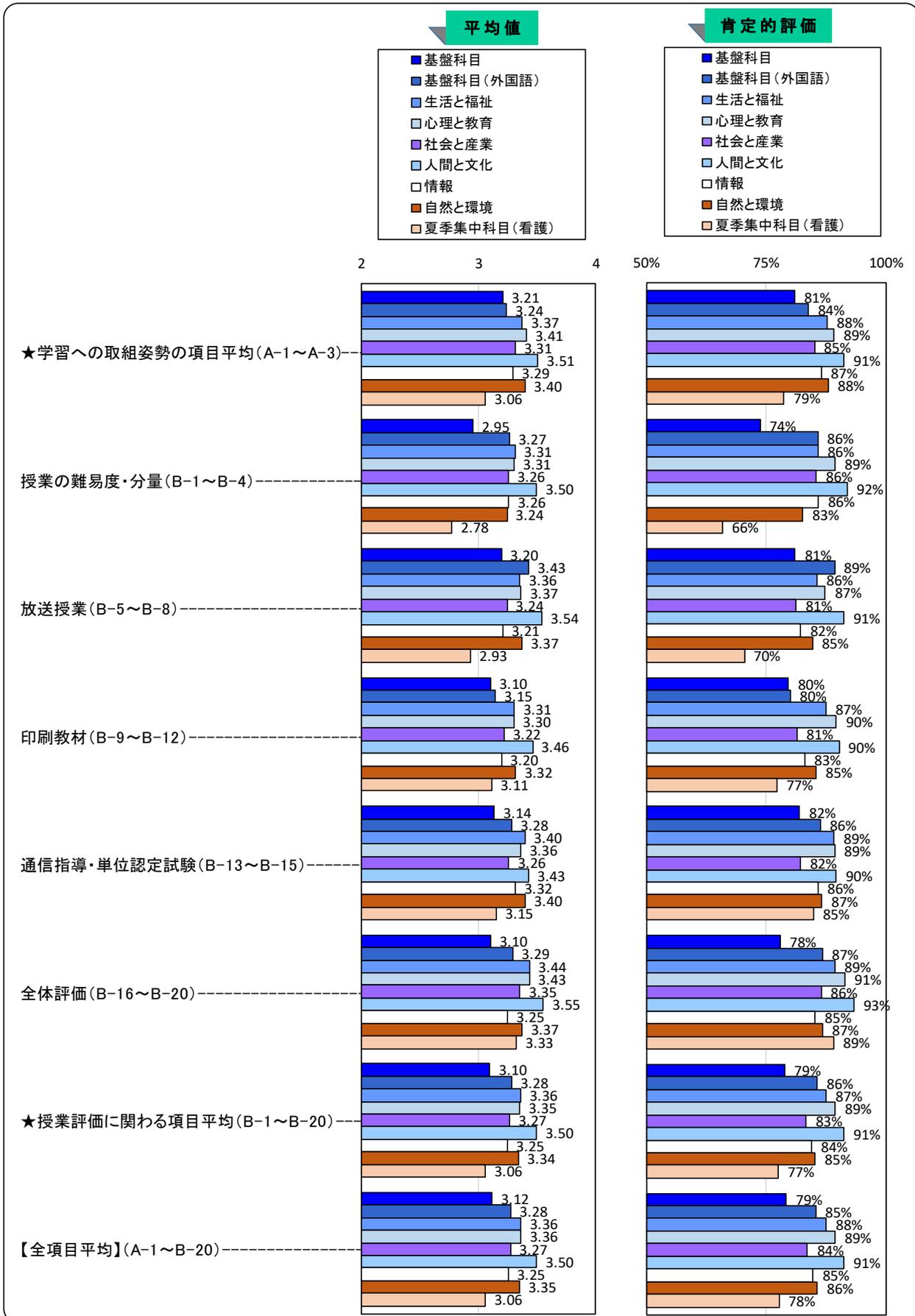


科目の所属コース別に項目平均をみると（次頁図 2 - 6）、「人間と文化」は全項目にわたって他の科目に比べ評価が最も高く、次いで「心理と教育」も全 8 項目中 7 項目で第二位の支持を集めていた。

反対に「夏季集中科目(看護)」は 6 項目で最下位と評価が低かった。ただ、この科目に所属する回答者が 11 人と少ないため比率が極端な値となり、19 頁で述べたとおりこれ以降は言及しないことにする。

それ以外、各評価項目で「基盤科目」は、他の科目に比べ評価が低く、『授業の難易度・分量』（74%）と『全体評価』（78%）が 7 割台、『全項目平均』では、79%と唯一 80%を下回っていた。

図 2 - 6 【学部】項目平均による所属コース別全体的傾向

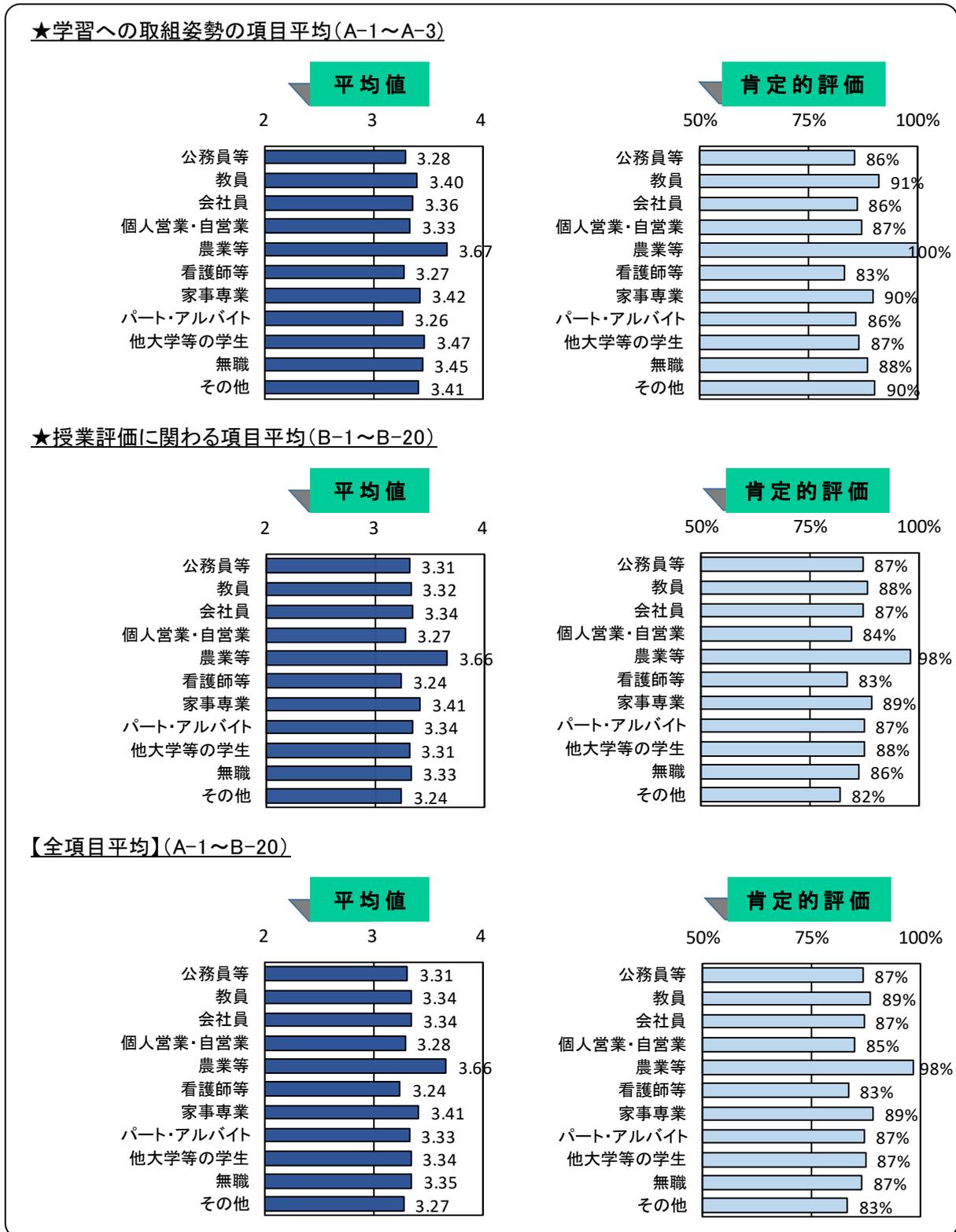


職業別では（頁図2-7）『学習への取組み姿勢』『授業の難易度・分量』において「農業等」の評価が最も高く、「教員」「家事専業」がこれに続く。

（「農業等」の回答者数は18人と小サンプルなため、今回の結果は参考値と考え、以後言及を割愛する。）

反対に最も評価が低かったのは「看護師等」で『全項目平均』で83%であった。

図2-7 【学部】項目平均による職業別全体的傾向

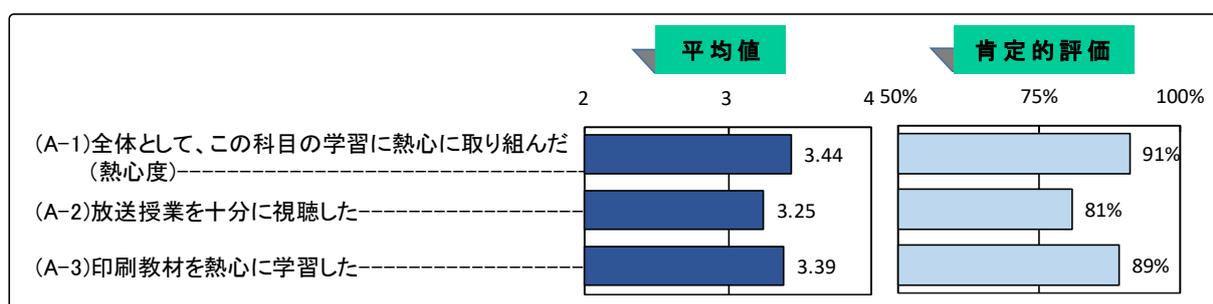


Ⅱ-1-2. 学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれの評価項目ごとに調査結果をみていく。

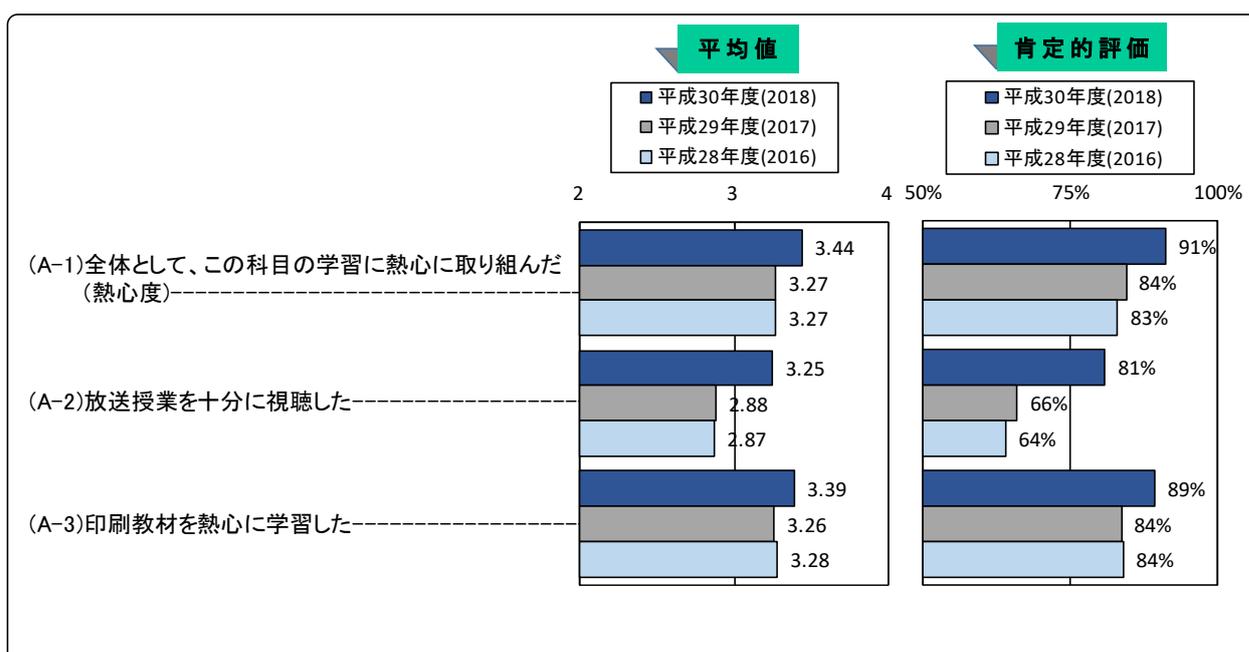
学習への取組み姿勢（図2-8）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」の肯定的評価は91%と、9割以上の履修生は熱心に学習していた。同様に(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」も肯定的評価が89%であった。しかし、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は81%と前述の項目に比べ低く、学習は印刷教材のウエイトが高かった。

図2-8 【学部】回答者全体の取組姿勢



取組姿勢を時系列でみると（図2-9）、いずれの項目でも肯定的評価は過去2年度と上回っており、特に(A-2)「放送授業を十分に視聴した」（81%）は過去2年度より15ポイント以上、上昇していた。

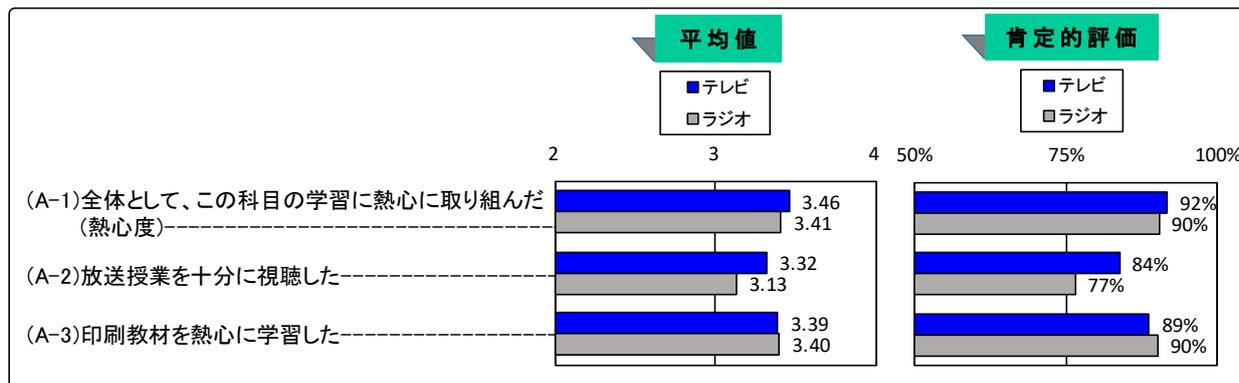
図2-9 【学部】回答者全体の取組姿勢（時系列）



次にメディア別の取組姿勢では（図2-10）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」はメディア別には、ほとんど差はなく、いずれも9割に達していた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」ではテレビが7ポイントアップと差が開いた。

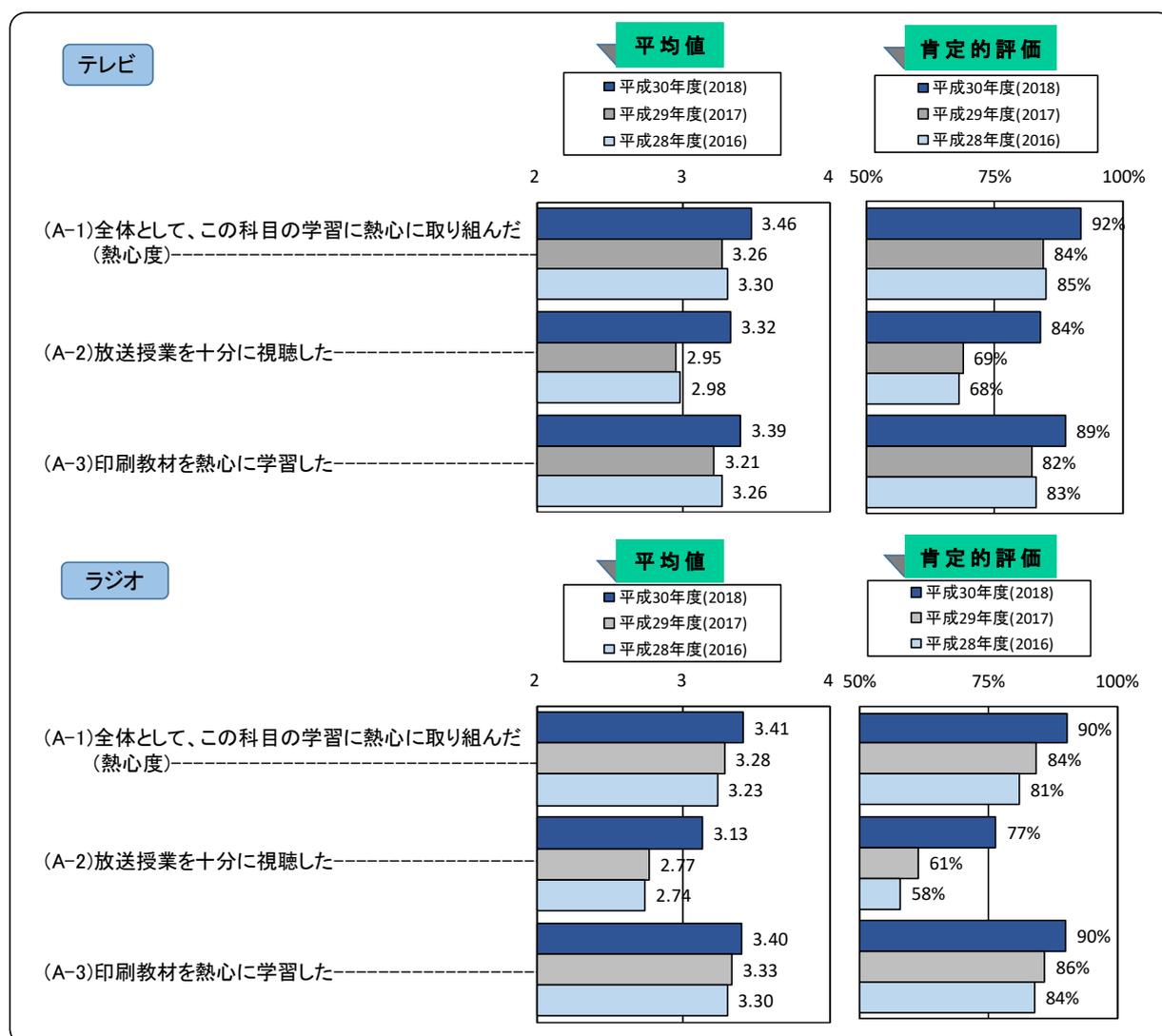
図2-10 【学部】メディア別の取組姿勢



メディア別の取組姿勢を時系列でみると（図2-11）、テレビ科目は、過去2年度に比べ3項目とも評価が上がっており、特に（A-2）の「放送授業を十分に視聴した」では+15ポイントと際立っていた。

ラジオ科目はテレビ科目と同じ傾向で、過去2年度に比べ3項目とも評価の上昇がみられ、（A-2）「放送授業を十分に視聴した」は+16ポイントと大幅な上昇であった。

図2-11 【学部】メディア別の取組姿勢（時系列）

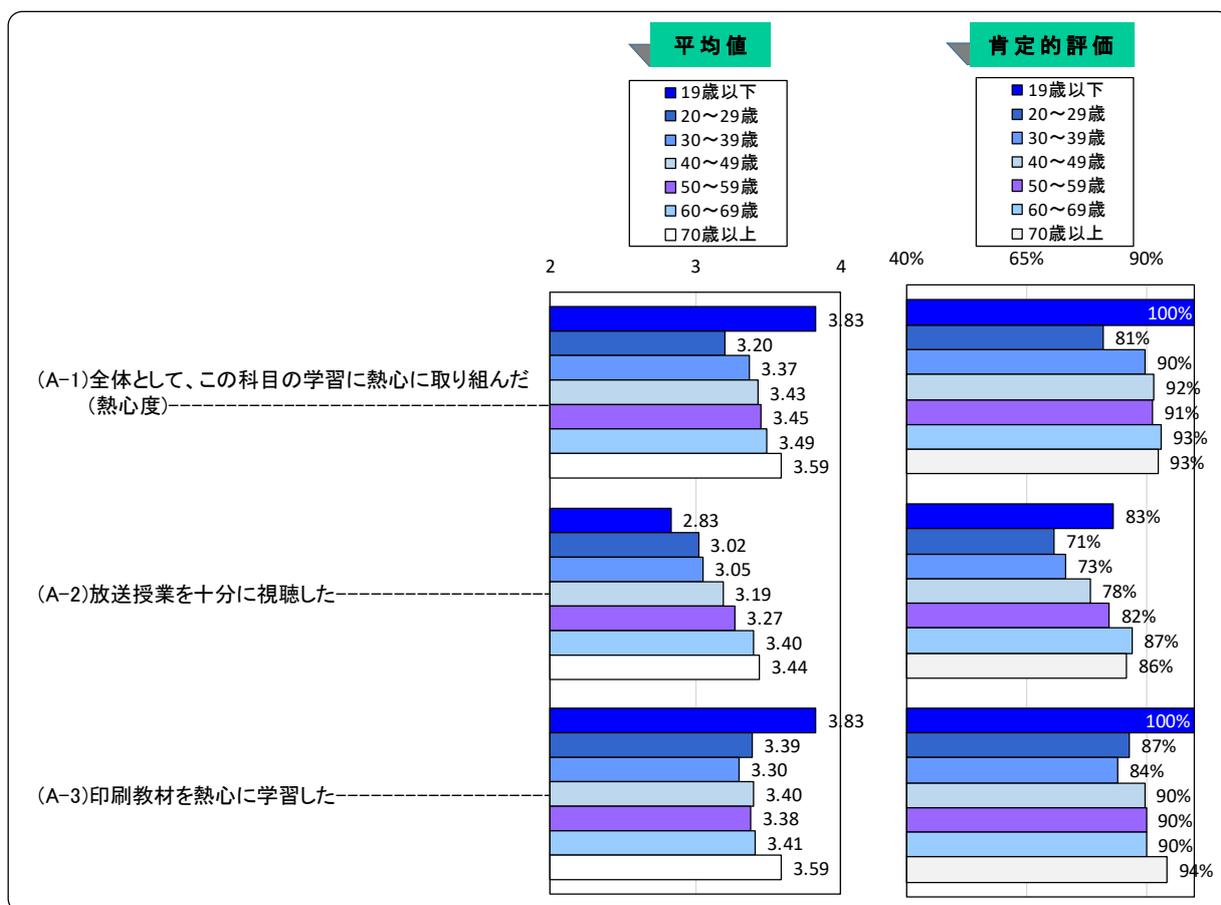


年齢階層別に取り組姿勢をみると（図2-12）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は20歳代(81%)より上の年代層は熱心度が高く、9割に達していた。

次の(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は20歳代から年代が上がるともに取り組み姿勢も上昇し、60歳代で87%に達していた。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では70歳以上が94%で最も高く、反対に30歳代が84%と9割を下回っていた。

図2-12 【学部】年齢階層別に取り組姿勢

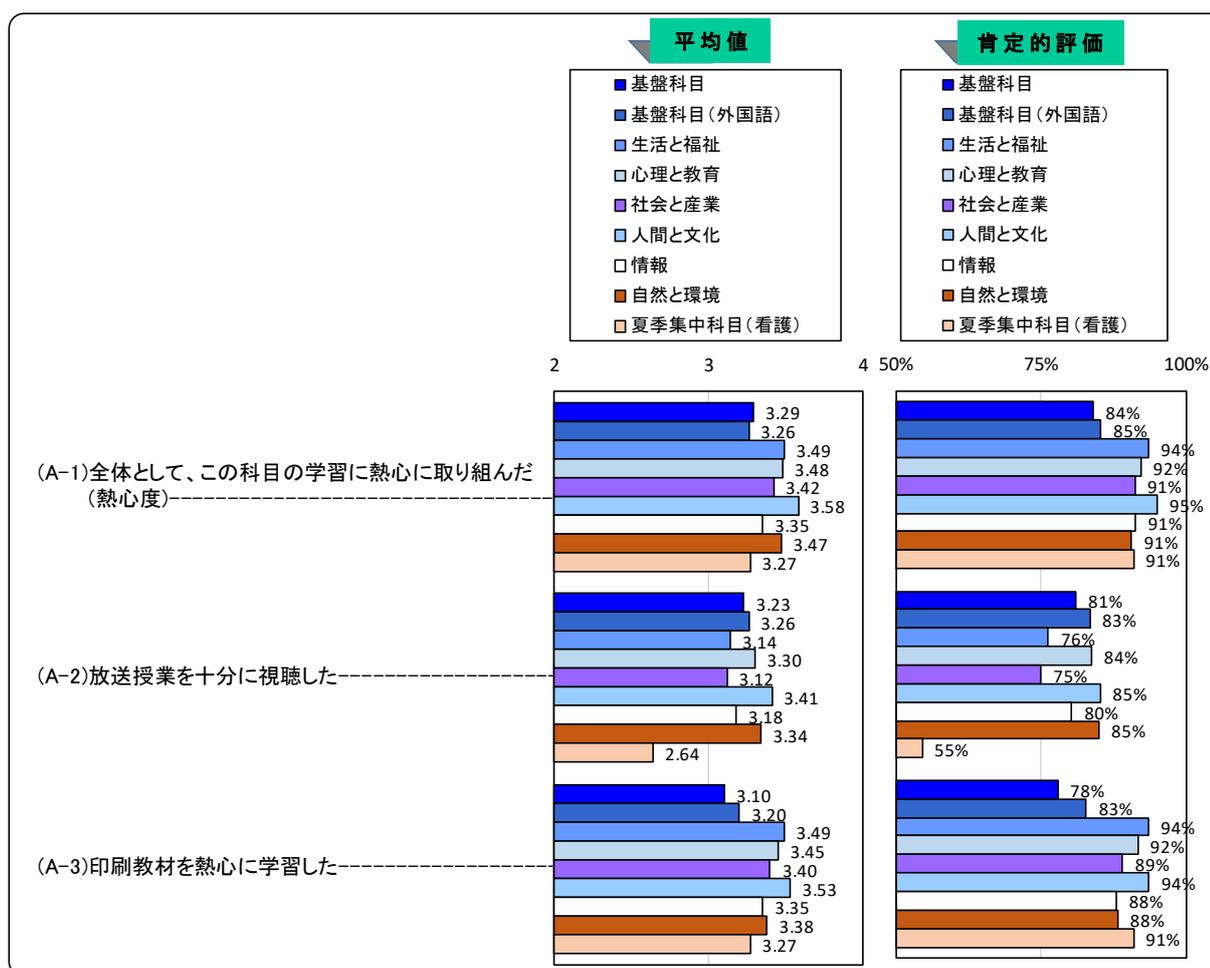


所属コース別に取り組姿勢をみると（図2-13）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は「基盤科目」と「基盤科目（外国語）」が8割台で他の科目と比べ低く、それ以外の科目は90%以上と熱心度は高かった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は「生活と福祉」と「社会と産業」が7割台で低くかった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では「基盤科目」（78%）と「基盤科目（外国語）」（83%）以外は、90%前後と熱心度は高かった。

図2-13 【学部】所属コース別の取組姿勢



職業別に取り組姿勢をみると（次頁図 2 - 1 4）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」は、小サンプルの「農業等」と「他大学などの学生」を除けば「教員」(94%)が高く、反対に「看護師等」(88%)は低かった。

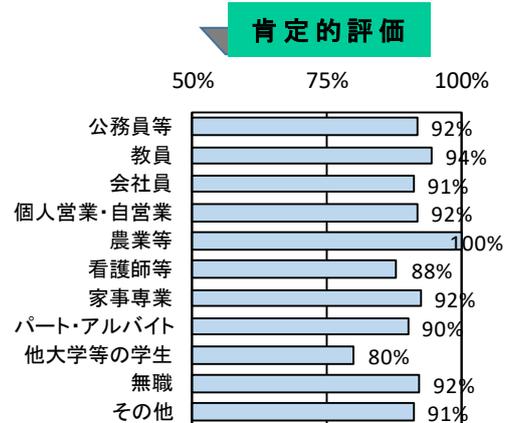
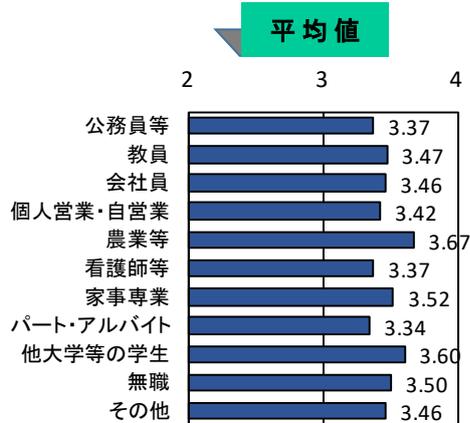
その他の職業は 90% 台前半であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は「その他」(88%)と「教員」(86%)が高く、反対に「看護師等」は 70% と他の職業に比べ極端に低かった。

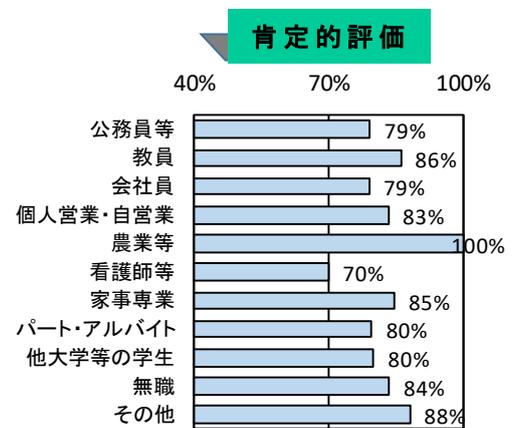
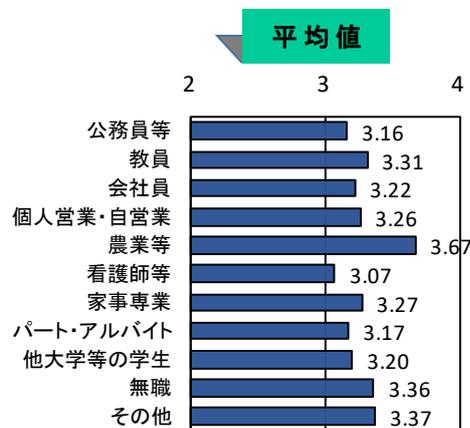
(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」では「教員」「看護師等」「家事専業」「無職」「その他」が特に高く 90% を越えていた。

図 2 - 1 4 【学部】職業別の取組姿勢

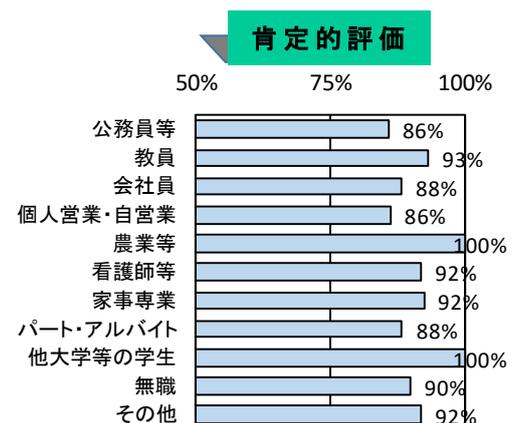
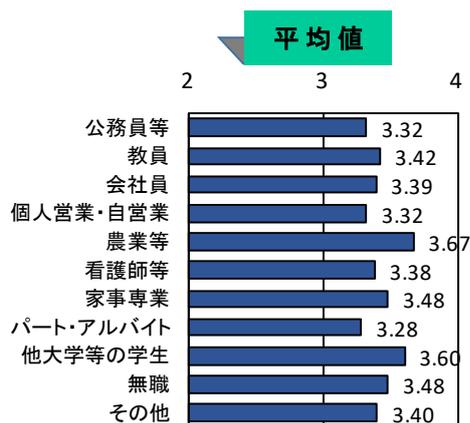
(A-1)全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ



(A-2)放送授業を十分に視聴した



(A-3)印刷教材を熱心に学習した



単位認定のための学習方法（次頁図 2 - 1 5）は、全体では『放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ』が 71%と大半を占め、『ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ』が 21%、『ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ』はわずか 7%で、「印刷教材」の利用者が大半を占めていた。

メディア別では「テレビ科目」は全体と同じ傾向であったが、「ラジオ学科」は『両方の学習で臨んだ』が 68%と 7 割を下回り、『ほとんど印刷教材の学習だけ』が 27%とテレビ科目を 9 ポイント上回っていた。

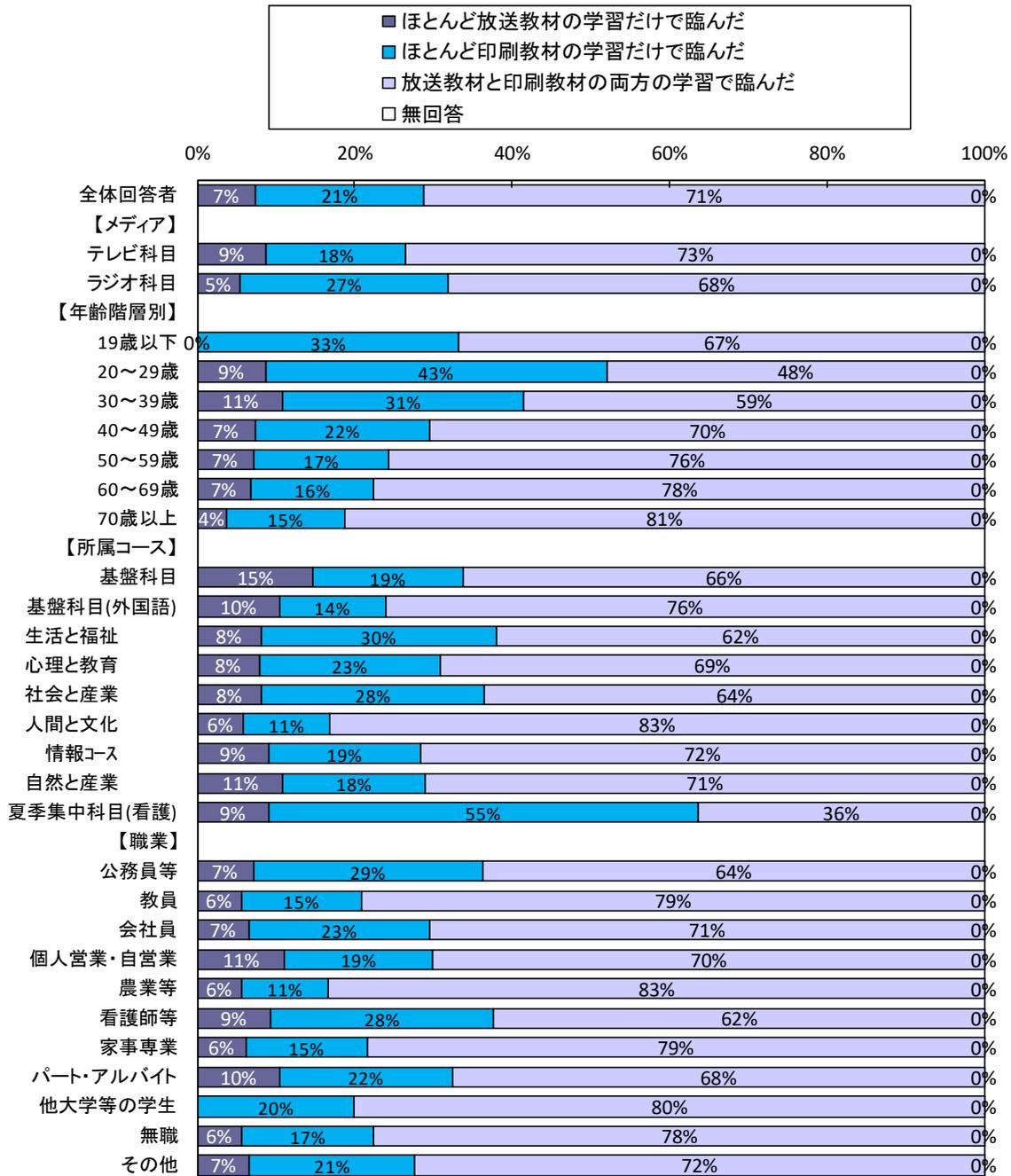
「年齢階層別」では 19 歳以下を除けば、年代の上昇と共に『両方の学習で臨んだ』が増加し、『ほとんど印刷教材の学習だけ』はその逆の傾向であった。

『ほとんど放送教材の学習だけ』は 30 歳代で高く、70 歳以上で低かった。

「所属コース別」では『両方の学習で臨んだ』が最も多かったのは「人間と文化」の 83%、最も少なかったのは「生活と福祉」の 62%であった。

「職業別」では、「教員」と「家事専業」の『両方の学習で臨んだ』が 79%と、8 割近くに達していた。

図 2 - 1 5 【学部】 単位認定のための学習方法



Ⅱ-1-3. 学部の授業評価

(1) 全体評価

次に学部の授業評価について、評価項目ごとに見ていく。

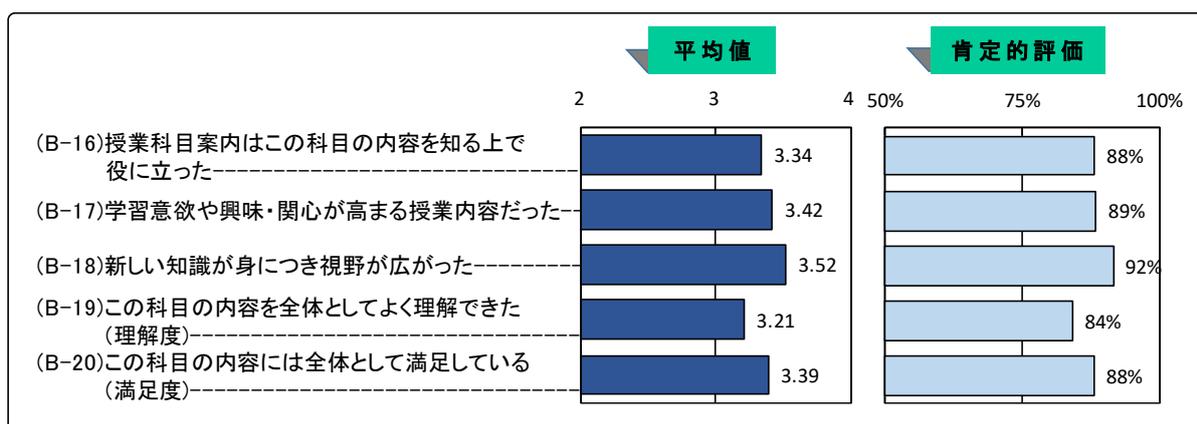
まず全体評価の各項目では(図2-16)、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」は92%と高い評価を得ていた。

反対に(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」はこの5項目の中では最も低かったが、84%と8割以上であった。

他(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」も9割弱と高率であった。

さらに(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」も88%と9割近くから支持を得ていた。

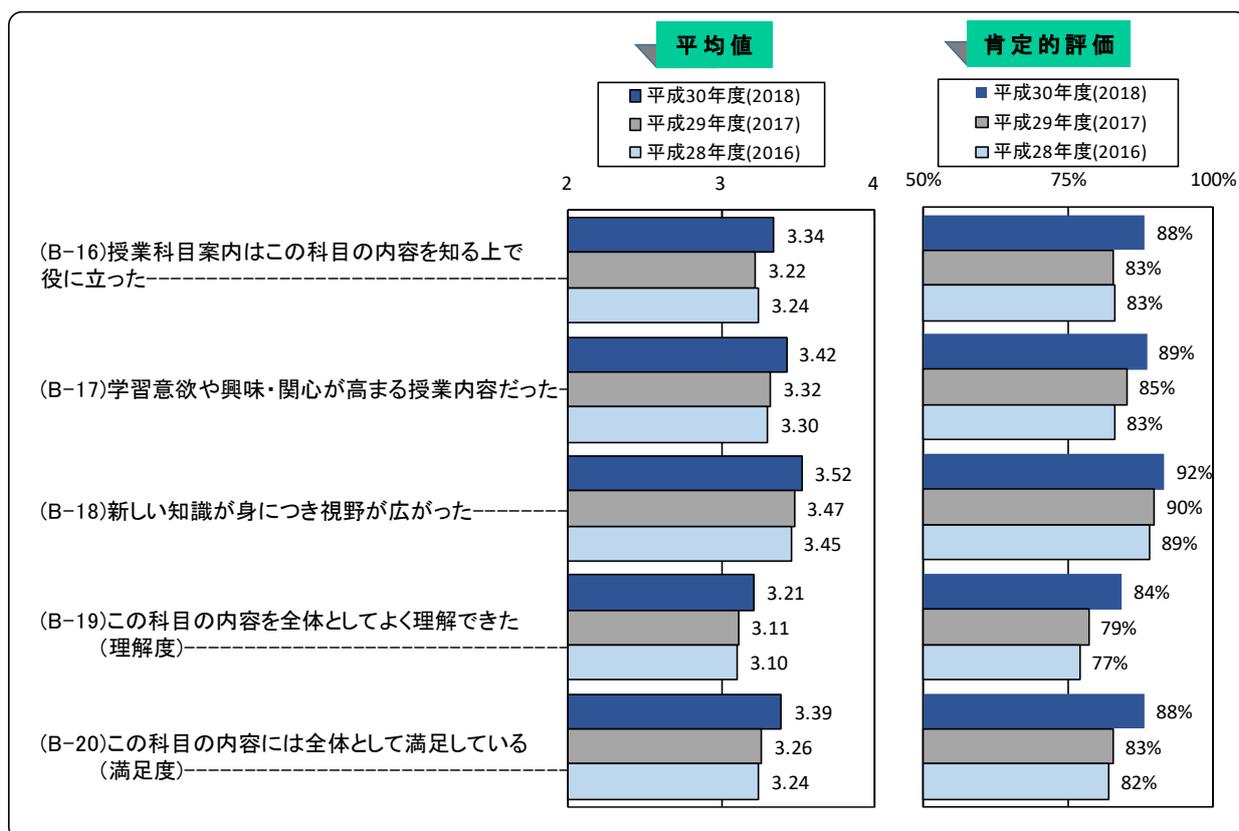
図2-16 【学部】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-17）、本年度は、どの項目も過去2年度から上昇がみられ、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」、(B-19)「この科目の内容を全体として理解できた（理解度）」、(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」の3項目は+5ポイントとなっている。

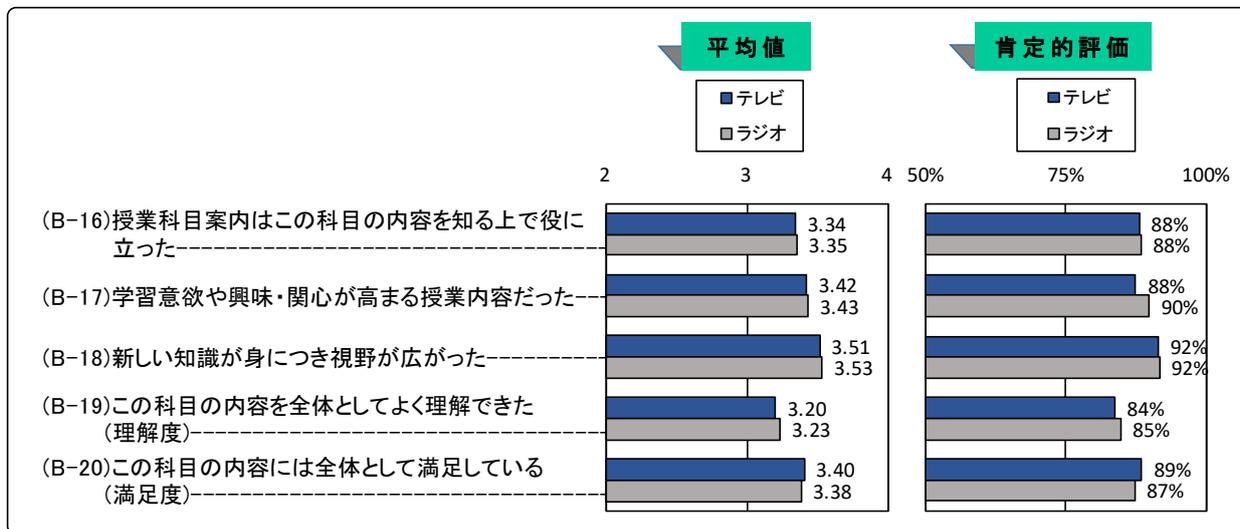
(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」も+4ポイントの89%、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」は、上昇幅が+2ポイントと小さいが92%に達していた。

図2-17【学部】回答者全体の全体評価（時系列）



メディア別に全体評価をみると（図2-18）、各項目共テレビ科目とラジオ科目に開きはなく、同水準であった。

図2-18 【学部】メディア別の全体評価



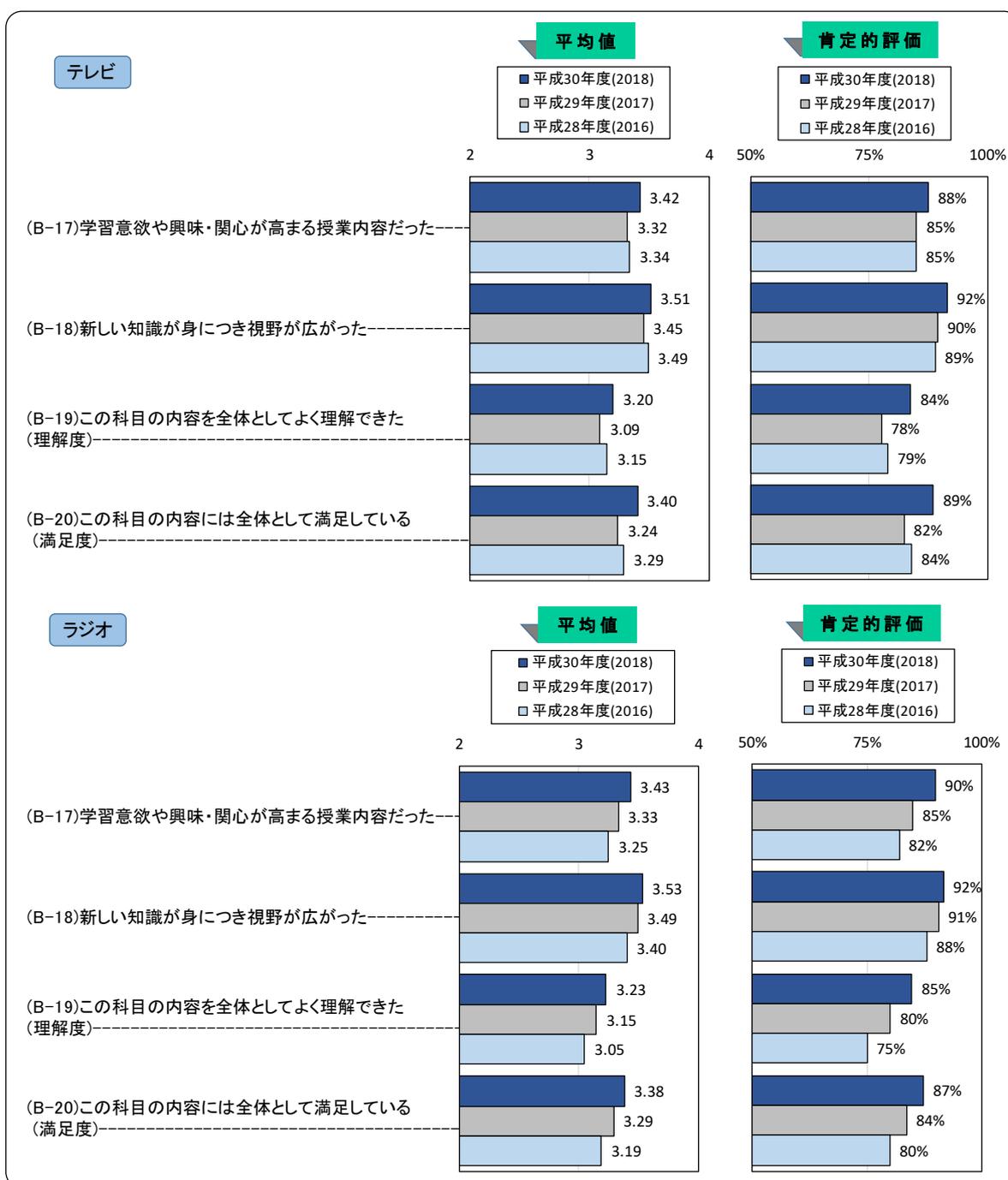
メディア別の全体評価を時系列でみると（図2-19）、テレビ科目では、本年度は昨年度までより、いずれの項目で支持率が上がっており、特に(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」で+5ポイントの上昇であった。

ラジオ科目の過去2年度との比較では、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」が昨年度と同水準で92%と9割を維持していた。

(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と(B-19)は過去2年度から5ポイントの上昇がみられ、(B-17)は90%に達していた。

(B-20)「(満足度)」も上昇傾向で87%の高評を得ていた。

図2-19 【学部】メディア別の全体評価

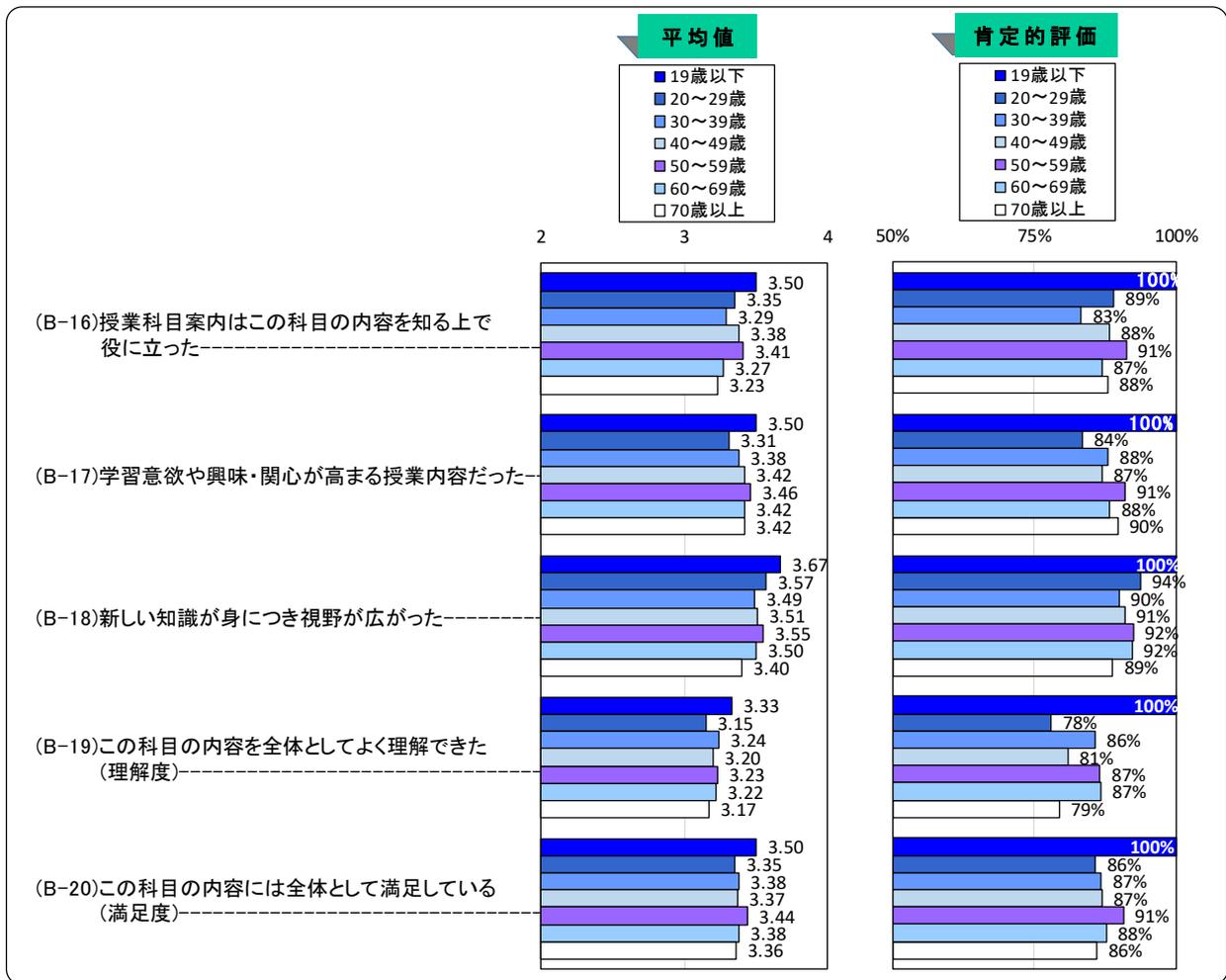


年齢階層別に全体評価（図2-20）をみると項目ごとでは（B-16）「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は50歳代がともに最も高く90%を超えていた。

（B-18）「新しい知識が身につく視野が広がった」は20歳代で94%と高く、70歳以上で89%と低かった。

（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」と（B-20）「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」では50歳代と60歳代が上位2位までを占め、理解度と満足度の高さがうかがえた。

図2-20【学部】年齢階層別の全体評価



所属コース別の全体評価では（図 2 - 2 1）、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」は「心理と教育」と「人間と文化」が、それぞれ 9 割越えで高い支持を得ていた。

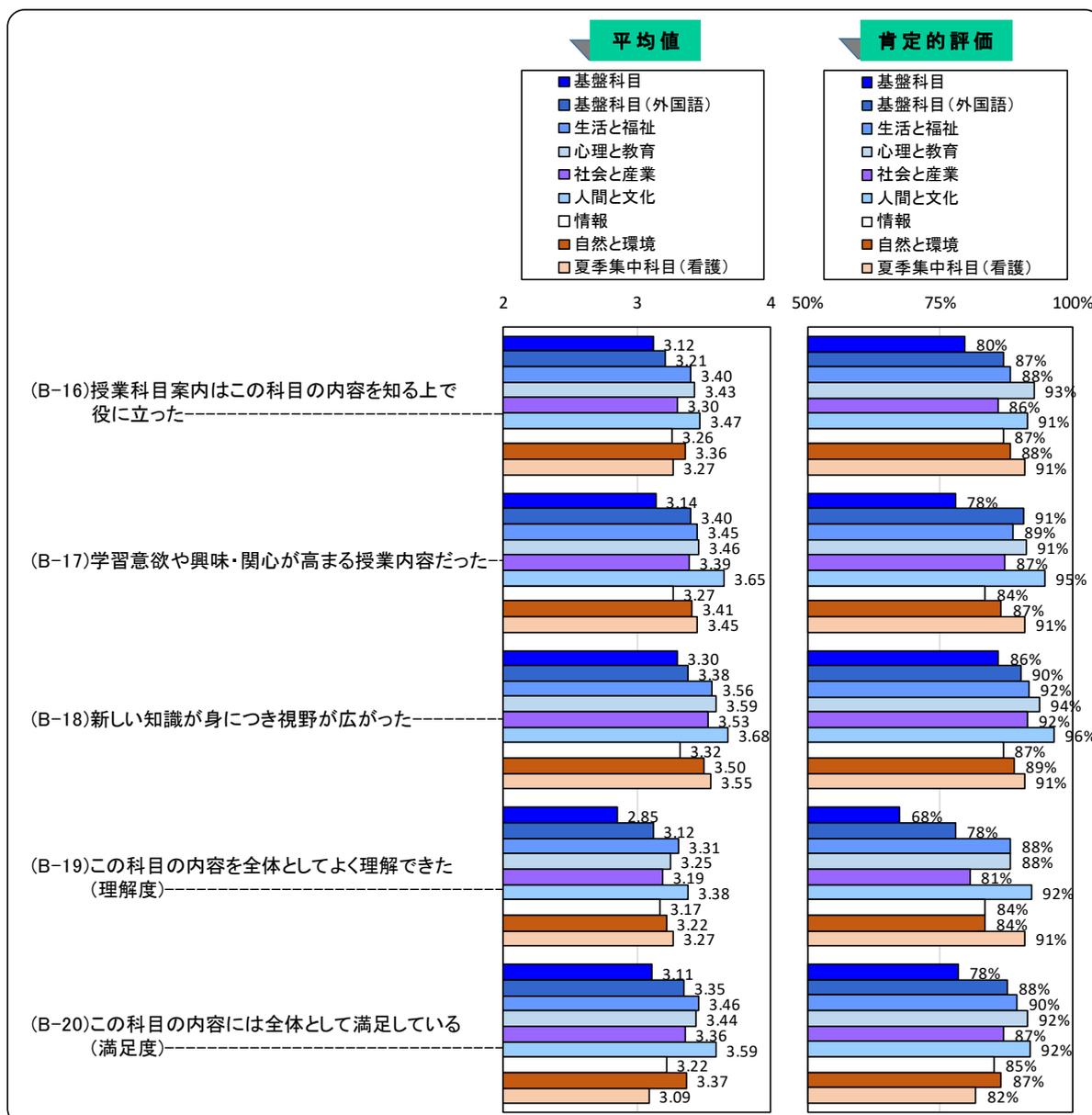
(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」では、「人間と文化」が 95%と突出しており、反対に「基盤科目」は 78%と大きく支持率を下げていた。

(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」については全ての所属コースの評価は高く、特に「人間と文化」が 96%と高率であった。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」と (B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」では、「人間と文化」が 9 割越えで高く、「基盤科目」が最も低かった。

(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」については、「心理と教育」も前述の「人間と文化」と同率で、92%の満足度を得ていた。

図 2 - 2 1 【学部】所属コース別の全体評価



職業別に全体評価をみると（次頁図 2 - 2 2）（B-17）「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」は、「看護師等」と「その他」以外の職業では 88～90%で高い評価であった。

（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」は「教員」が 9 割と最も高く、「その他」が 8 割に達せず最も低かった。

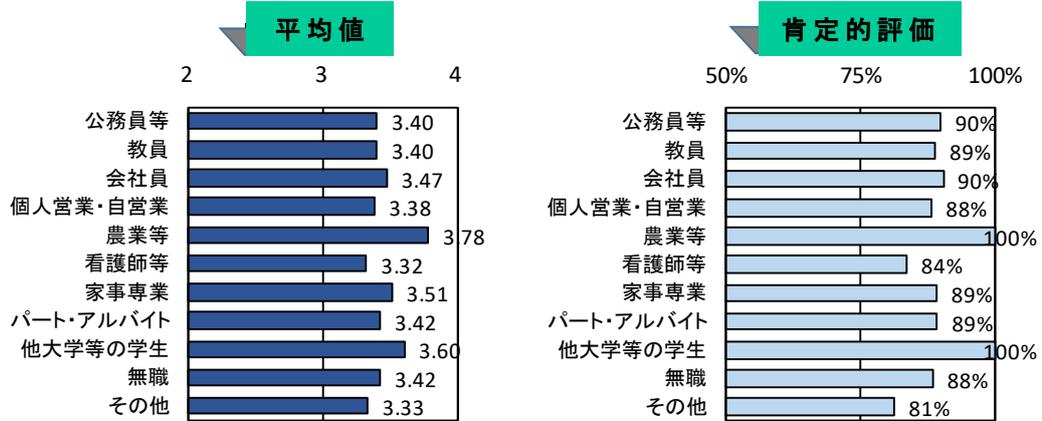
それ以外の職業の理解度は 8 割前半から中盤であった。

（B-20）「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」で 9 割を超えていたのは、「家事専業」（92%）と「教員」（90%）で、評価が低かったのは「看護師等」と「その他」（各 84%）であった。

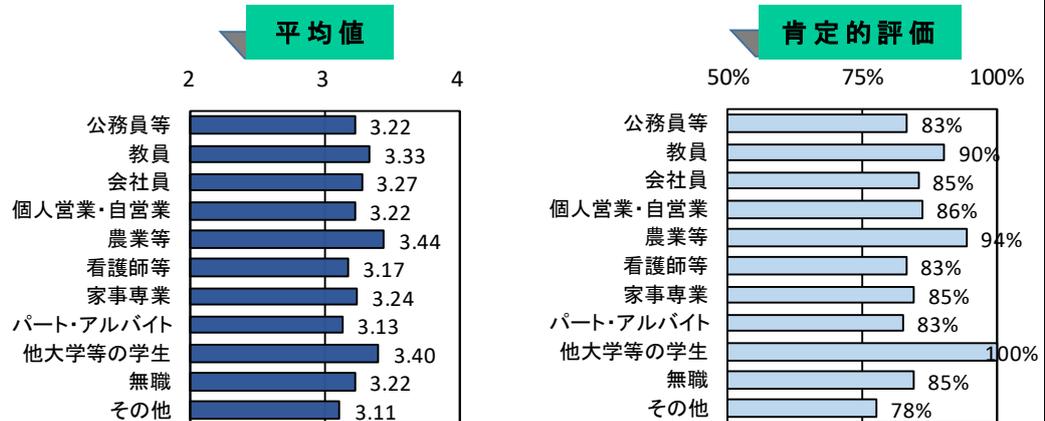
それ以外の職業も評価が高く 87%～89%であった。

図 2 - 2 2 【学部】職業別の全体評価

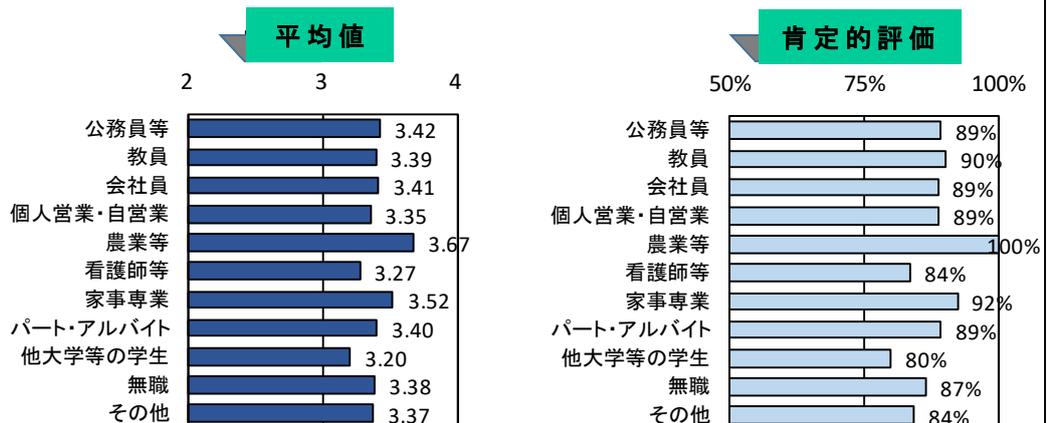
(B-17)学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



(B-19)この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)



(B-20)この科目の内容には全体として満足している(満足度)

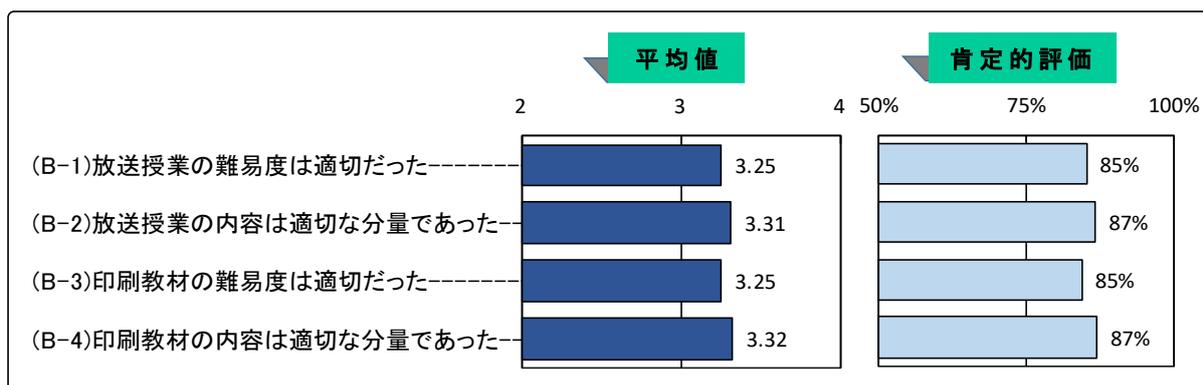


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量（図2-23）について、評価項目ごとにみていくことにする。

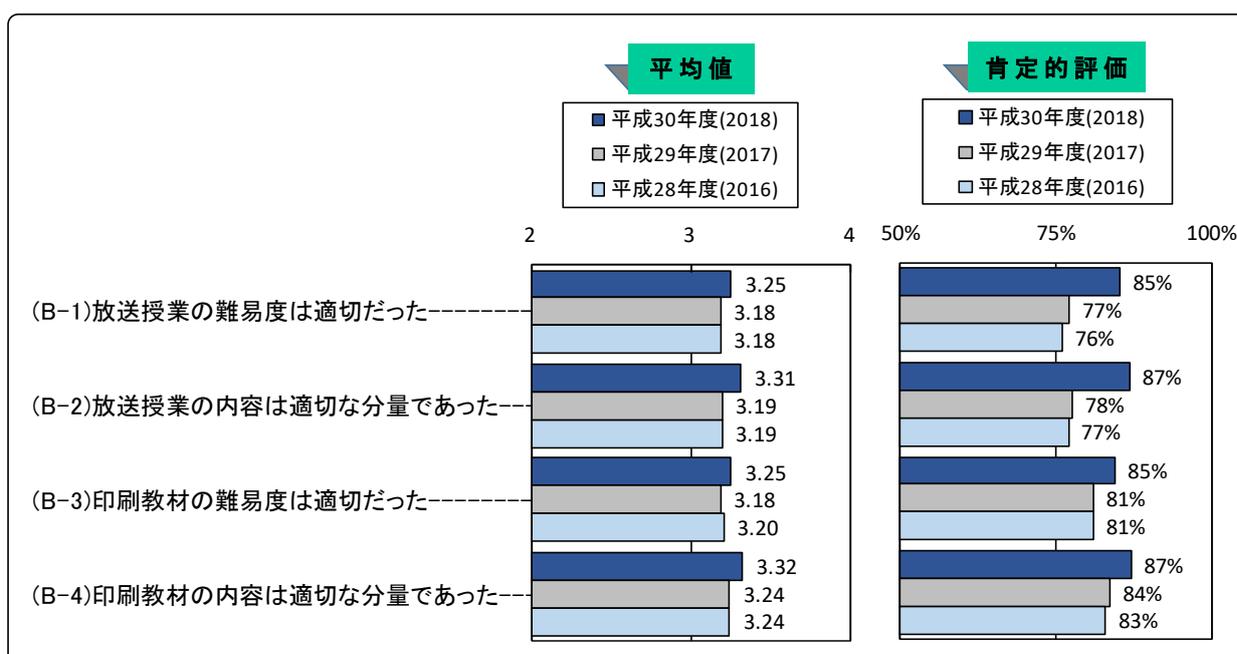
肯定的評価では全項目で85%～87%と8割半ばに達し、項目間に大きな差はみられなかった。

図2-23 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価



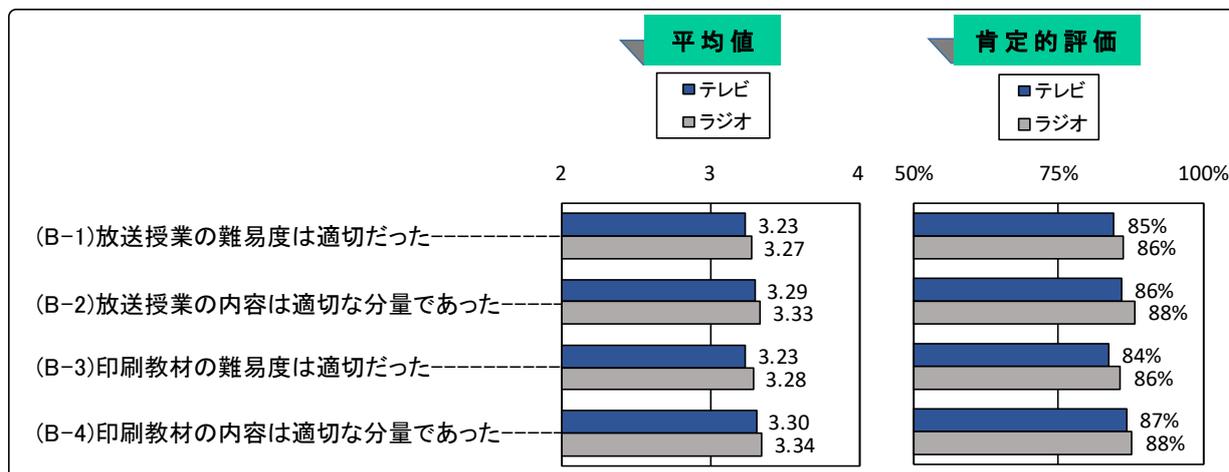
開設年度で比較すると（図2-24）、全項目で本年度の評価に上昇がみられ、特に(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」は上昇率が高く、順にその差は8ポイントと9ポイントであった。

図2-24 【学部】回答者全体の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



メディア別に授業の難易度・分量をみると（図2-25）、いずれの項目でもテレビ科目とラジオ科目に有意な差はなかったが、傾向としてはラジオ科目の値が高くなっていた。

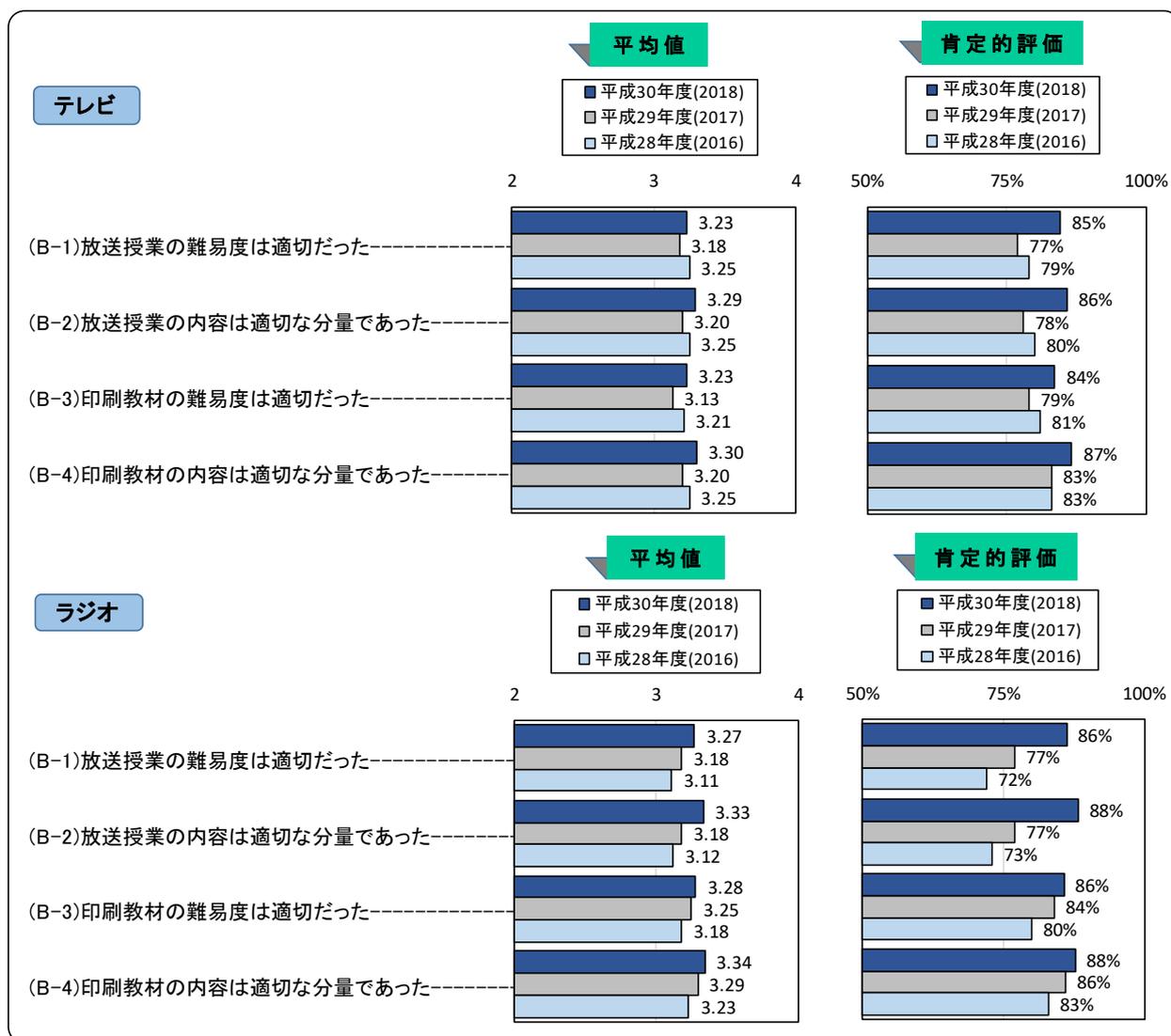
図2-25 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価



メディア別の授業の難易度・分量を開設年度で比較すると（図2-26）、テレビ科目では、全項目で本年度は上昇傾向となり、特に(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」は共に6ポイントアップと大きな差がみられた。

ラジオ科目もテレビ科目と同じ傾向で、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」の上昇幅は、過去2年度から順に9ポイントと11ポイントで、テレビ科目よりも高かった。

図2-26 【学部】メディア別の授業難易度・分量の評価（開設年度比較）



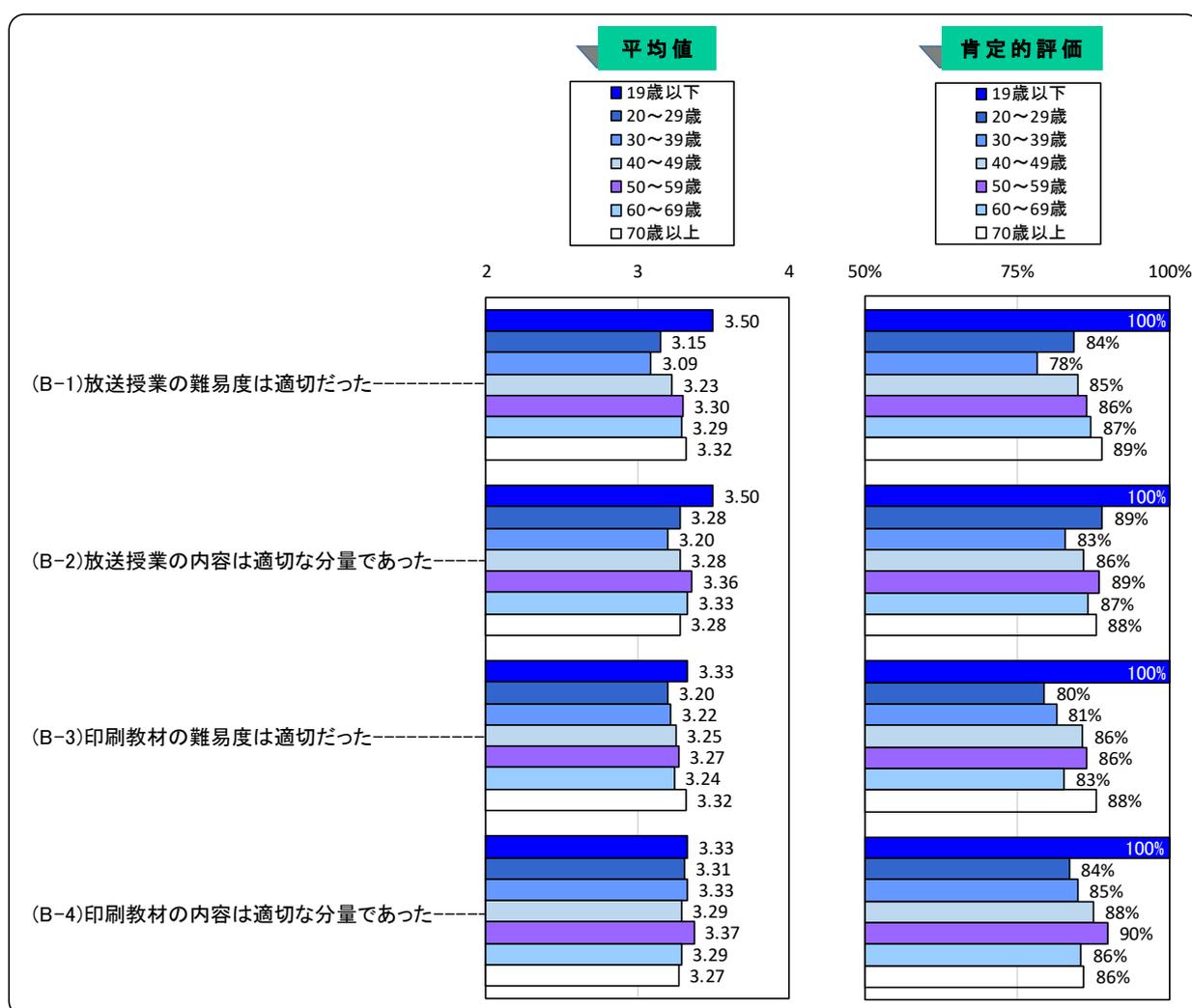
年齢階層別に授業の難易度・分量をみると（図2-27）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」に対する評価は30歳代(78%)から年齢の上昇と共に漸増傾向がみられ、70歳以上で89%に達していた。

(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」も30歳代(83%)の評価が低く、その他の年代からは86%～89%の評価を得ていた。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」は70歳以上(88%)で最も評価が高く、20歳代(80%)で低かった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」については、50歳代(90%)が最も高く、他の年代でも86%前後と高評を得ていた。

図2-27 【学部】 年齢階層別の授業難易度・分量の評価

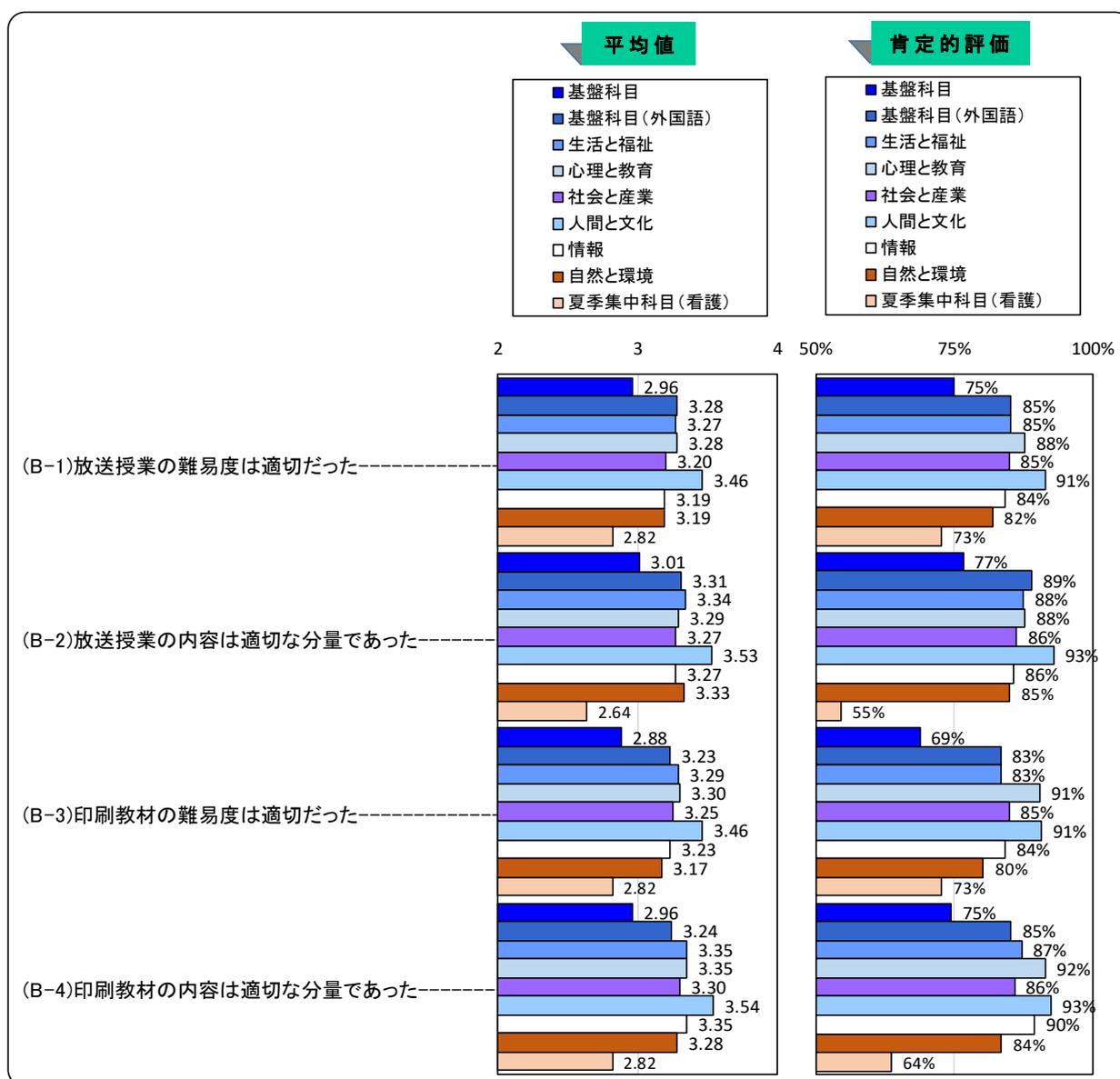


所属コース別に授業の難易度・分量をみると（図2-28）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」の放送授業は、両項目とも「人間と文化」の支持率が9割以上で最も高く、「基盤科目」が7割半ばでもっと低かった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」の印刷教材では、両方とも「心理と教育」「人間と文化」が9割越えで最も高く、「基盤科目」の評価が低かった。

この4項目全てで「基盤科目」の評価が他の科目に比べ極端に低いという傾向がみられた。

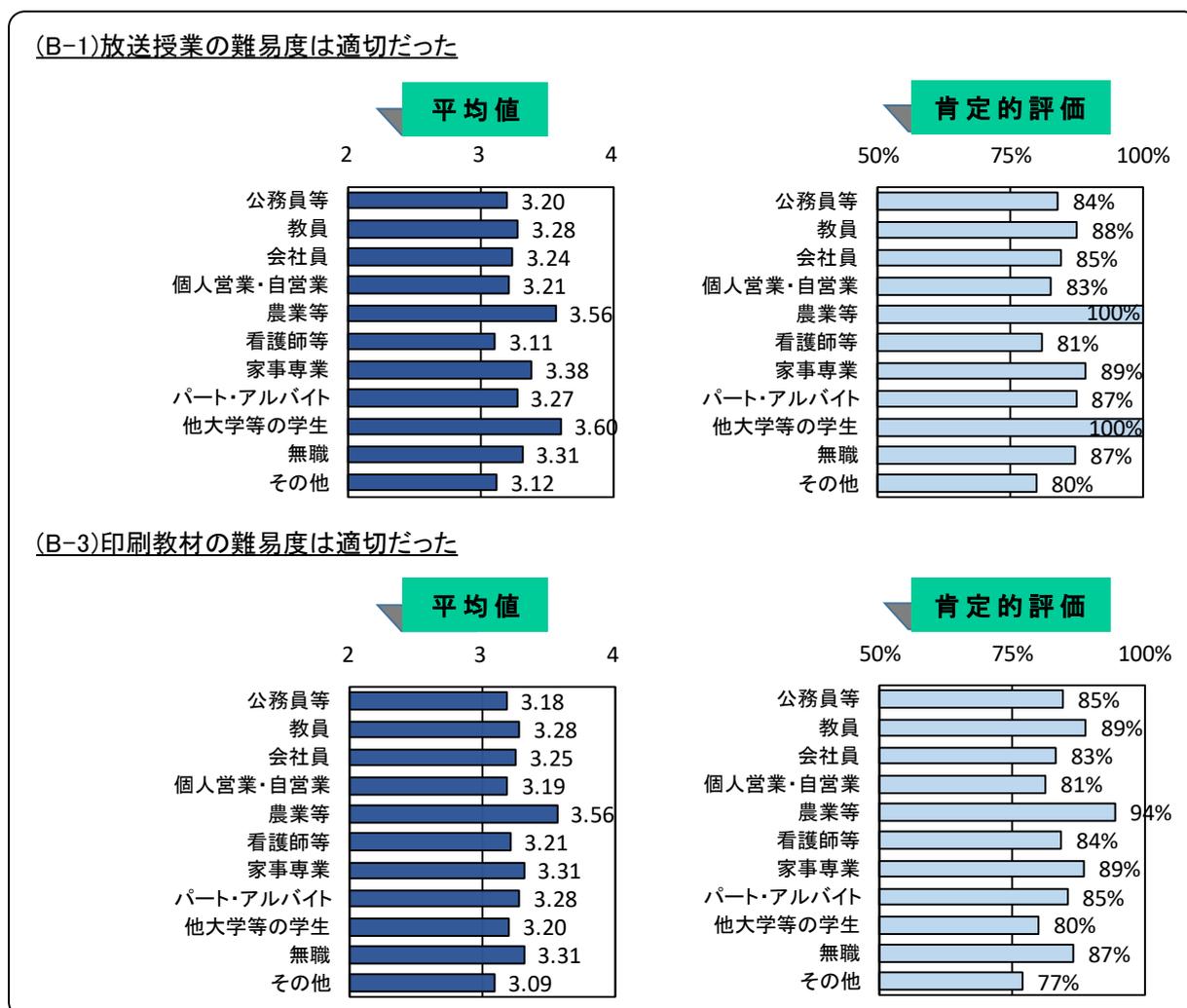
図2-28 【学部】所属コース別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度をみると（図2-29）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は、いずれも8割台の支持率だが、「家事専業」と「教員」は9割近くで評価が高く、「看護師等」と「その他」は80%そこそこの評価であった。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」については「教員」「家事専業」（各89%）で高く、「個人営業・自営業」と「その他」で低かった。

図2-29【学部】職業別の授業難易度の評価

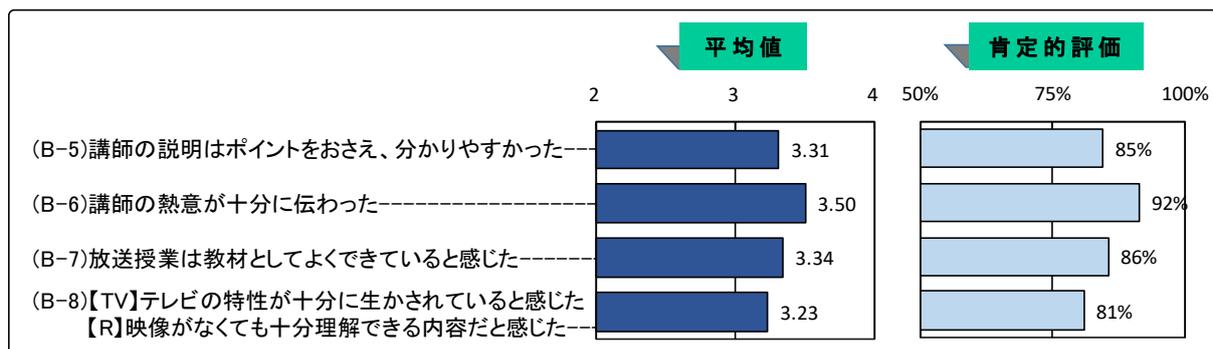


(3) 放送授業

ここからは放送授業について、評価項目ごとにみていくことにする。

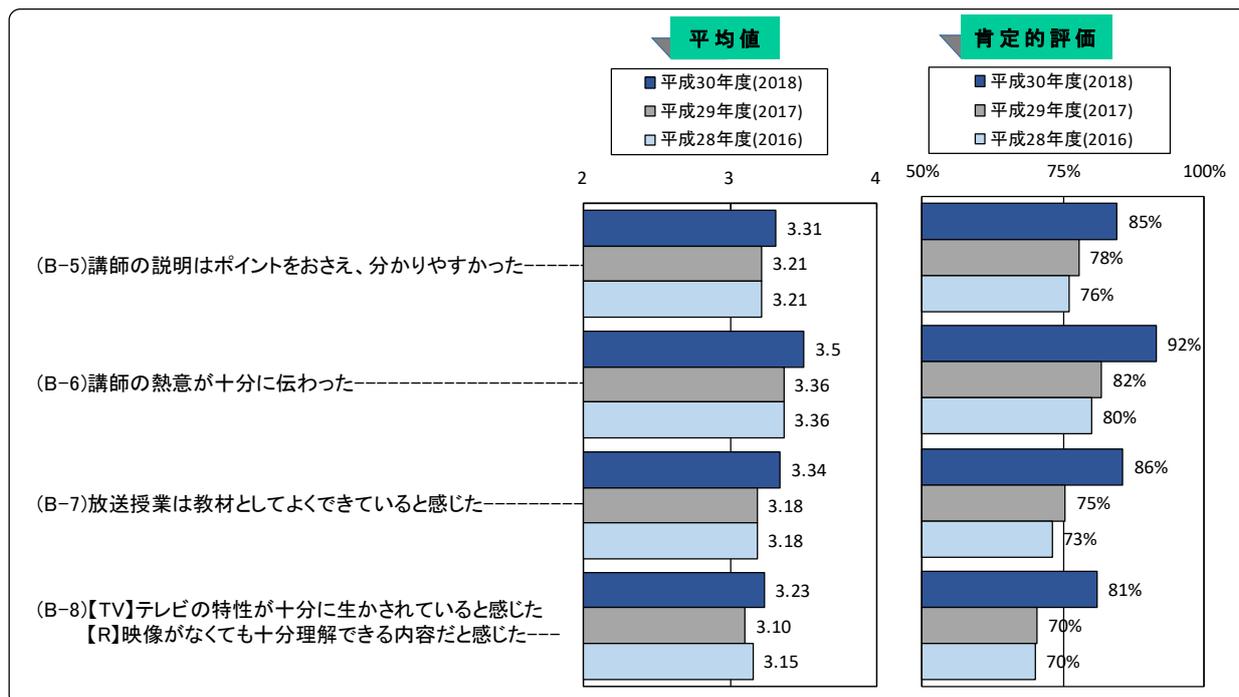
放送授業に関する評価項目（図2-30）は4項目とも8割以上の高い評価で、特に(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」が92%と最も高い支持を得ていた。

図2-30【学部】回答者全体の放送授業の評価



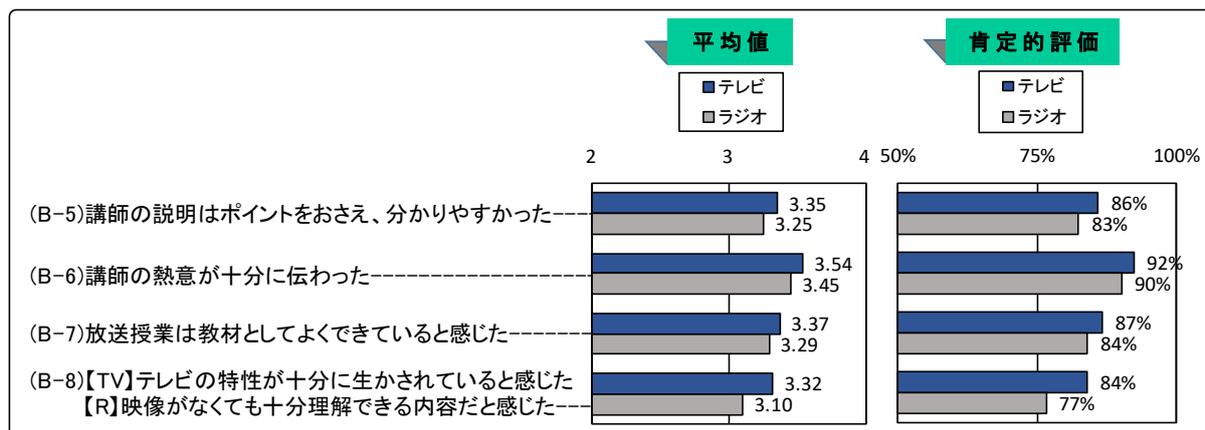
放送授業の評価を時系列でみると（図2-31）、4項目全てで昨年度より大きく支持率を伸ばしており、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」で+7ポイント、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」～(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」で10～11ポイントの大きな上昇幅がみられた。

図2-31 【学部】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



メディア別に放送授業の肯定的評価をみると（図 2 - 3 2）」、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、メディア別に差はほとんどなかったが、それ以外の 3 項目では、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」がテレビ科目の方がわずかに高く、(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では、テレビ科目が+7 ポイントと大きな差がみられた。

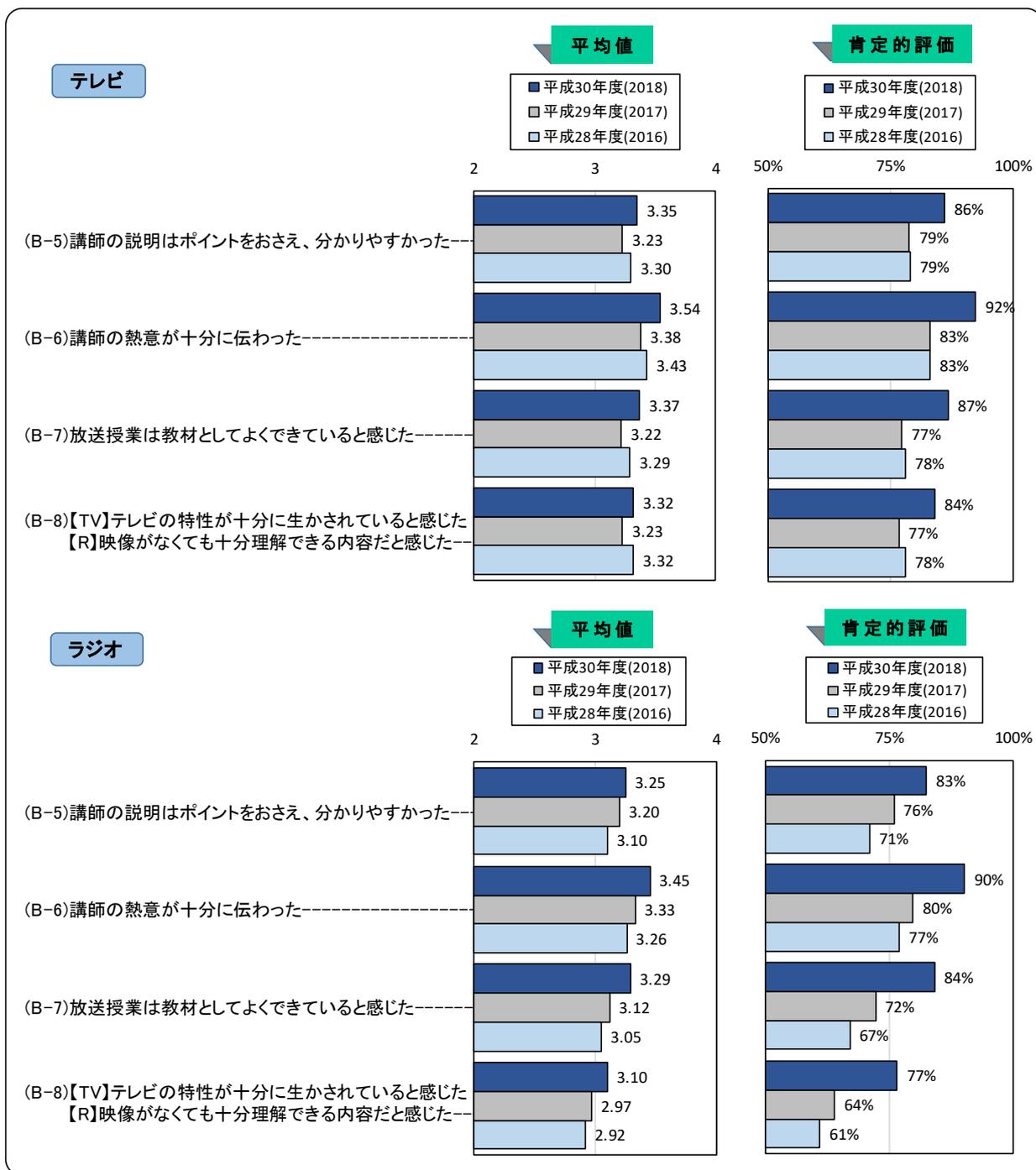
図 2 - 3 2 【学部】メディア別の放送授業の評価



また、メディア別に放送授業の評価を時系列でみると(図2-33)、テレビ科目では、本年度は過去2年度から大きく支持率を伸ばし、中でも(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は9ポイントの上昇で、9割前後から支持を得ていた。

ラジオ科目では、テレビ科目より本年度の上昇の幅が大きく、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は+7ポイント、残りの3項目では、10ポイント以上の大差がみられた。

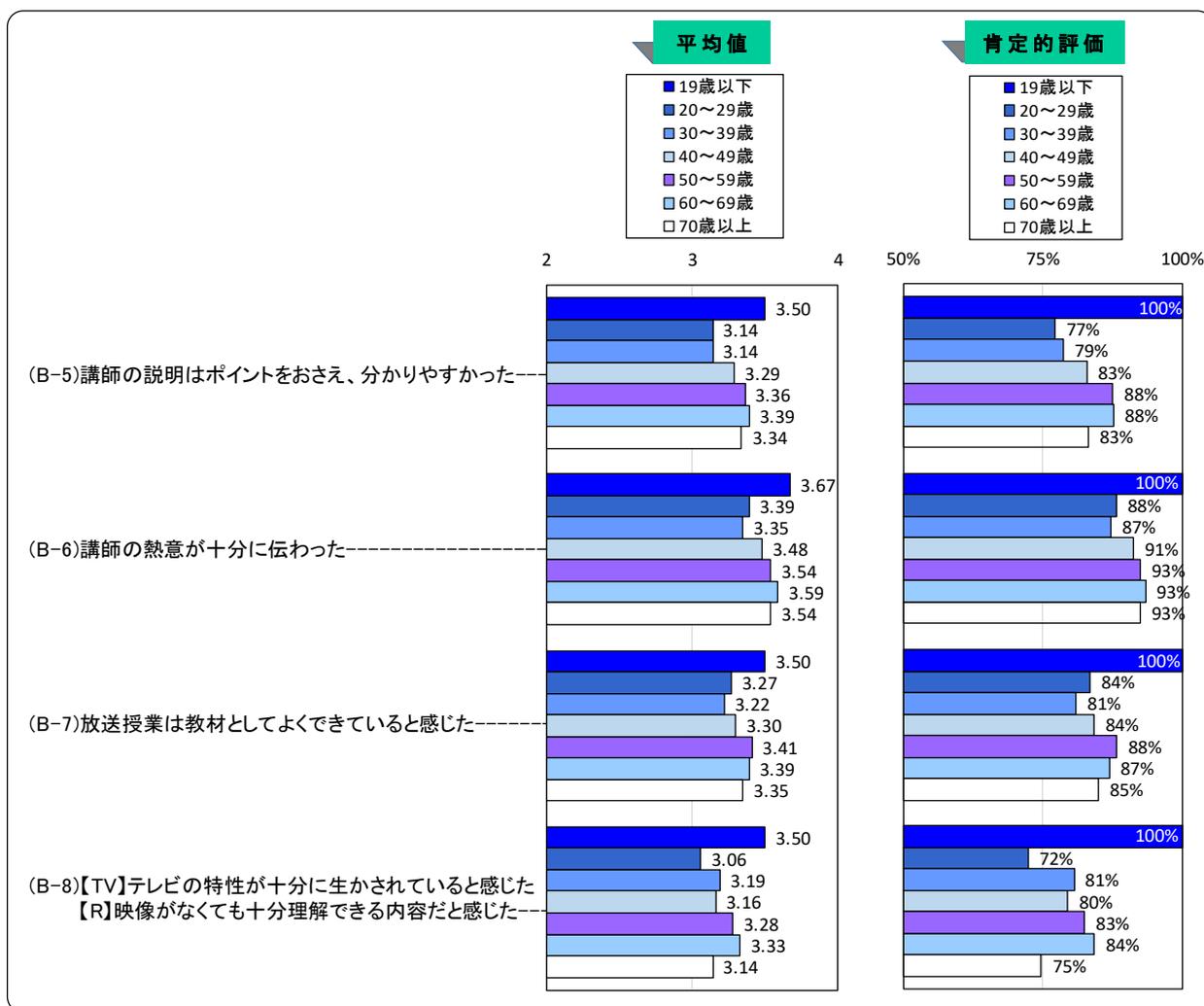
図2-33 【学部】メディア別の放送授業の評価(時系列)



年齢階層別に放送授業の評価をみると（図2-34）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」～(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」までは、20歳代、30歳代の若年層の評価がそれ以上の年代に比べ低く、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では、40歳代～70歳以上が9割に達していた。

(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は60歳代(84%)で最も高く、20歳代(72%)で低かった。

図2-34 【学部】年齢階層別の放送授業の評価

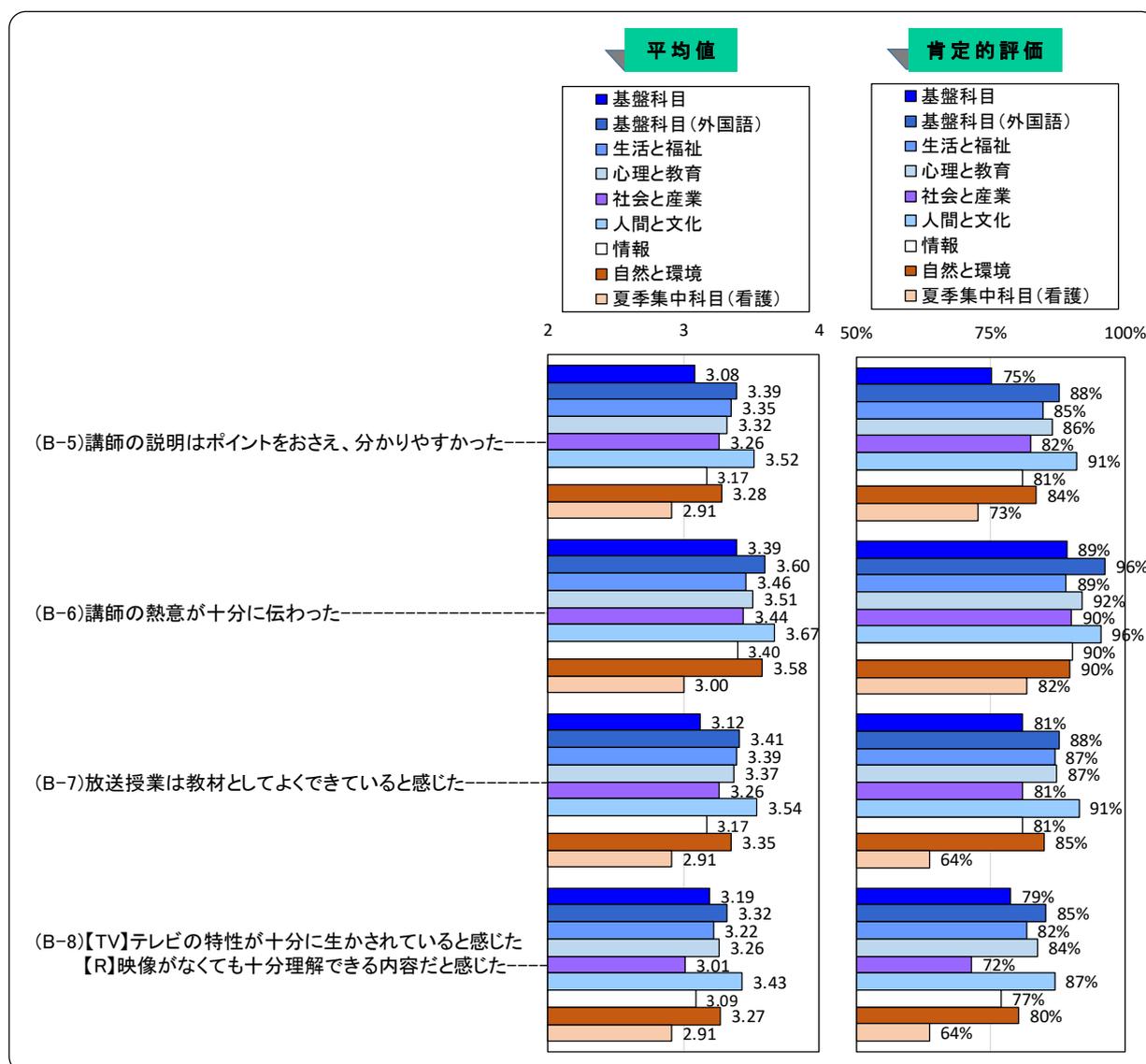


所属コース別に放送授業の評価をみると（図2-35）、4項目とも「人間と文化」と「基盤科目(外国語)」の評価が高かった。

反対に評価が低かったのは、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では「基盤科目」で、「B-7」については、他に「社会と産業」「情報」が低調であった。

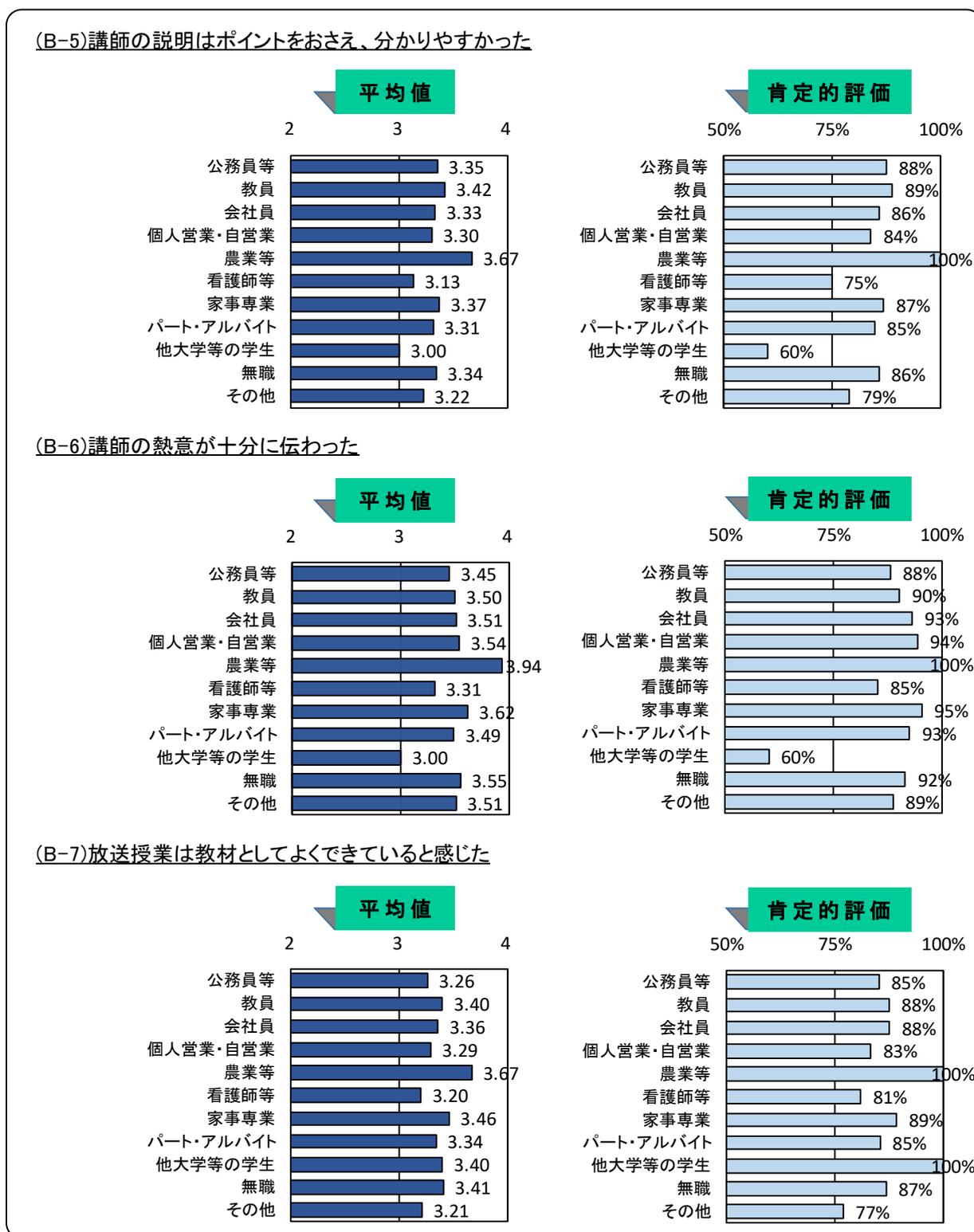
(B-8)「テレビの特性が十分に生かされていると感じた／(ラジオ)映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」では「社会と産業」(72%)が低く、この4項目を通じて最も低くかった。

図2-35 【学部】所属コース別の放送授業の評価



職業別に放送授業の評価をみると（図2-36）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」で「看護師等」と「その他」の評価が低く、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では「看護師等」は85%の支持率であったが、他の職業に比べると3ポイント以上低かった。反対に前掲の「B-6」と「B-7」で高い評価をしていたのは「家事専業」であった。

図2-36 【学部】職業別の放送授業の評価



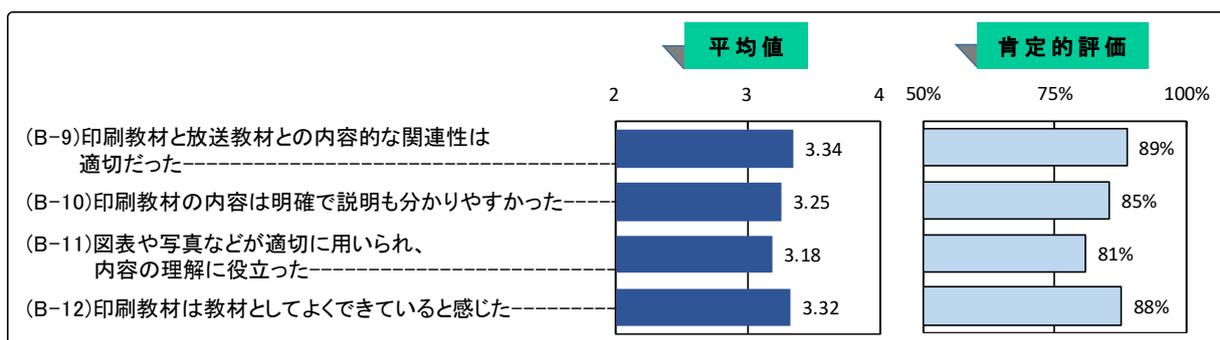
(4) 印刷教材

ここからは印刷教材について、評価項目ごとにみていくことにする。

印刷教材の評価項目では（図 2－3 7）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と (B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は約 9 割で高い支持率であった。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は他の項目と比べると 81%と評価を下げていた。

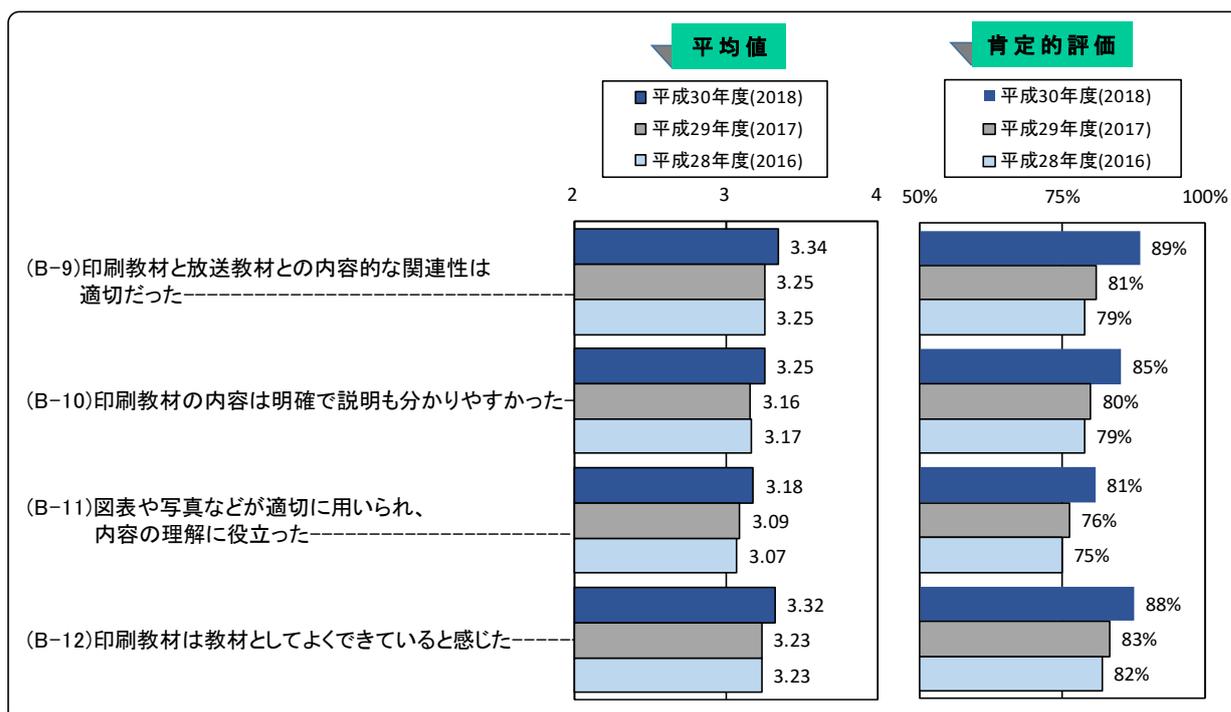
図 2－3 7 【学部】 回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列でみると（図 2－3 8）4 項目とも年度の経過とともに評価は上昇傾向で、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」で、本年度の上昇幅が一段と大きく、8ポイント増の 89%に達していた。

それ以降の 3 項目でも本年度は、5ポイントの上昇であった。

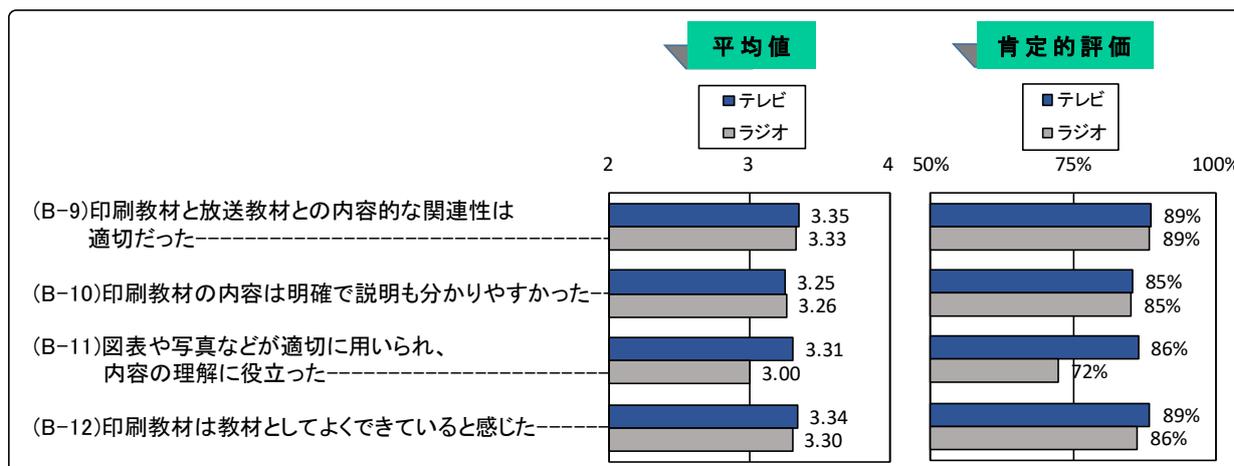
図 2－3 8 【学部】 回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



メディア別に印刷教材の評価をみると（図2-39）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」はメディア別に同じ評価であったが、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」はラジオ科目の特質からか、その支持率はテレビ科目を大きく下回り72%であった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」もラジオ科目の支持率はテレビ科目よりわずかに下回っていた。

図2-39 【学部】メディア別の印刷教材の評価

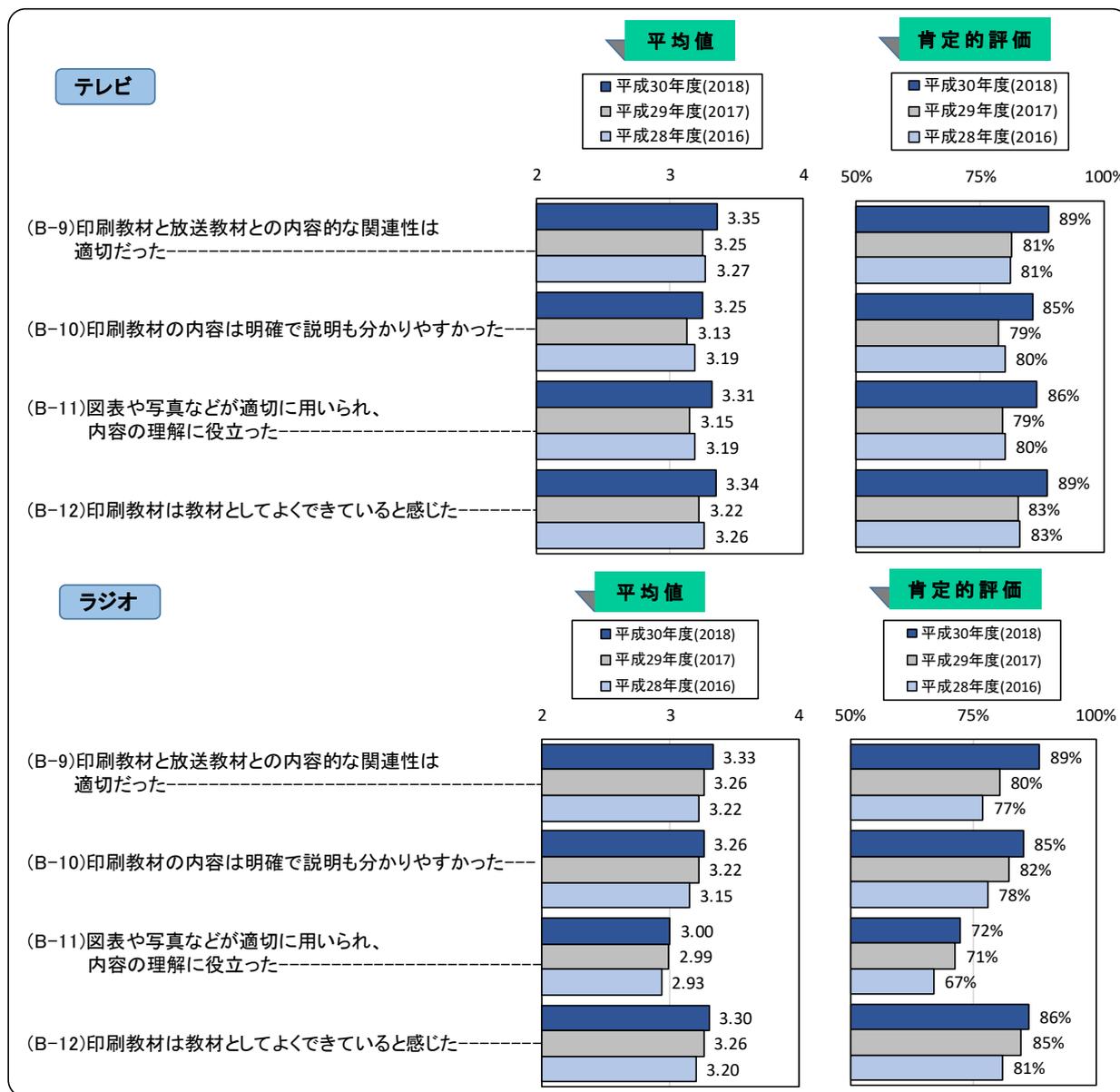


メディア別の印刷教材の結果を時系列で見ると（図2-40）、本年度のテレビ科目は全ての項目を通じて5ポイント以上の上昇で、中でも(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は+8ポイントとその幅は大きかった。

ラジオ科目についても過去2年度と比べ「B-9」は、9ポイントアップと上昇幅が更に大きかった。

同様に(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は+3ポイント、(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」と(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は昨年度と同じレベルであった。

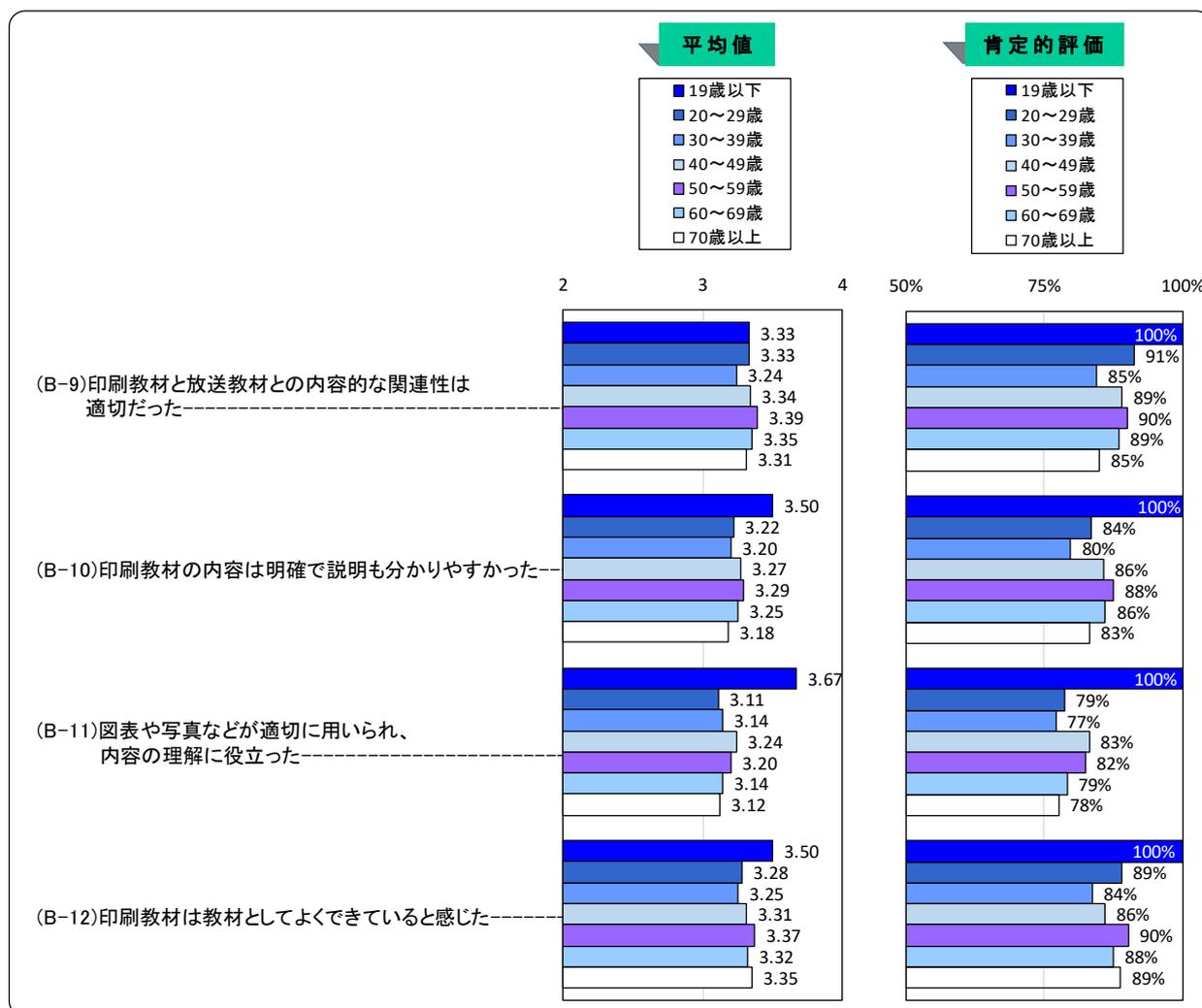
図2-40 【学部】メディア別の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別に印刷教材の評価をみると（図2-41）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」と(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」では20歳代、40歳代、50歳代の評価が高く、8割半ばから9割に及んでいた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」では40歳代、50歳代の8割が評価、(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は50歳代の評価が9割に達していた。

図2-41 【学部】年齢階層別の印刷教材の評価



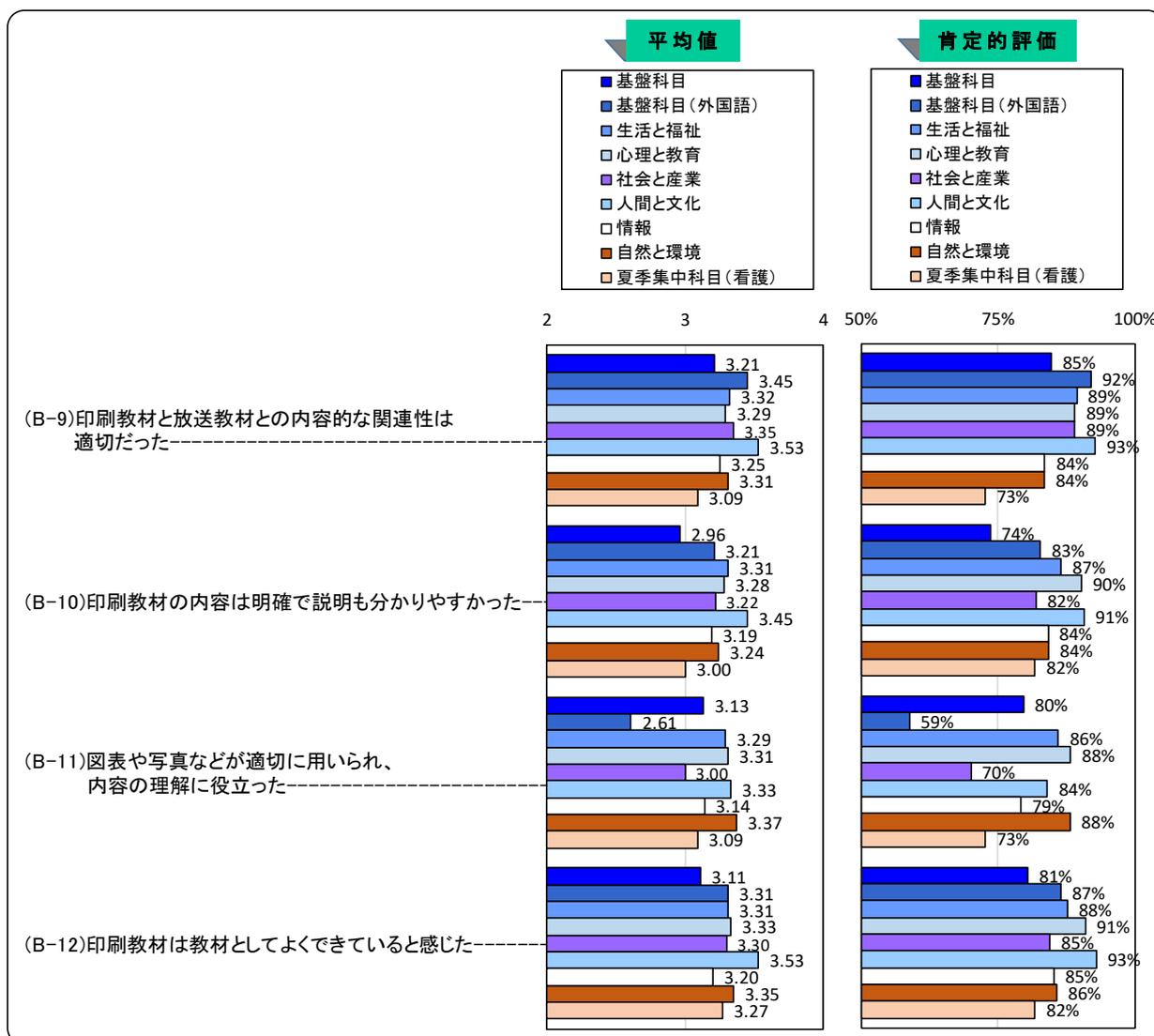
所属コース別に印刷教材の評価をみると（図2-42）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」については「基盤科目」と「情報」、「自然と環境」の評価が8割半ばで評価が低く、それ以外のコースは9割であった。

(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は、「心理と教育」「人間と文化」が9割と高く、「基盤科目」で74%と低かった。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、「心理と教育」「自然と環境」が共に88%と高く、「基盤科目(外国語)」で59%と極端に低かった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は「心理と教育」、「人間と文化」が90%越えて評価が高かった。

図2-42 【学部】所属コース別の印刷教材の評価

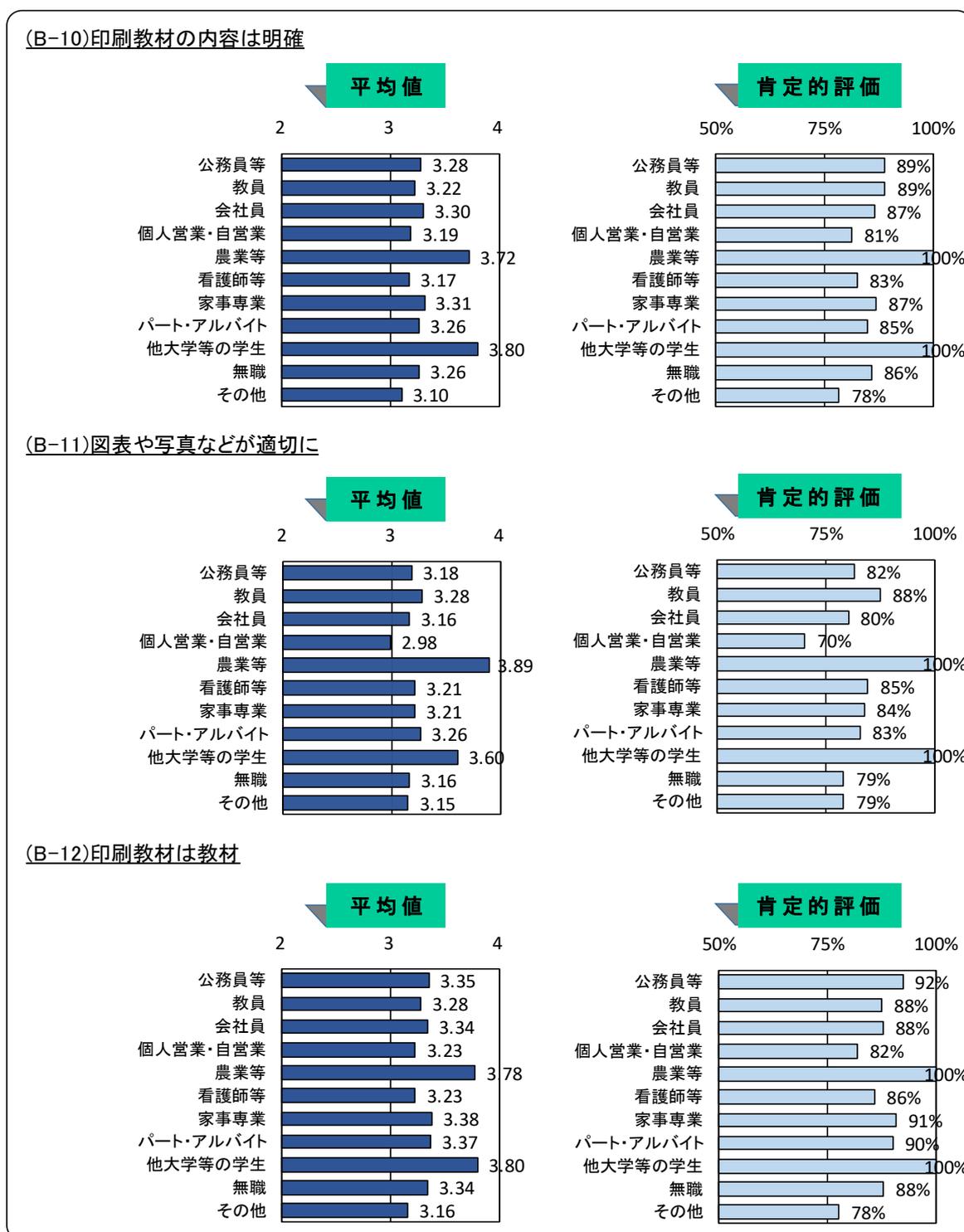


職業別の印刷教材の評価では（図 2 - 4 3）、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は、「個人営業・自営業」「看護師等」「その他」は 80%前後と評価が低く、それ以外の職業は 85%～89%と高く、評価は 2 分化されていた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は、「個人営業・自営業」が 70%と極端に低く、それ以外の職業は 8 割から 9 割近くの評価であった。

(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」は、「公務員等」「家事専業」「パート・アルバイト」から 9 割の支持を得ていた。

図 2 - 4 3 【学部】職業別の印刷教材の評価



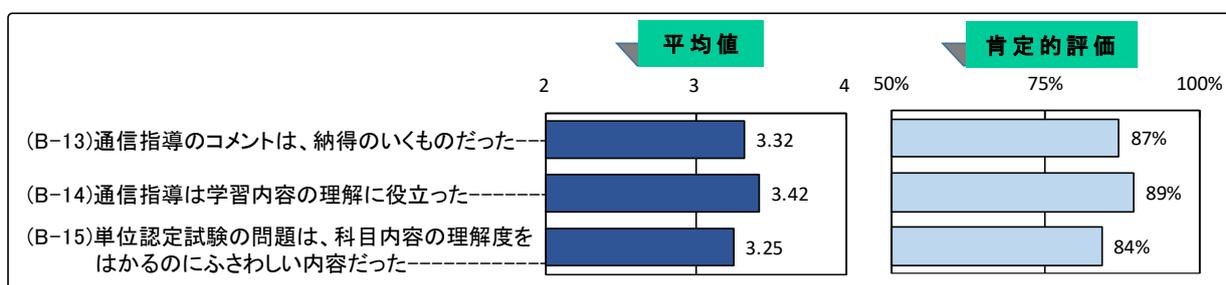
(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとにみていくことにする。

通信指導については(図2-44)、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」がそれぞれ87%、89%と9割近い評価を得ていた。

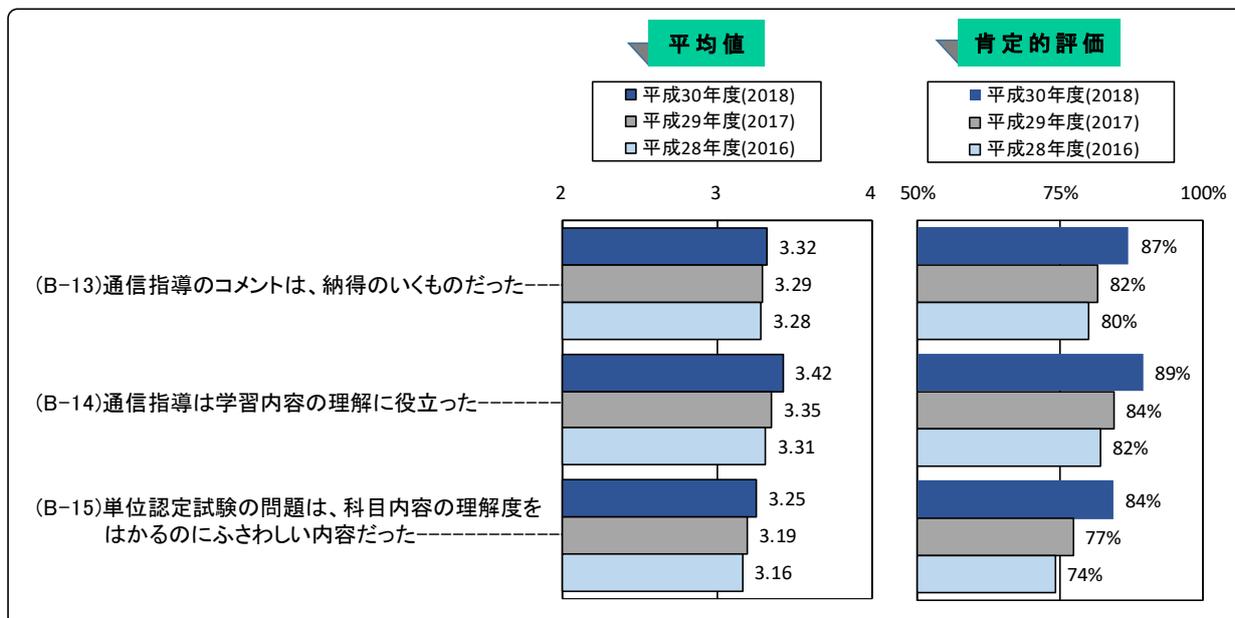
(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」は84%と前掲の2項目より評価が下回っていた。

図2-44【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列でみると(図2-45)、本年度は、前年度までから5ポイント以上の大幅な上昇であった。

図2-45【学部】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価(時系列)

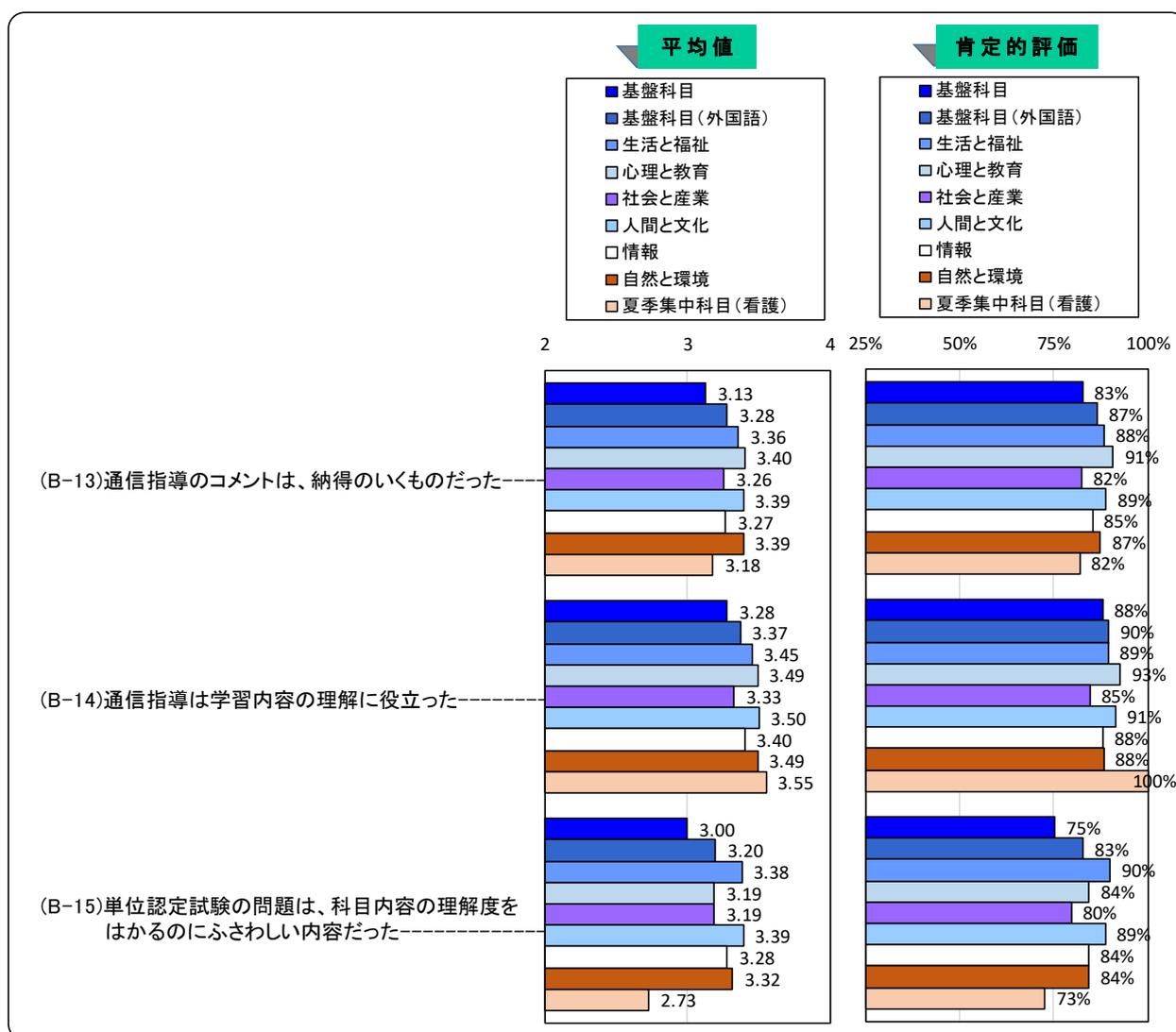


所属コース別に通信指導・単位認定試験の評価をみると（図2-46）、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は、「心理と教育」が唯一9割で最も高く、反対に「社会と産業」が8割の前半と評価が低かった。

(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」でも「心理と教育」の評価が93%と高く、それ以外の科目からは、85%以上の評価を得ていた。

(B-15)「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」では、「生活と福祉」「人間と文化」が9割と上位で、「基盤科目」が75%と最も低かった。

図2-46 【学部】所属コース別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ－１－４．学部の重回帰分析

重回帰分析とは、数量データである目的変数と説明変数の関係を調べ、重回帰式（モデル式）を導き出す解析手法である。

今回の調査では全体の満足度 B-(20)「この科目の内容には全体として満足している」を目的変数とし、それ以外の各項目を説明変数として分析を試みる。

本調査の選択肢はカテゴリーデータであるが、平均値の算出と同様『あてはまる→4』のように数値ポイント化することで数量として扱い、重回帰分析を適用する。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知ることが目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-(20)
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 A①～③、B(1)～(19) : 全 22 問
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{22}x_{22}$ (説明変数が全 22 問の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると、全体の満足度を表すために適した重回帰式を得られないことが経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行うことにする。

使用するデータは質問項目 I . A と B の全設問を全て回答した 2,136 人のローデータを使用する。(本年度はオンライン利用の調査で全員が全設問を回答していた。)

■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与率)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.726 となった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関(自己相関)を示す指標で 0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差(誤差)に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 2.013 となった。

◆分析精度

決定係数	0.728
自由度修正済み決定係数	0.726
ダーヴィンワトソン比	2.013
残差の標準偏差	0.407

今回の重回帰分析では分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1%ある事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p値	判定
全体変動	1290.801	2135				
回帰による変動	939.568	14	67.112	405.271	0.000	[**]
回帰からの残差変動	351.233	2121	0.1656			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合い(寄与率)がこれで分かる。

標準偏回帰係数が最も高かったのはB-17で0.270、次いでB-19の0.219、他にB-18(0.128)、B-12(0.119)、B-15(0.076)と続いた。

(表最下段の定数項とは説明しきれない残りの部分である。)

説明変数の影響力の度合いを比較するために、表中の標準偏回帰係数の中で絶対値が最も小さいB-16(0.025)とそれ以外の標準偏回帰係数がB-16の何倍になるか算出してみた。その結果、高い順にB-17:11倍、B-19:9倍、B-18:5倍、B-12:5倍、B-15:3倍となった。

上位2項目の「B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」と「B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」が突出しているため、「全体の満足度」を上げるためには、この2項目の肯定的評価を上げる事が最も効果的であると考えられる。

上位2項目の肯定的評価についてみてみるとB-17:89%、B-19:84%で、B-17は受講者の9割から支持率を得ているため、評価を高めるのは容易ではないと思われる。

(他の上位3,4位の肯定的評価B-18:92%、B-12:88%でいずれも9割前後。)

従って、B-17の評価の維持と、B-19の肯定的評価を上げるための施策に取り組むことが有効と考えられる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定
B-20.全体評価	0.270	B-17 学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった	[**]
	0.219	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[**]
	0.128	B-18 新しい知識が身につく視野が広がった	[**]
	0.119	B-12 印刷教材は教材としてよくできていると感じた	[**]
	0.076	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった	[**]
	0.067	B-5 講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	[**]
	0.054	B-4 印刷教材の内容は適切な分量であった	[**]
	0.051	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[**]
	0.042	B-14 通信指導は学習内容の理解に役立った	[**]
	0.033	A-1 全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ	[]
	0.032	B-3 印刷教材の難易度は適切だった	[]
	0.025	B-16 授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った	[]
	-0.026	A-2 「放送授業を十分に視聴した」	[]
	-0.029	A-3 「印刷教材を熱心に学習した」	[]
	定数項	[**]	

学部の重回帰分析の最後に施策を進めていく上で、役に立つと思われる、B-19（理解度）と相関の高い項目を上位9位までを挙げることにする。

【学部】B-19の理解度と相関の高い上位9項目

順位	項目名	B-19との 偏相関係数	判定
1	A-1.全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ	0.139	[**]
2	B-15.単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	0.125	[**]
3	B-10.印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	0.115	[**]
4	B-1.放送授業の難易度は適切だった	0.089	[**]
5	B-5.講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった	0.077	[**]
6	B-4.印刷教材の内容は適切な分量であった	0.059	[**]
7	B-3.印刷教材の難易度は適切だった	0.055	[*]
8	B-8.【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた ／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた	0.052	[*]
9	A-3.印刷教材を熱心に学習した	0.051	[*]
参考	B-20	0.266	[**]

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

Ⅱ－２．大学院の分析結果

Ⅱ－２－１．項目平均から見た全体的傾向

評価項目の内容ごとに回答者全体の平均値と肯定的評価を A-1～A-3 等の複数の項目の平均を算出しグラフ化（図 2－47）した。

学部同様、肯定的な評価（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）の方が（例えば回答者の 80%）イメージしやすく、下図左側の平均値と肯定的評価に齟齬が生じた場合、どちらを採用するか合理的に判断出来ないため、コメントについては肯定的評価を用いて、平均値は参考値として扱っていきたい。

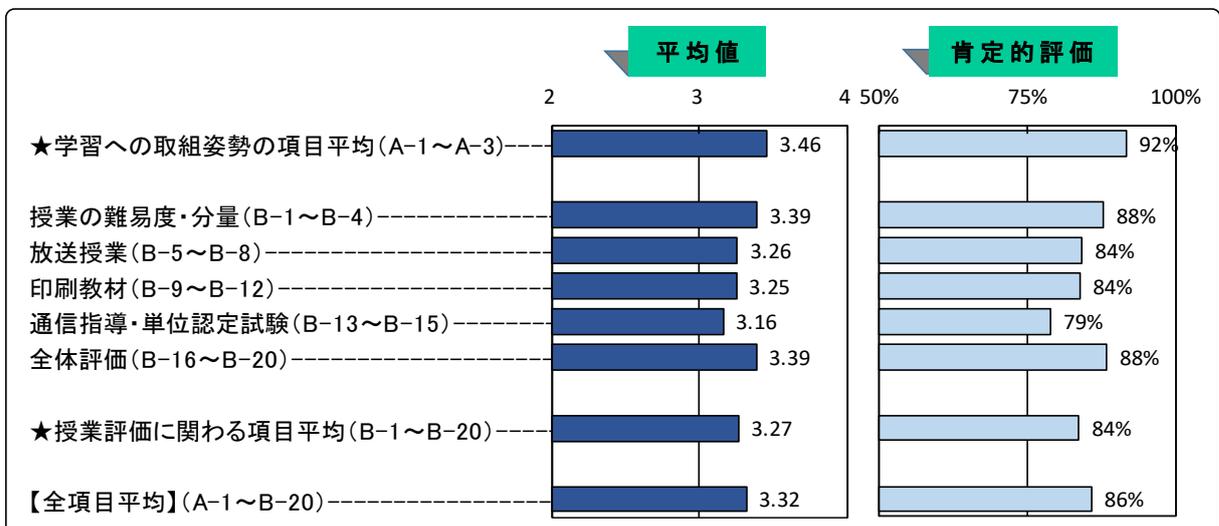
また、新規開設科目の年度比較は、比率の差の検定結果から、大学院は、学部ほど回答者数が多くないため（2018 年 76 人、2017 年度 705 人、2016 年度 453 人）、本年度と昨年度の比較では概ね 6 ポイントの差で有意となったため、6 ポイント以上で「差がある」事にする。

以下の 8 項目の中でそれぞれが重複しない、上から 1 番目～6 番目の項目で 9 割前後の高評価を得ていたのは『学習への取組み姿勢』（92%）、『授業の難易度・分量』（88%）、『全体評価』（88%）であった。

次に 8 割半ばの評価を得たのが『放送授業』『印刷教材』（各 84%）の 2 項目、最も評価が低かったのが『通信指導・単位認定試験』（79%）であった。

『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』は 84%、『全項目平均』（A-1～B-20）は 86% であった。

図 2－47 【大学院】項目平均による全体的傾向



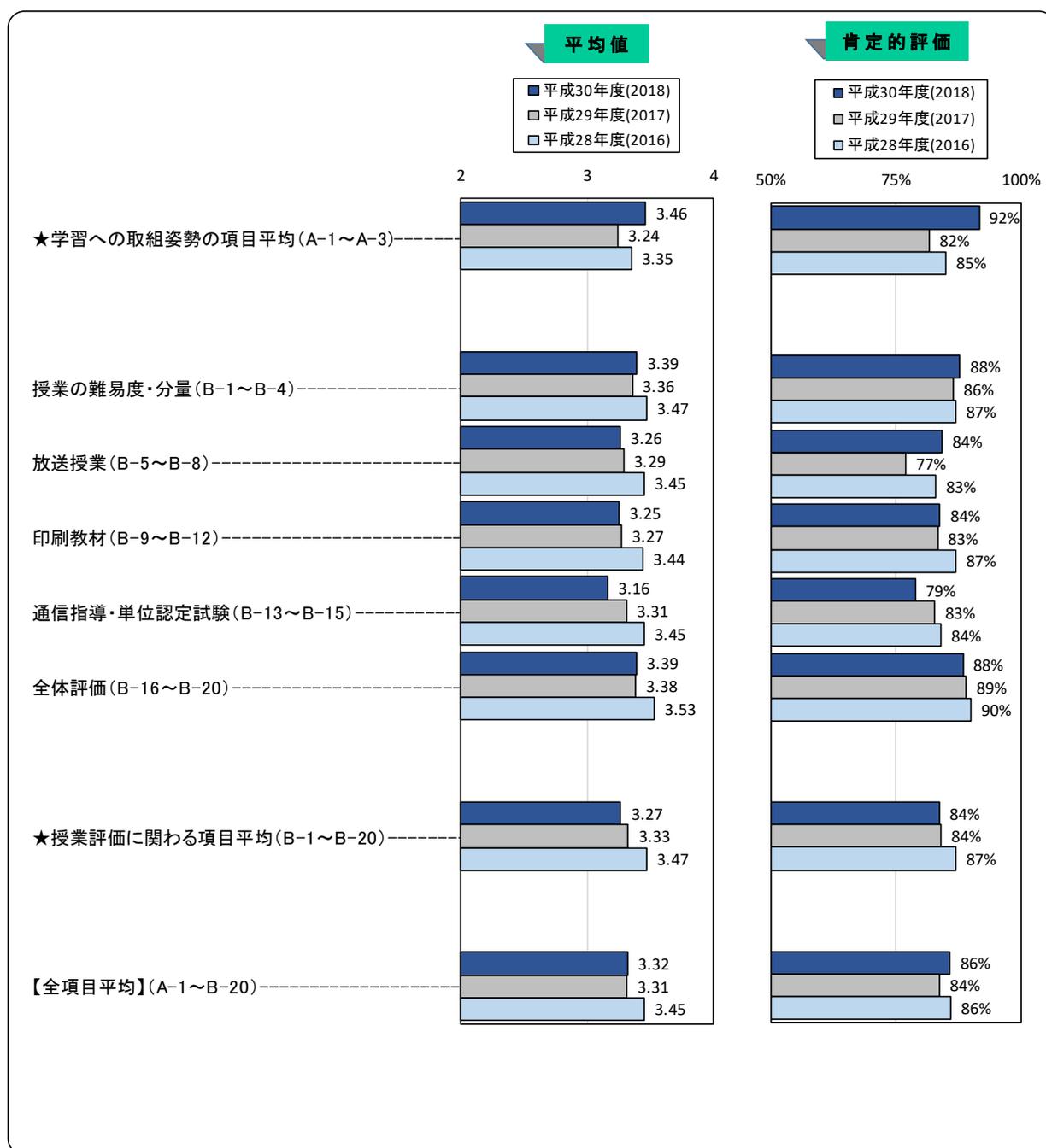
項目平均を科目の開設年度で比較してみると（図2-48）、本年度の『学習への取り組み姿勢』は過去2年度と比べ大きく上昇しており、92%に達していた。

また、『放送授業』でも昨年度から7ポイントの大幅上昇で、84%であった。

それ以外の『授業の難易度・分量』『印刷教材』『通信指導・単位認定試験』『全体評価』では大きな差はみられなかった。

『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』と『全項目平均』も過去2年度と同じ水準であった。

図2-48 【大学院】項目平均による全体的傾向（開設年度比較）



年齢階層別では（図2-49）、20歳代（4人）、60歳代（5人）、70歳以上（5人）の回答者数が少なく、肯定的評価の値が極端な値を取り、その結果大きな誤差を含むためコメントを割愛することとする。

従って今後、年齢階層別では30歳代、40歳代、50歳代の3層を中心にみていきたい。

『学習への取組み姿勢の項目平均』は30歳代（94%）が高く40歳代が低かった。

『授業の難易度・分量』は30歳代（92%）～50歳代までは、年代の上昇と共に漸減傾向であった。

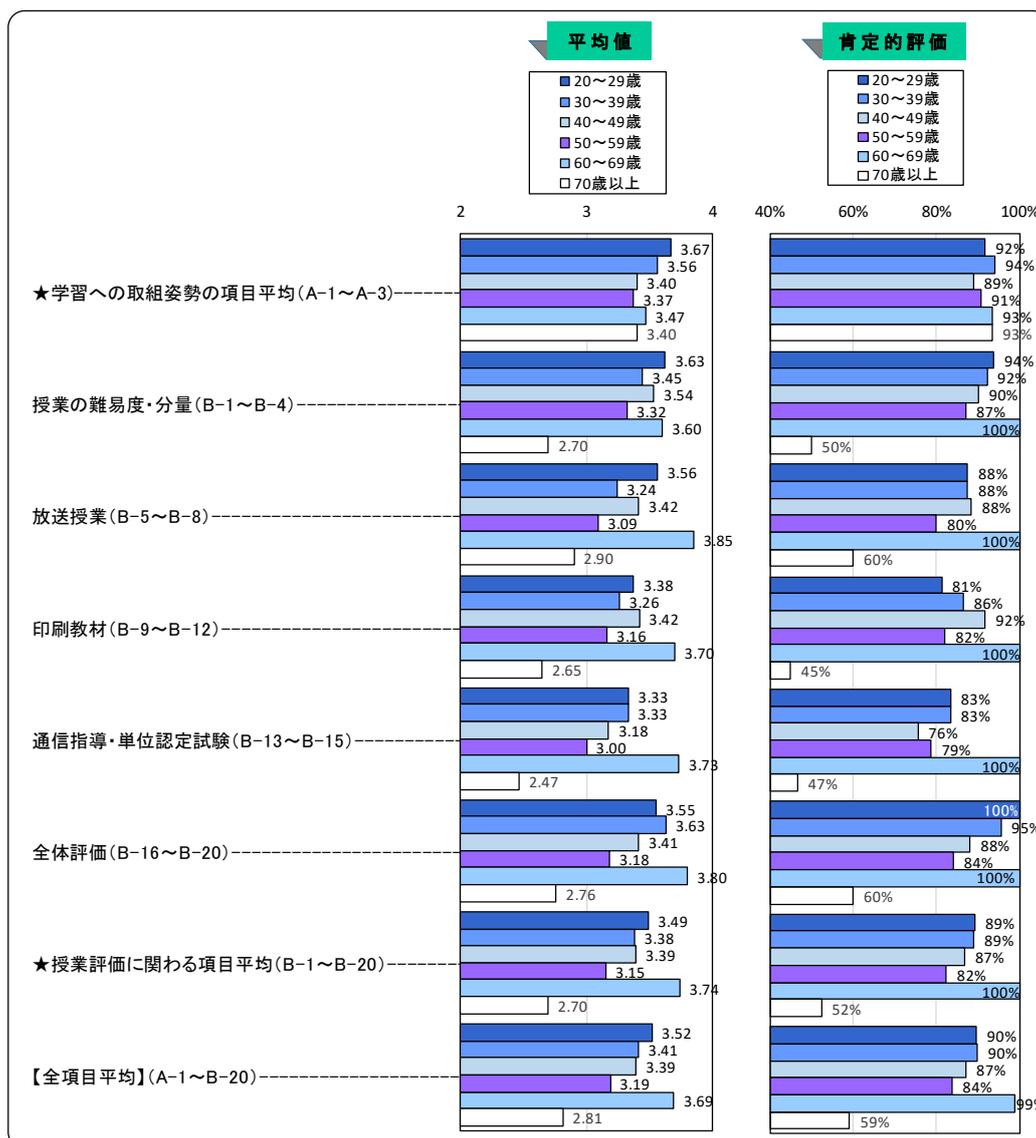
『放送授業』は50歳代で80%と他の年代より低かった。

『印刷教材』は40歳代が92%と高く、『通信指導・単位認定試験』は、30歳代が83%と高かった。

『全体評価』では30歳代（95%）が最も高く、50歳代までの年代の上昇と共に漸減傾向がみられた。

『授業評価に関わる項目平均（B-1～B-20）』と『全項目平均（A-1～B-20）』でも30歳代が最も高く、50歳代まで年代の上昇と共に評価が下がる傾向であった。

図2-49 【大学院】項目平均による年齢階層別全体的傾向

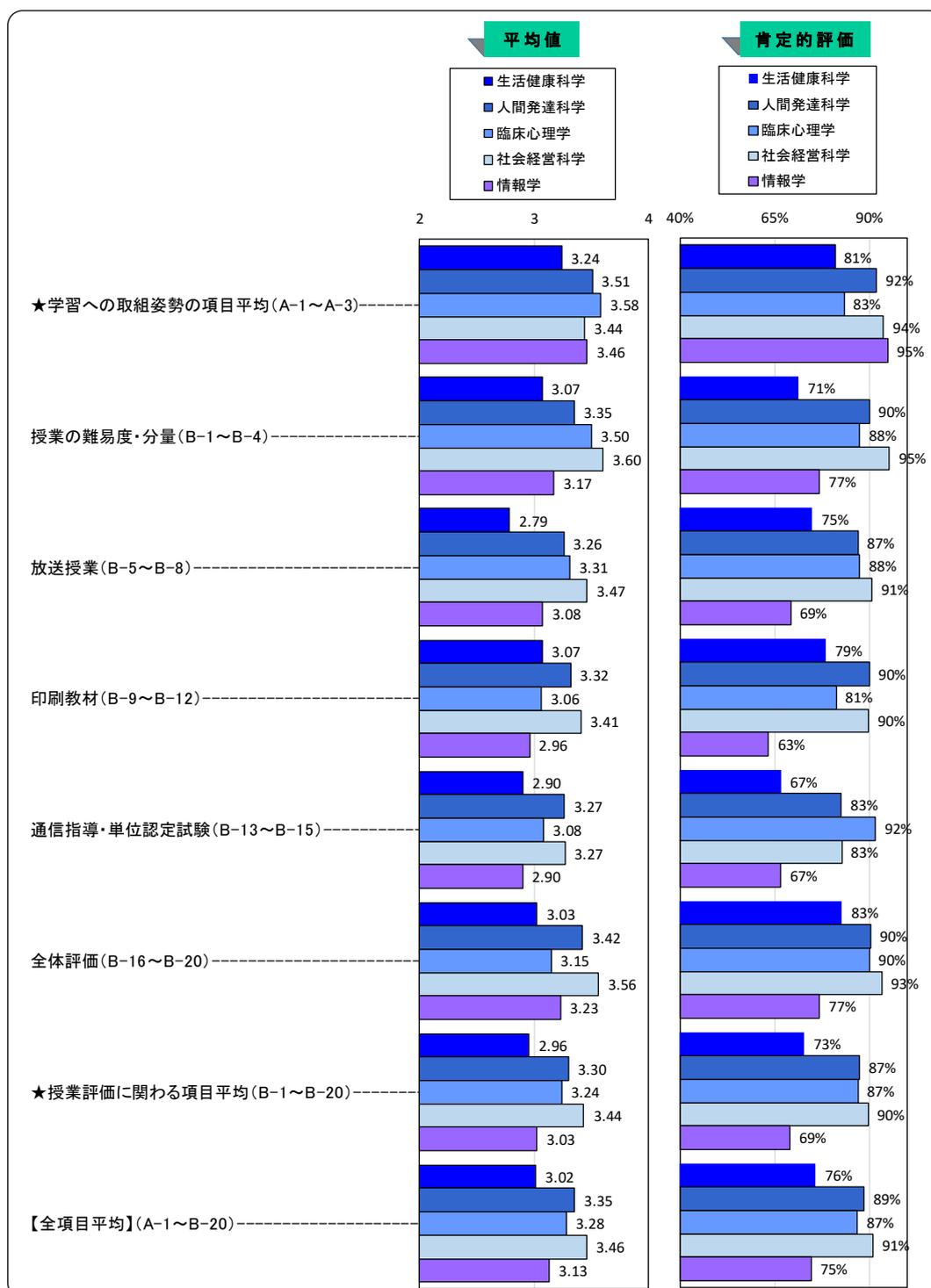


科目の所属プログラム別に項目平均をみると（図2-50）、生活健康科学（7人）、臨床心理学（4人）、情報学（13人）の回答者数が少なく、肯定的評価の値が極端な値を取り、その結果大きな誤差を含むためコメントを割愛することとする。

従って今後、所属プログラム別評価は人間発達科学と社会経営科学の2つのプログラムを中心にみていきたい。

『授業の難易度・分量』だけで、人間発達科学と社会経営科学に5ポイントの差が見られ、社会経営科学（95%）が高評価であった。

図2-50 【大学院】項目平均による所属プログラム別全体的傾向



職業別では（図2-51）、その回答者数が「会社員」（28人）以外は「公務員」が多くて13名、それ以外の職業では7人以下と少なく、肯定的評価に大きな誤差を含むため、今後「会社員」以外のコメントを割愛することとする。

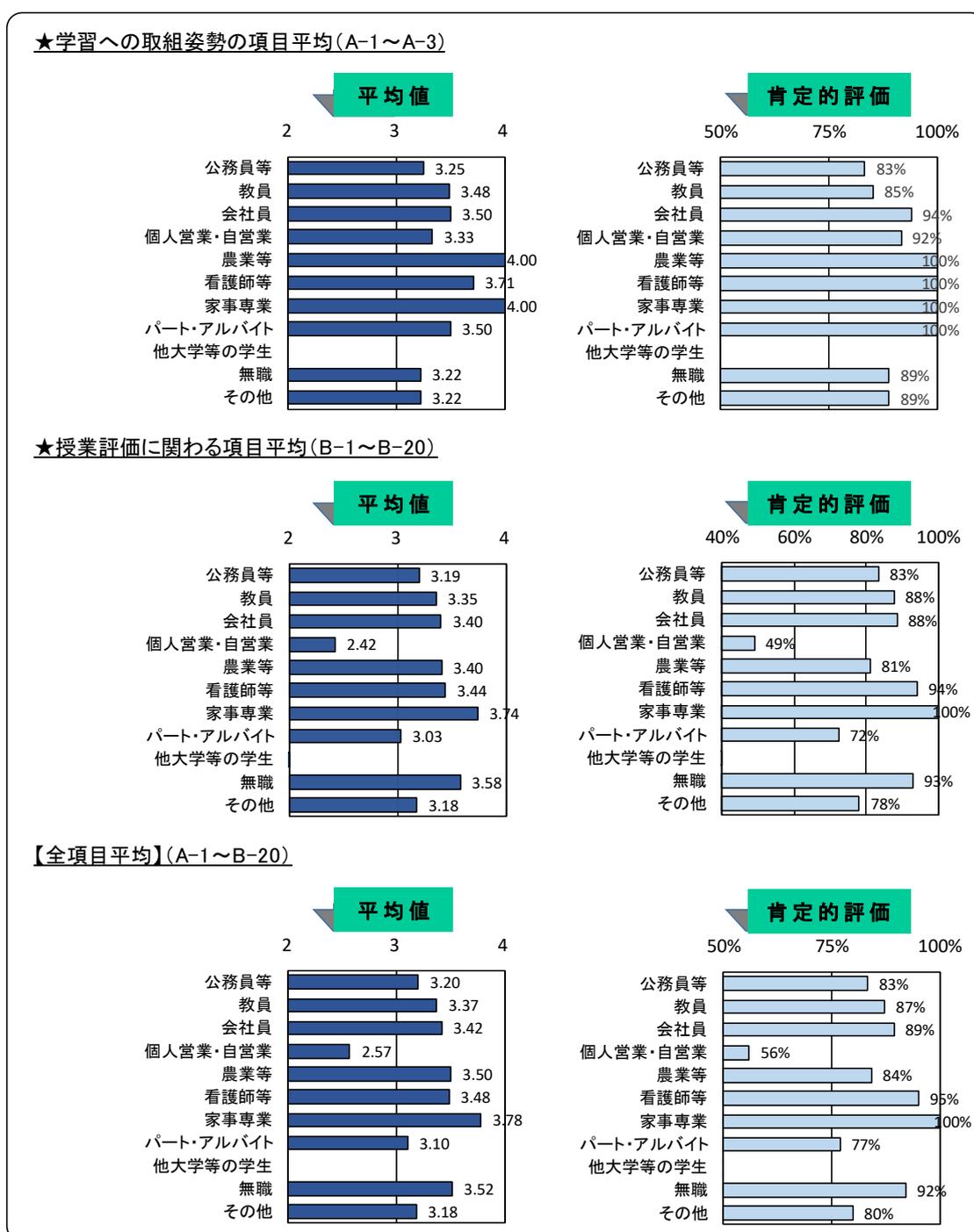
ただ、単独の数値だけを記述してもあまり意味を持たないため、全体の肯定的評価を基準にコメントしていくことにする。

『学習への取組み姿勢』は全体92%（70頁参照）、会社員が94%で同水準であった。

『授業評価に関わる項目平均』では全体（84%）と「会社員」（88%）に、それほど大きな差はなかった。

また、『全項目平均』でも、全体（86%）と「会社員」（89%）は同じ水準であった。

図2-51 【大学院】項目平均による職業別全体的傾向



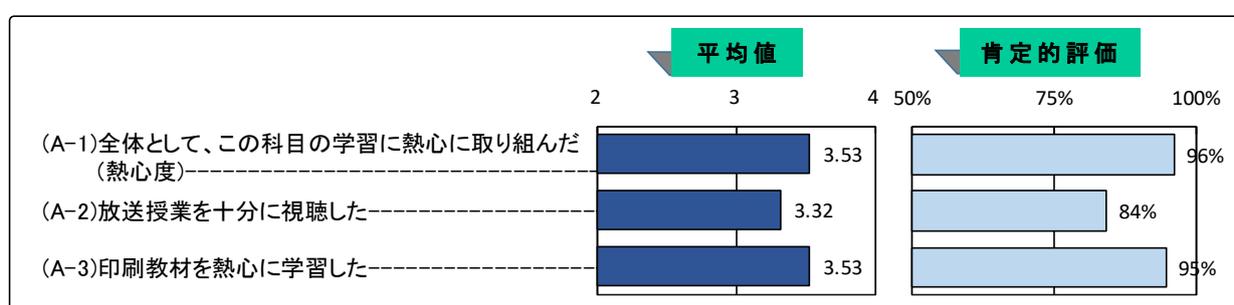
Ⅱ－２－２．学習への取組み姿勢

ここからはそれぞれ評価項目ごとに調査結果をみていく。

学習への取組み姿勢（図 2－5 2）では、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」と (A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は 95%以上とそれぞれの熱心度は高かった。

一方、(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は 84%で前述の 2 項目に比べると評価は低かった。

図 2－5 2 【大学院】回答者全体の取組姿勢

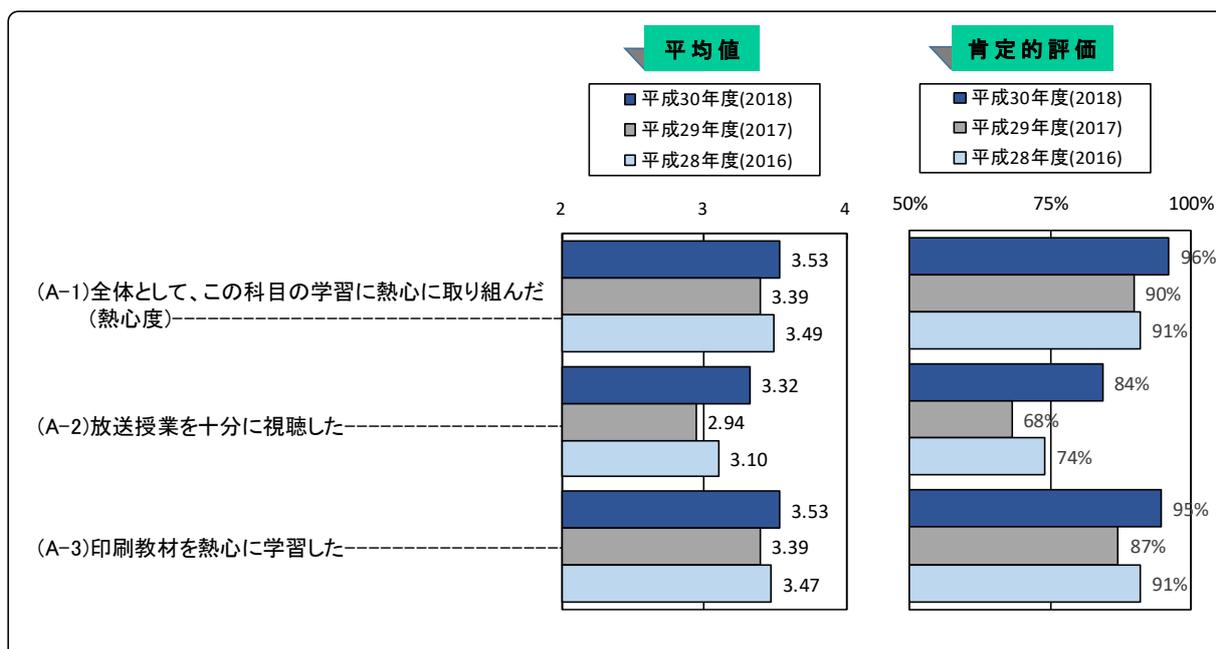


学習への取組み姿勢を時系列で見ると（図2-53）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」については、昨年度から6ポイントの上昇で96%に達していた。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」についても過去2年度から10ポイントの飛躍がみられ、その評価は84%であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」も昨年度に比べ8ポイントアップで95%の高評を得ていた。

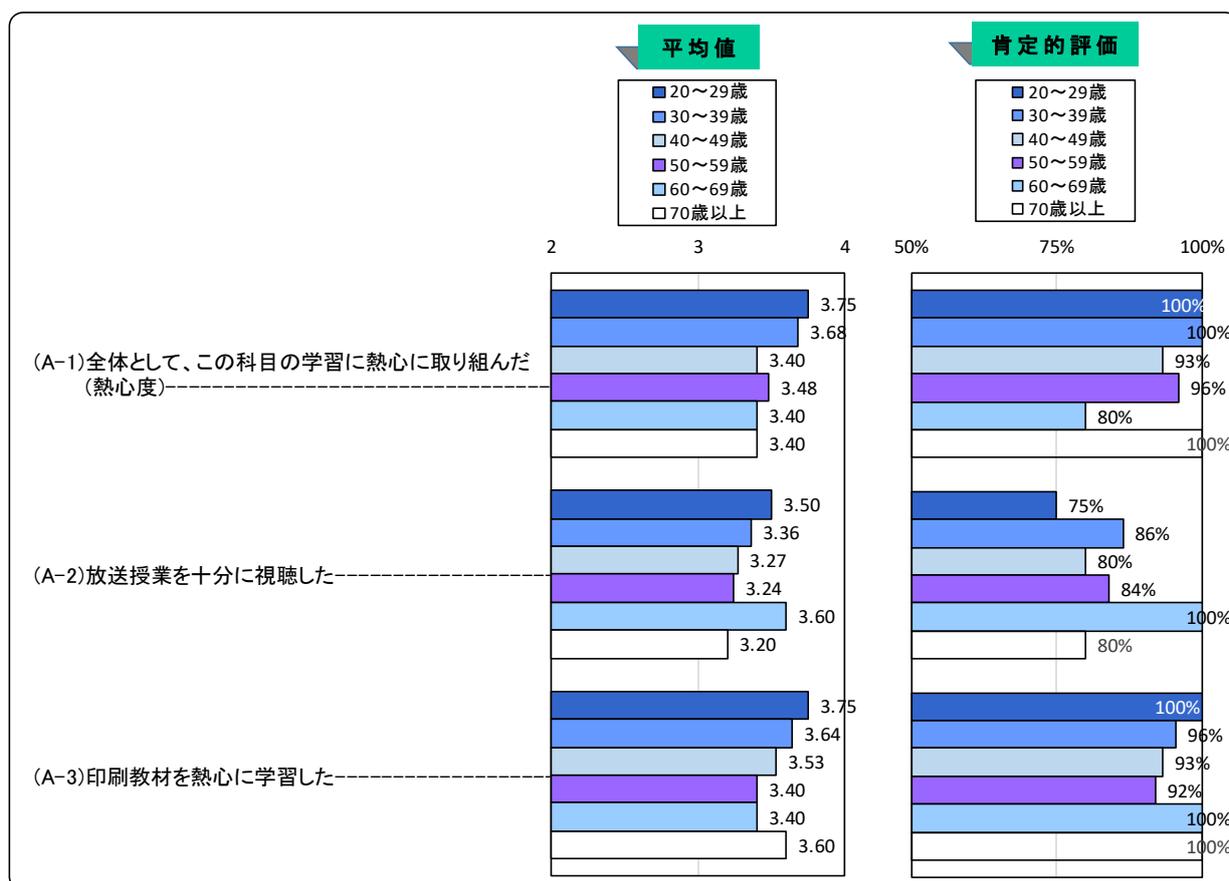
図2-53 【大学院】回答者全体の取組姿勢（時系列）



年齢階層別では（図2-54）、(A-1)「全体として、この科目の学習に熱心に取り組んだ」と(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は30歳代～50歳代までいずれも9割以上で、特に「A-1」の30歳代は100%と非常に高い熱心度であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は30歳代～50歳代から、8割から8割後半の評価を得ていた。

図2-54 【大学院】年齢階層別の取組姿勢

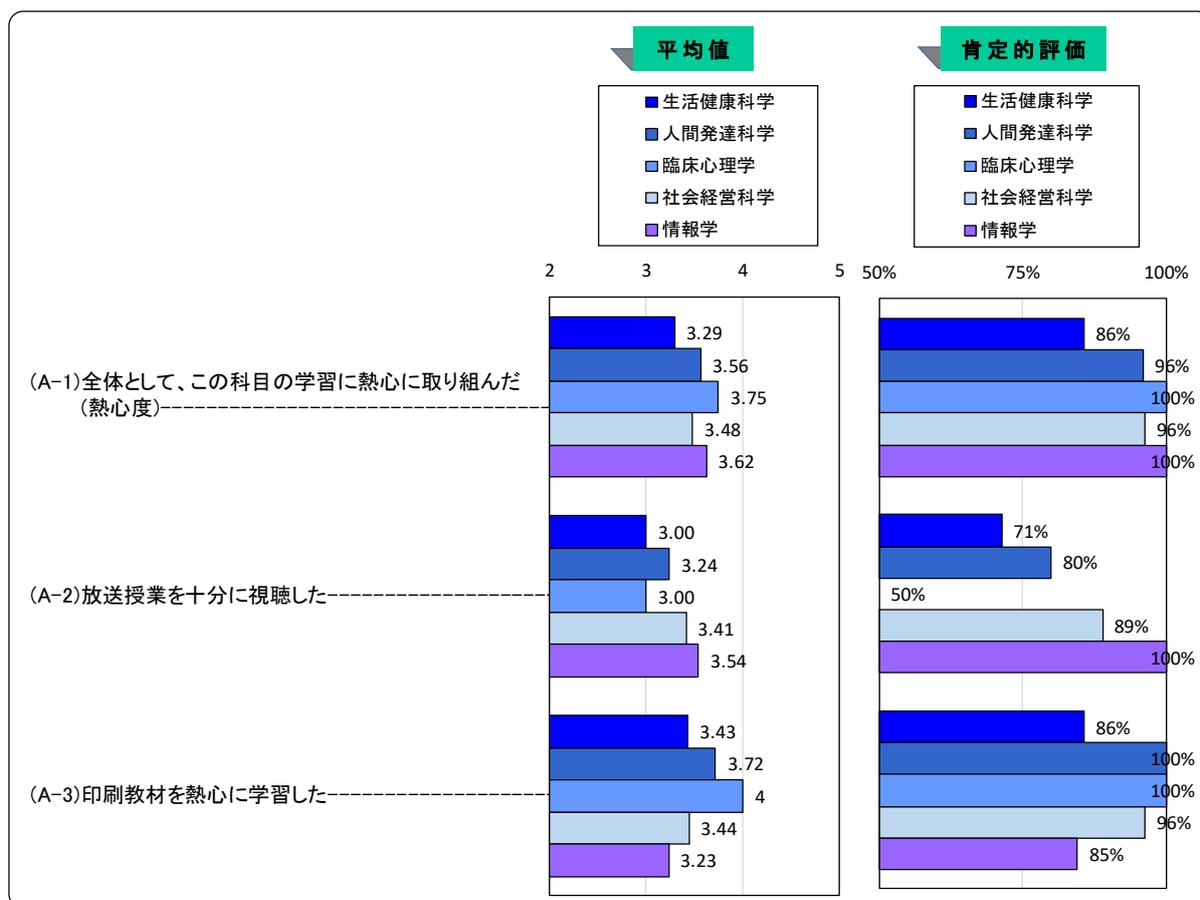


所属プログラム別では（図2-55）、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ（熱心度）」は、「人間発達科学」と「社会経営科学」は共に96%で高評価であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」については、「人間発達科学」（80%）より「社会経営科学」（89%）の方が高い傾向であった。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は両プログラム共、非常に高い評価で、「人間発達科学」は全員からその賛同を得ていた。

図2-55 【大学院】所属プログラム別の取組姿勢



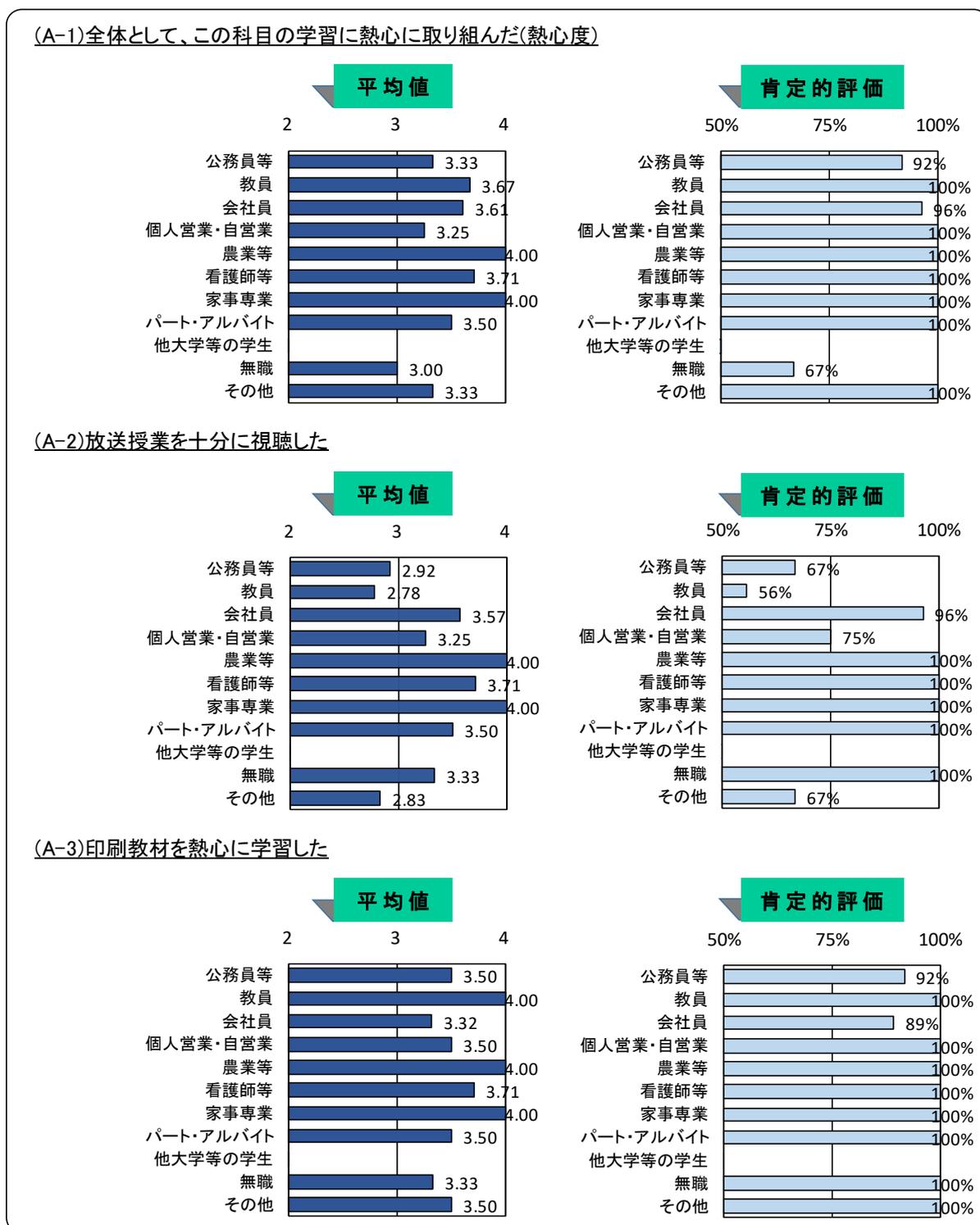
職業別では(図2-56)、(A-1)「全体としてこの科目の学習に熱心に取り組んだ(熱心度)」では、会社員(96%)は全体と同じ評価であった。

(A-2)「放送授業を十分に視聴した」は、会社員(96%)の方が全体より高い傾向がみられた。

(A-3)「印刷教材を熱心に学習した」は、会社員が89%で、全体より低い傾向がみられた。

(※全体の肯定的評価「A-1」:96%、「A-2」:84%、「A-3」:95%)

図2-56【大学院】職業別の取組姿勢



単位認定のための学習方法（図2-57）では、属性別の各層内で回答者数が15人未満と少ないもの（例えば20～29歳が4人）を除くと、【年齢階層別】では30歳代～50歳代の3階層、【所属プログラム】では「社会経営科学」と「人間発達科学」、【職業】では「会社員」となり、この6属性についてコメントすることにする。

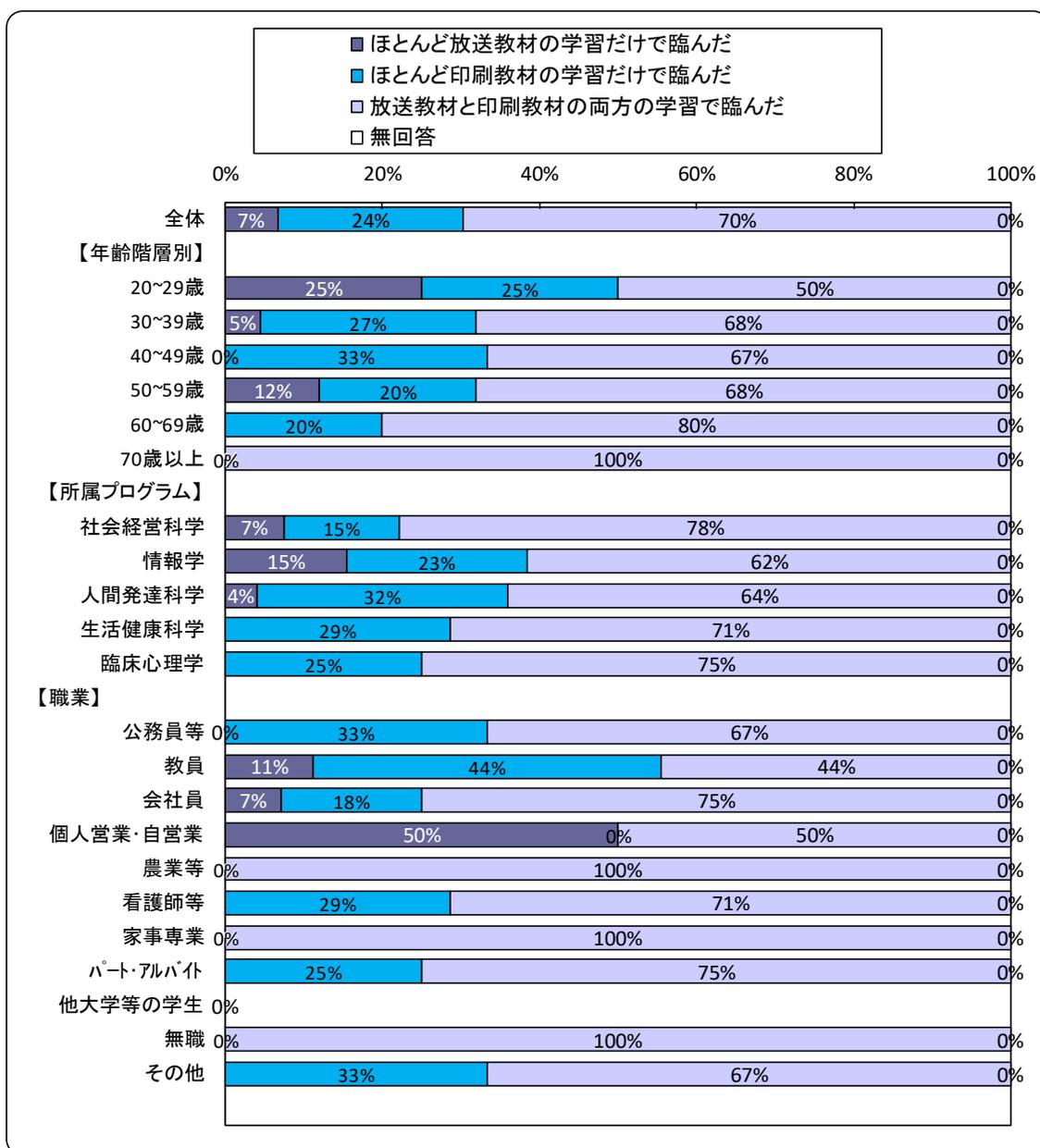
全体では、比率の高い順に「放送教材と印刷教材の両方の学習で臨んだ」が70%を占め、「ほとんど印刷教材の学習だけで臨んだ」が24%で、「ほとんど放送教材の学習だけで臨んだ」は7%とごく僅かであった。

年齢階層別では30歳代と50歳代は全体とほぼ同じ傾向で、40歳代は「放送教材の学習だけ」は1人もなく、「印刷教材の学習だけ」が全体に比べ33%と高かった。

また、全体に比べ「社会経営科学」は、「印刷教材の学習だけ」が低く、「両方の学習で」は高かった。反対に「人間発達科学」は、全体に比べ「印刷教材の学習だけ」が高く、「両方の学習で」は低かった。

「会社員」は全体に比べ「印刷教材の学習だけ」が低く、「両方の学習で」は高かった。

図2-57 【大学院】単位認定のための学習方法



Ⅱ－２－３．大学院の授業評価

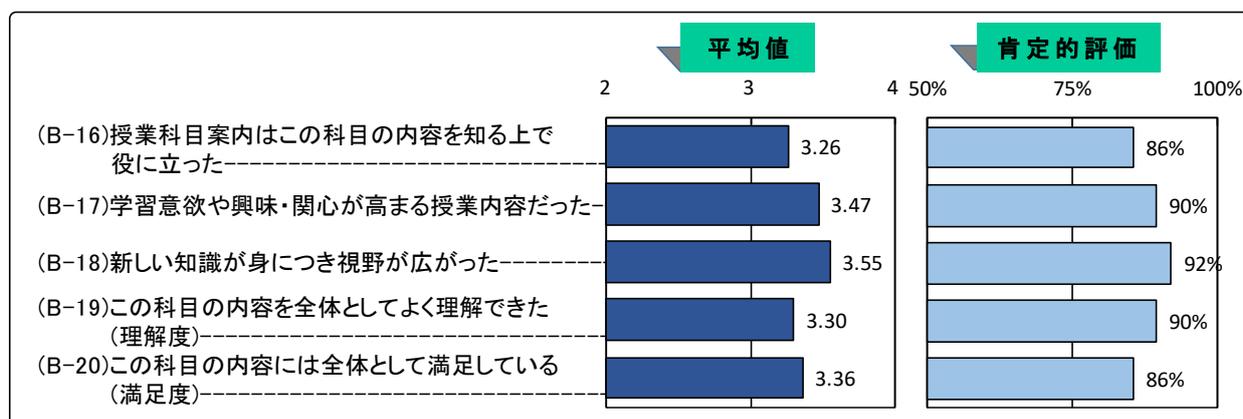
(1) 全体評価

ここからは大学院の授業評価について、評価項目ごとにみていくことにする。

全体評価では(図2-58)、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」～(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」は、90%に達し、高い評価を得ていた。

それ以外の(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している(満足度)」は共に8割半ばかりから支持された。

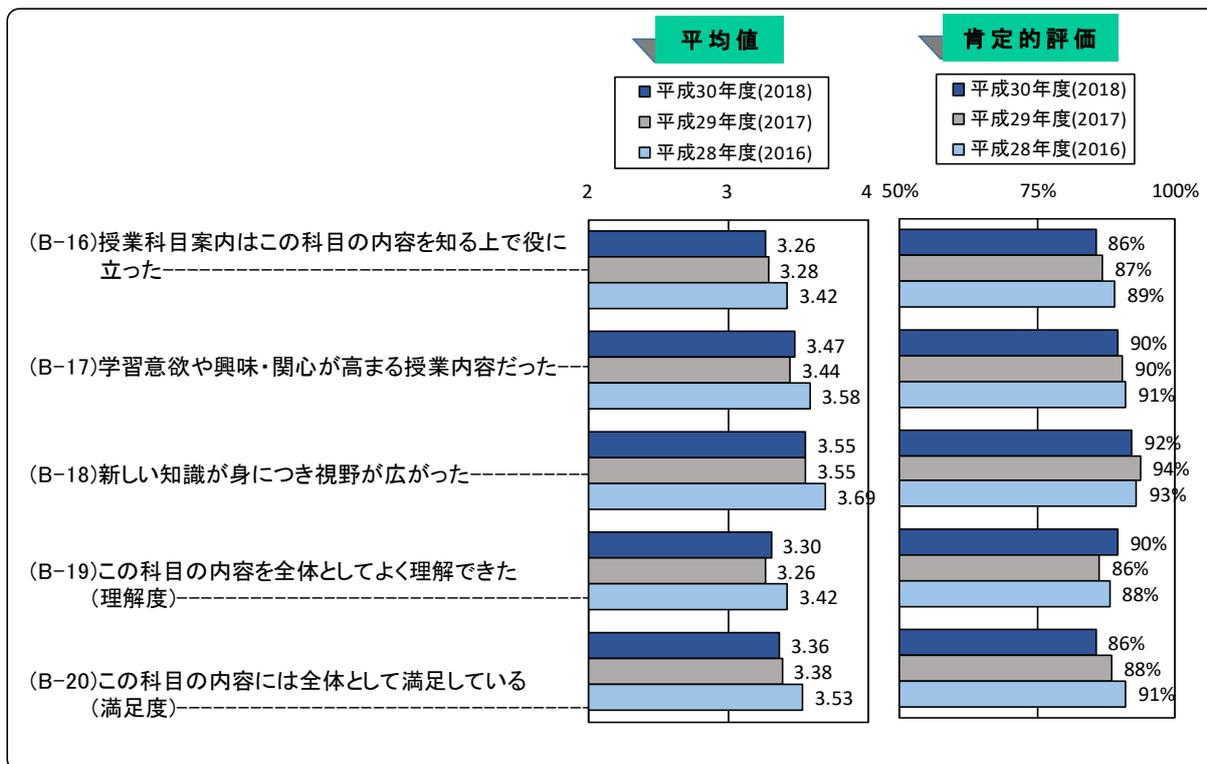
図2-58 【大学院】回答者全体の全体評価



全体評価を時系列で見ると（図2-59）、この3年間ほとんど変わりがなく同水準であった。

昨年度との比較で（B-19）「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」だけが、本年度の評価がわずかに増加であった。

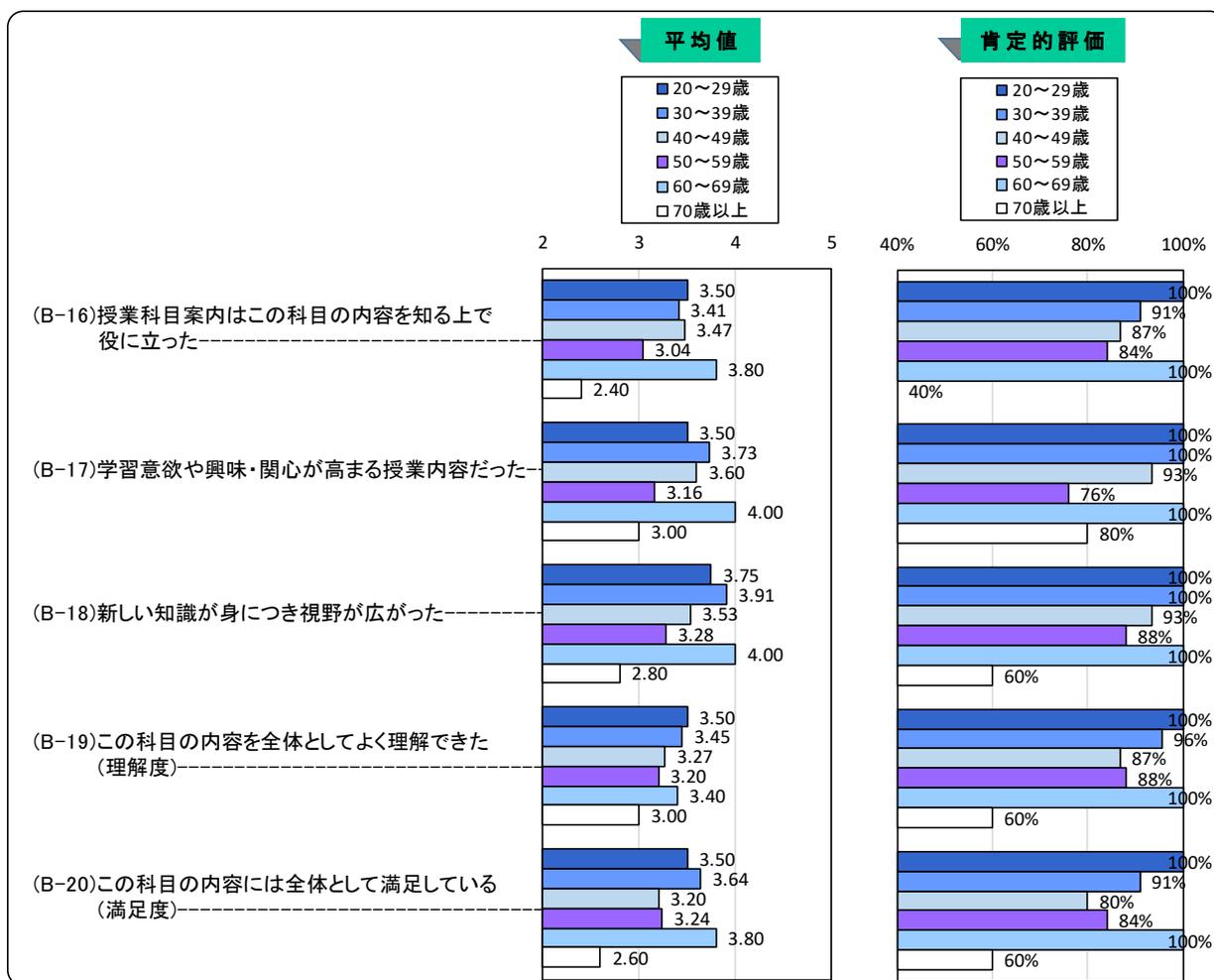
図2-59 【大学院】回答者全体の全体評価（時系列）



年齢階層別では（図2-60）、30歳代～50歳代では、(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」、(B-18)「新しい知識が身につく視野が広がった」の3項目で、若い年代ほど評価が高く、「B-17」でその差は大きく、30歳代（100%）と50歳代（76%）では24ポイントの差がみられた。

(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」と(B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」でも30歳代の評価が高く、「B-19」で96%、「B-20（満足度）」で91%と高い支持を得ていた。

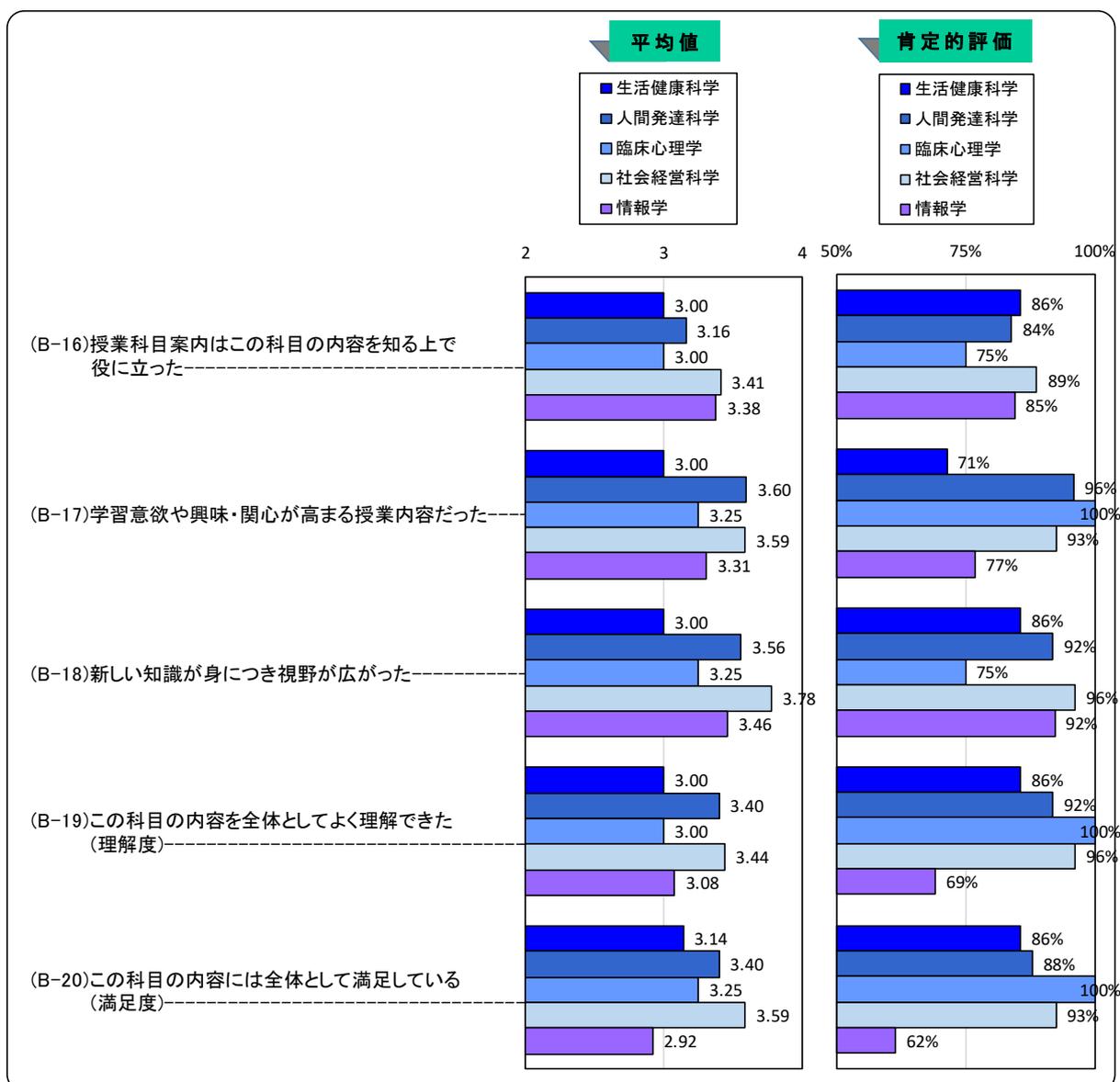
図2-60【大学院】年齢階層別の全体評価



所属プログラム別に全体評価をみると（図 2-6 1）、「人間発達科学」と「社会経営科学」の評価は、(B-17)「学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった」～(B-19)「この科目の内容を全体としてよく理解できた（理解度）」の 3 項目で、それぞれ 9 割前半から 9 割半ばと、高評であった。

(B-16)「授業科目案内はこの科目の内容を知る上で役に立った」と (B-20)「この科目の内容には全体として満足している（満足度）」では、共に「社会経営科学」が 9 割前後と、高い支持を得ていた。

図 2-6 1 【大学院】所属プログラム別の全体評価

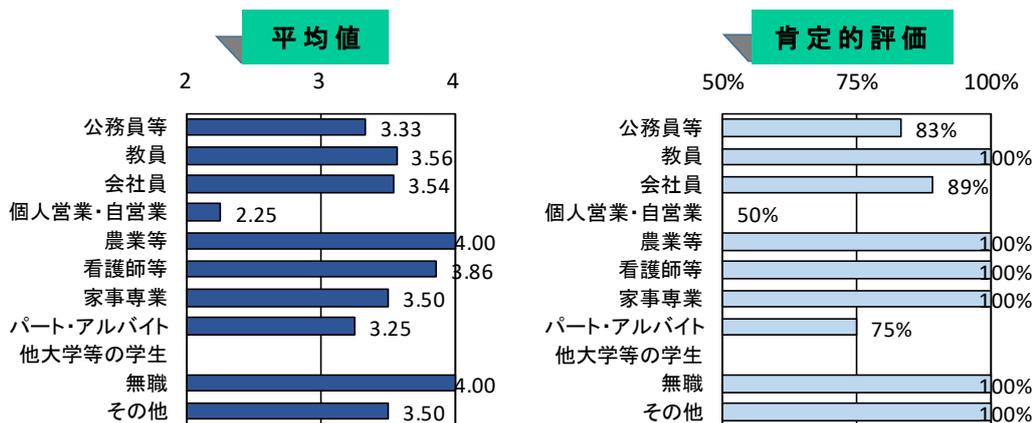


職業別では（図2-62）、下記の3項目については、「会社員」のそれぞれの評価は全体と同じ水準であった。

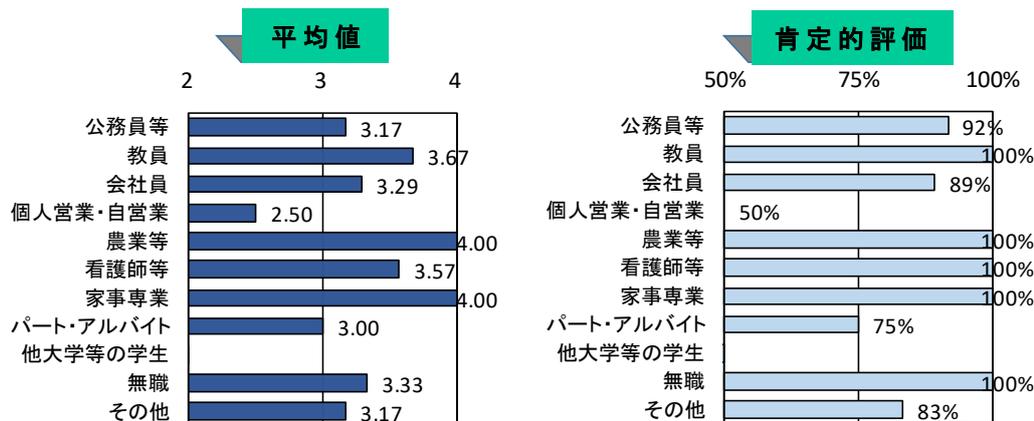
（※全体の肯定的評価「B-17」：90%、「B-19」：90%、「B-20」：86%）

図2-62【大学院】職業別の全体評価

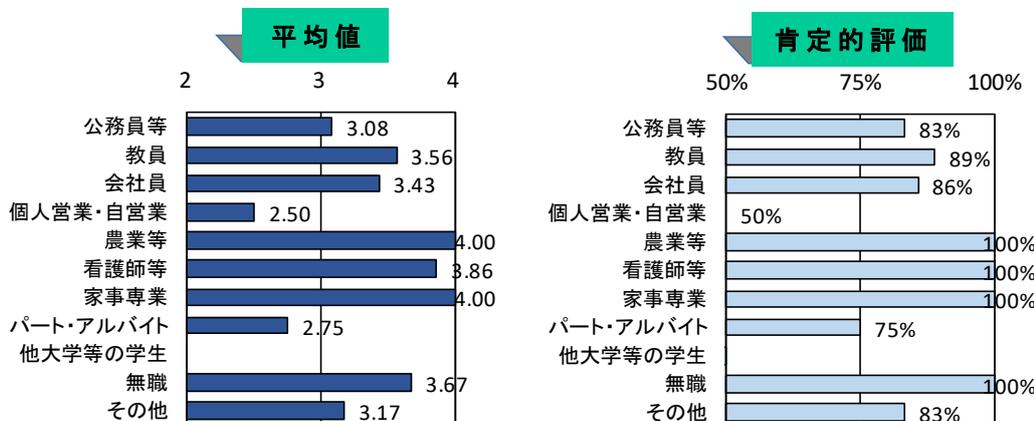
(B-17)学習意欲や興味・関心が高まる授業内容だった



(B-19)この科目の内容を全体としてよく理解できた



(B-20)この科目の内容には全体として満足している

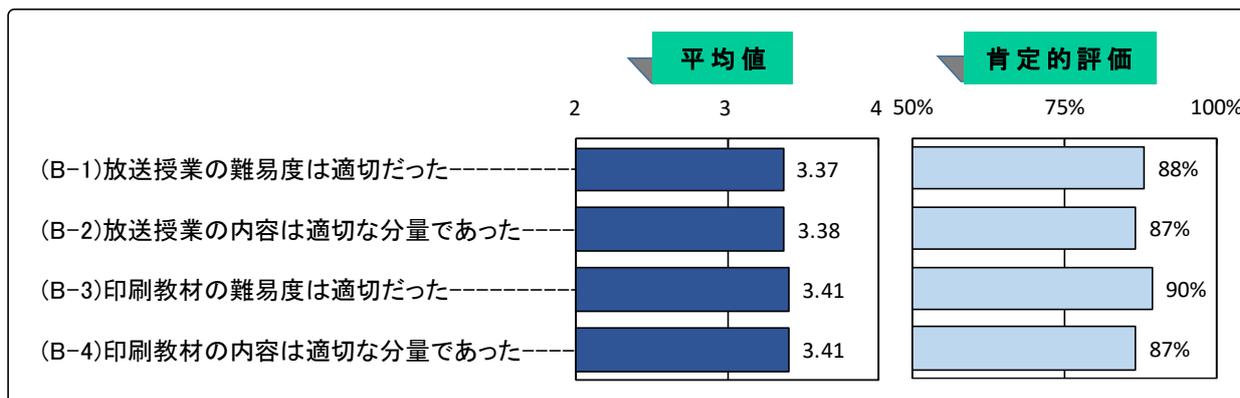


(2) 授業の難易度・分量

次に授業の難易度・分量について評価項目ごとにみていく。

授業の難易度・分量の評価は(図2-63)、いずれも約9割と高い評価となっている。

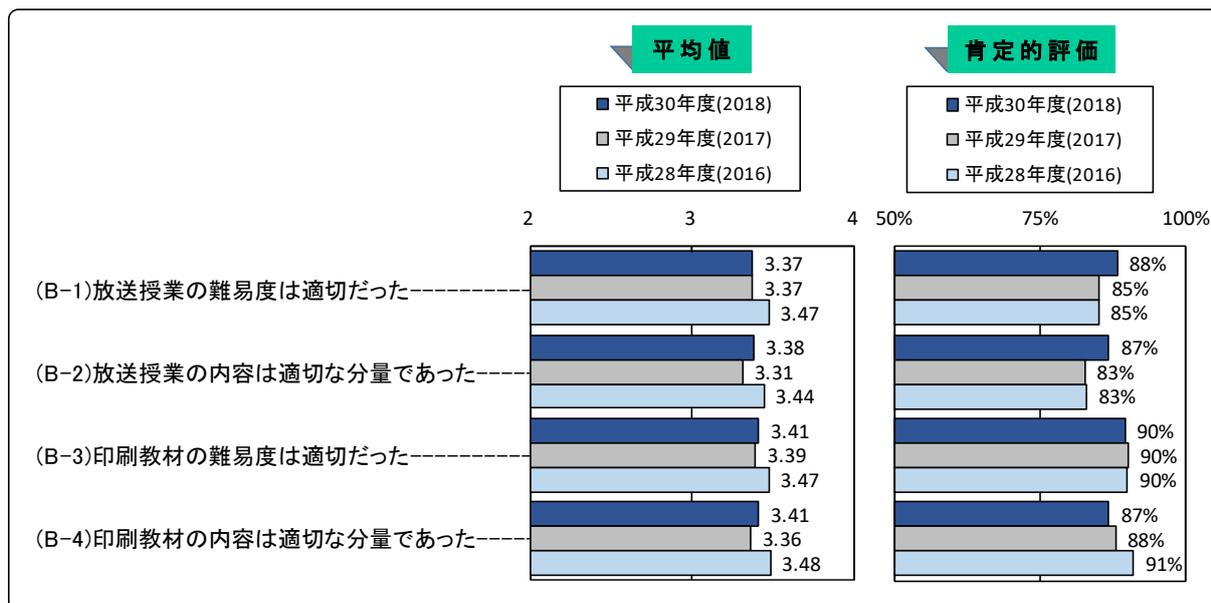
図2-63 【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価



開設年度で比較すると(図2-64)、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」と(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」では、本年度は過去2年度と比べ3~4ポイントの上昇で、8割後半の評価を得ていた。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」と(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」では、本年度は昨年度と比べると変わらず、9割から8割後半の評価を得ていた。

図2-64 【大学院】回答者全体の授業難易度・分量の評価(開設年度比較)



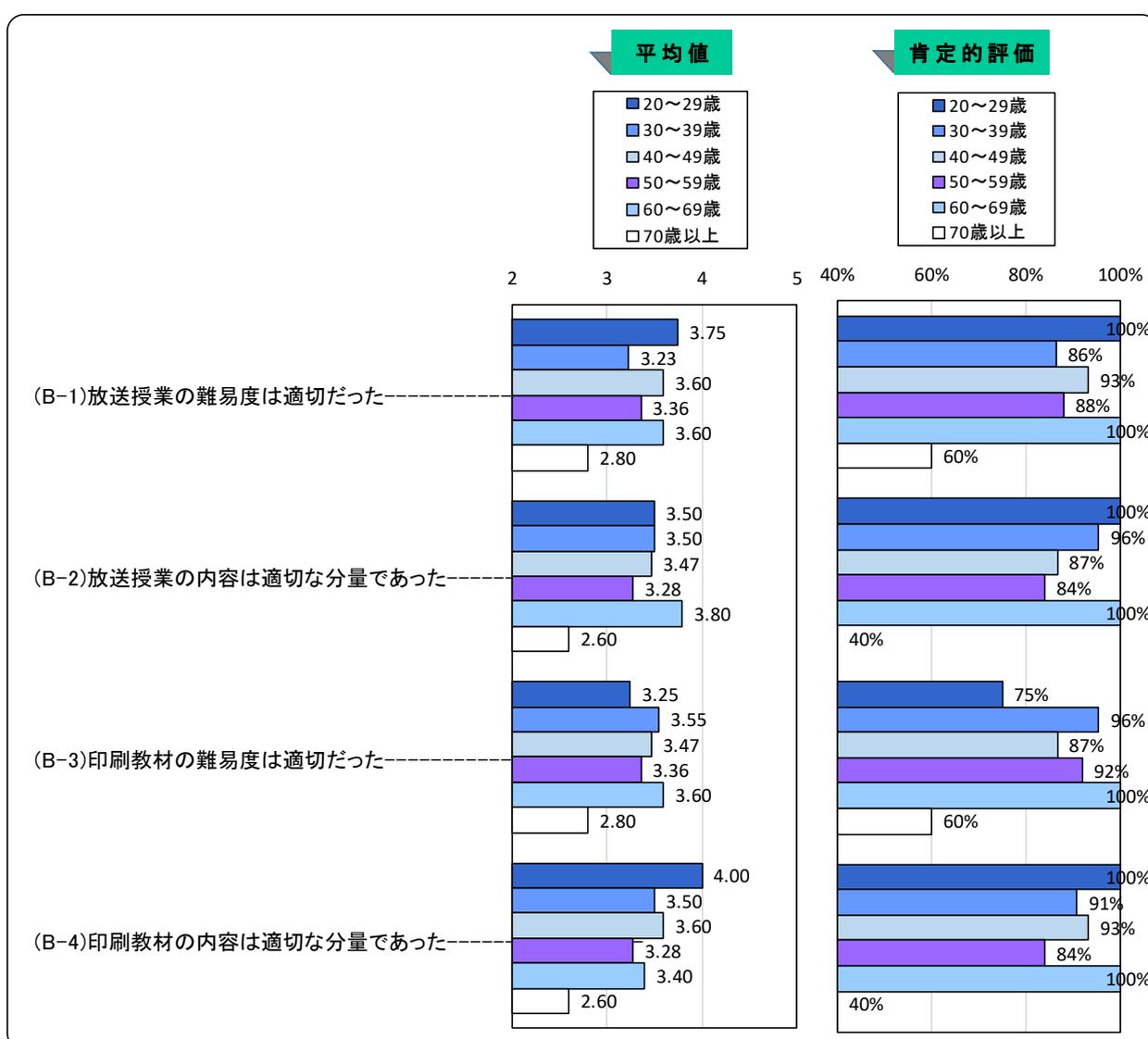
年齢階層別に授業の難易度・分量をみると（図2-65）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は40歳代の評価が93%と高かった。

同様に(B-2)「放送授業の内容は適切な分量であった」は30歳代(96%)がピークで、年代が上がるにつれ評価は下降傾向で、50歳代で84%となっていた。

(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」では、30歳代が96%と高く、40歳代で低かった。

(B-4)「印刷教材の内容は適切な分量であった」は、30歳代(91%)、40歳代(93%)は9割越えで高く、50歳代で評価が低かった。

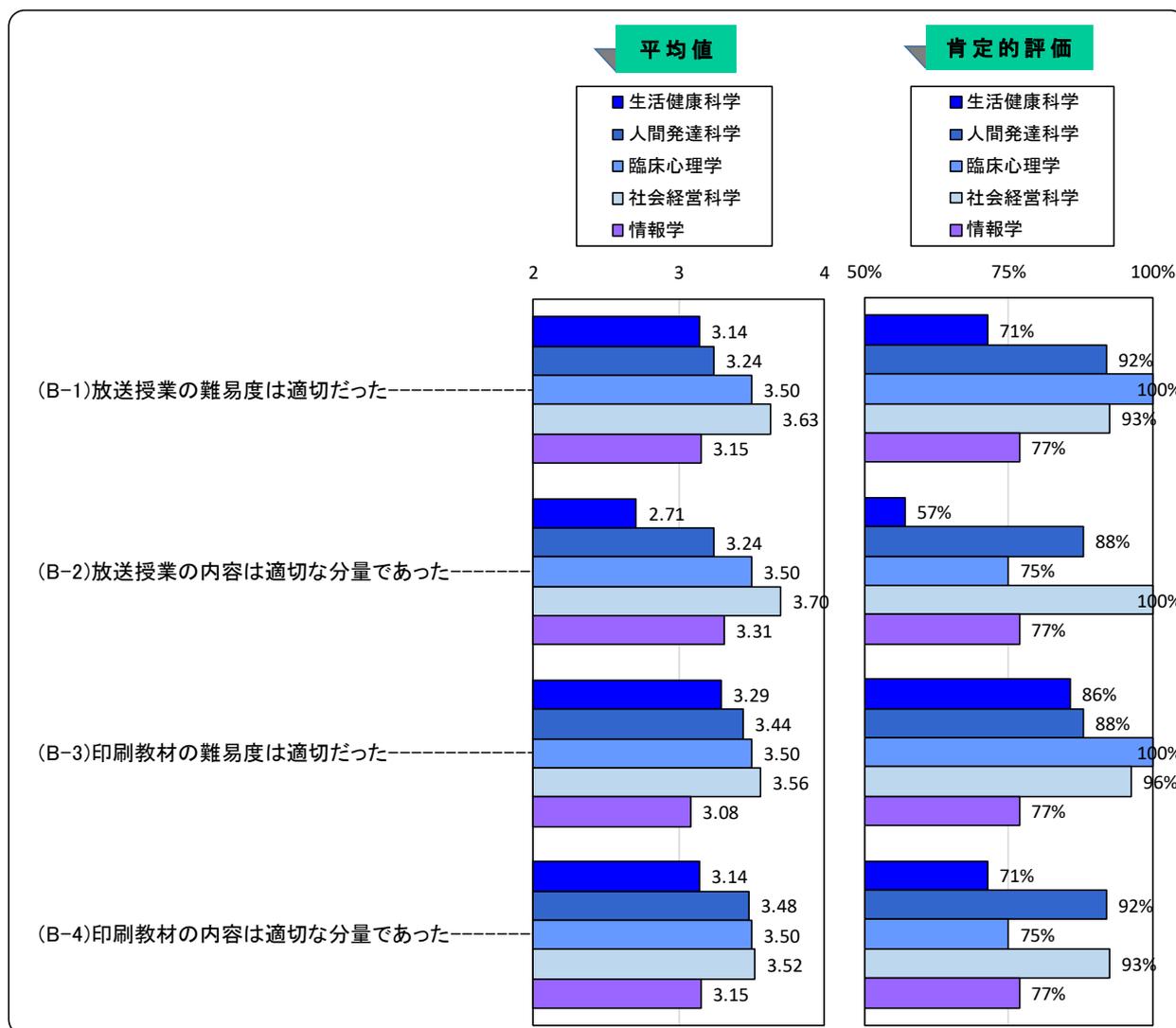
図2-65 【大学院】年齢階層別の授業難易度・分量の評価



所属プログラム別に授業の難易度・分量をみると（図 2 - 6 6）、（B-1）「放送授業の難易度は適切だった」と（B-4）「印刷教材の内容は適切な分量であった」では、「人間発達科学」「社会経営科学」は共に 9 割前半の高い評価であった。

（B-2）「放送授業の内容は適切な分量であった」と（B-3）「印刷教材の難易度は適切だった」は、「人間発達科学」より「社会経営科学」の評価が高く、「B-2」で 100%、「B-3」で 96%と際立っていた。

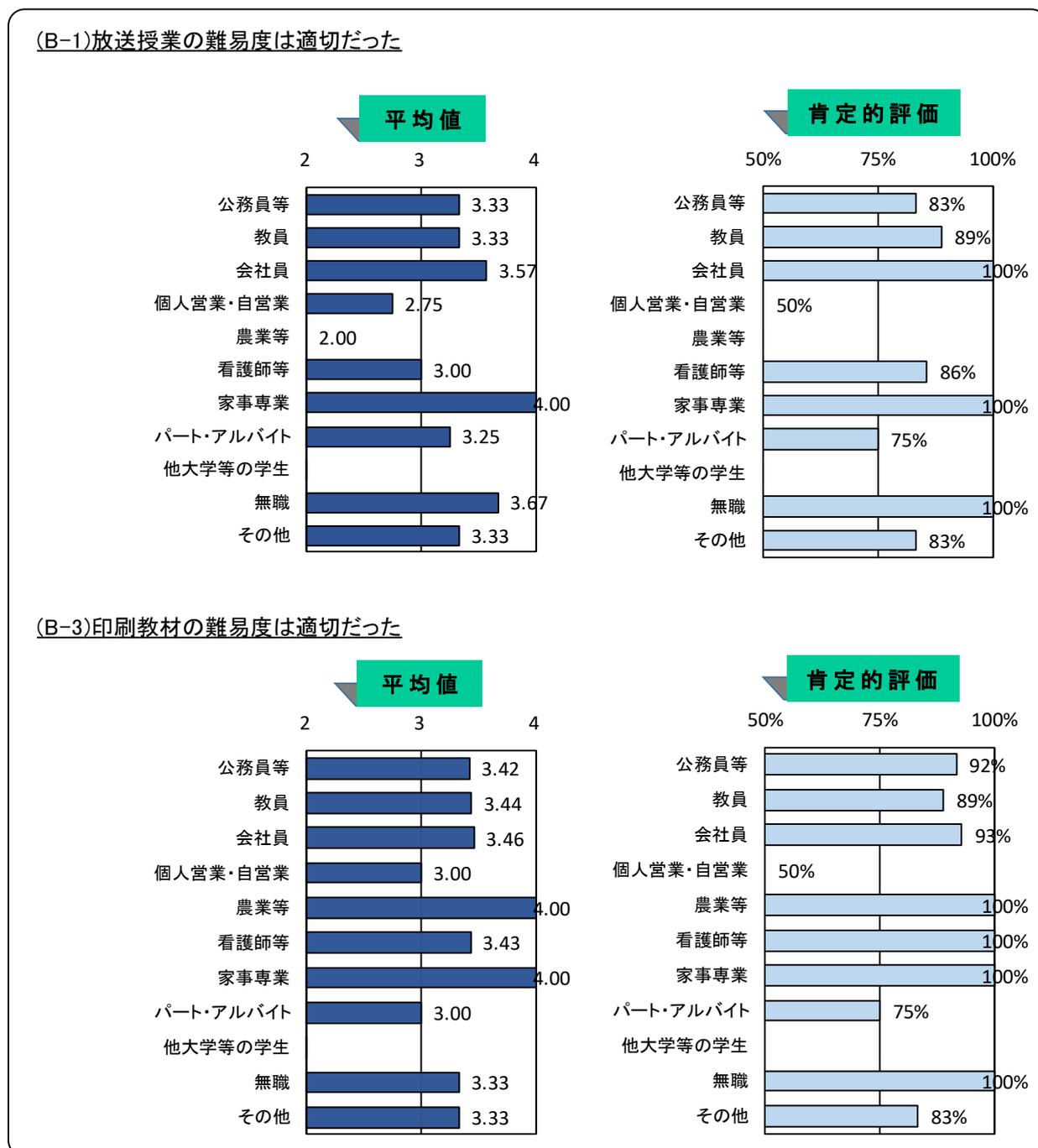
図 2 - 6 6 【大学院】所属プログラム別の授業難易度・分量の評価



職業別に授業の難易度をみると（図2-67）、(B-1)「放送授業の難易度は適切だった」は、「会社員」の肯定的評価が100%と、全員から支持を得ており、(B-3)「印刷教材の難易度は適切だった」でも93%と9割を超える評価を得ていた。

(※全体の肯定的評価「B-1」:88%、「B-3」:90%)

図2-67【大学院】職業別の授業難易度の評価



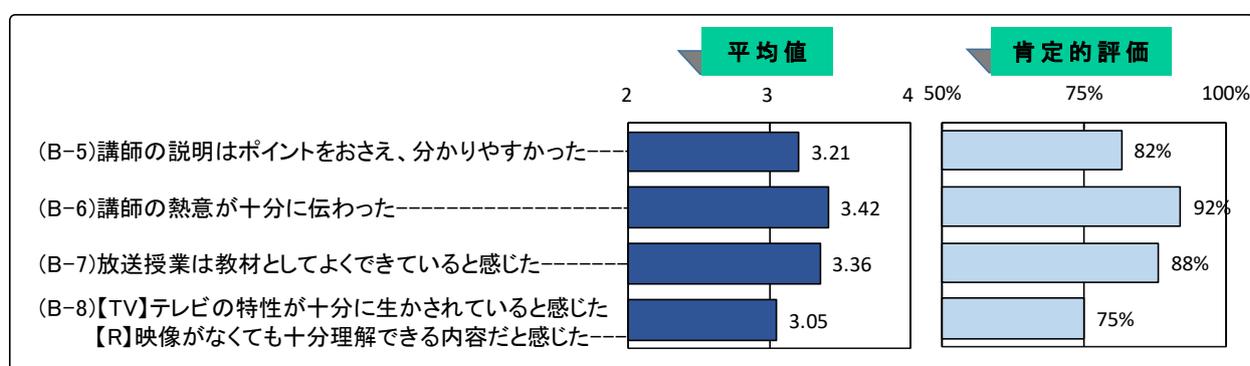
(3) 放送授業

ここからは放送授業について評価項目ごとにみていく。

放送授業に関する評価項目をみると(図2-68)、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」と(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」は9割前後で、この4項目の中で高い評価となっていた。

(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は8割からの支持で、(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は7割半ばにとどまっていた。

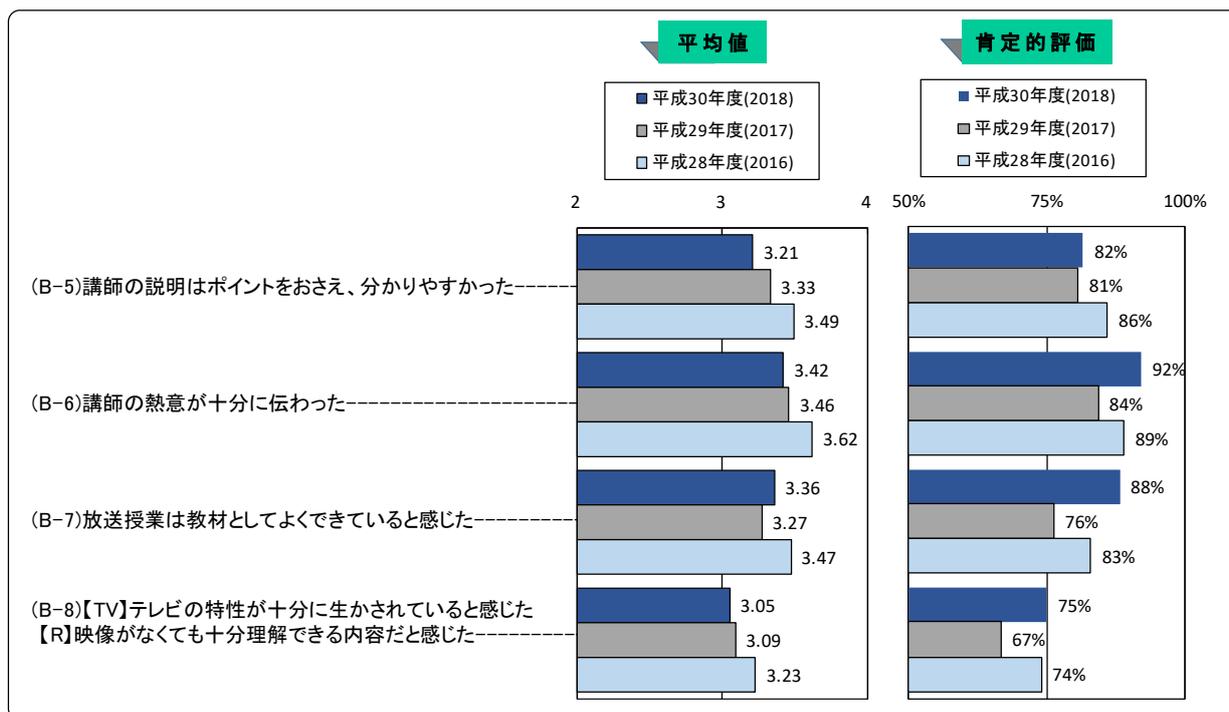
図2-68 【大学院】回答者全体の放送授業の評価



放送授業の評価を時系列でみると（図2-69）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は、昨年度と同水準の82%であった。

(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」～(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」までの3項目は、昨年度から8～12ポイントの大きな上昇がみられた。

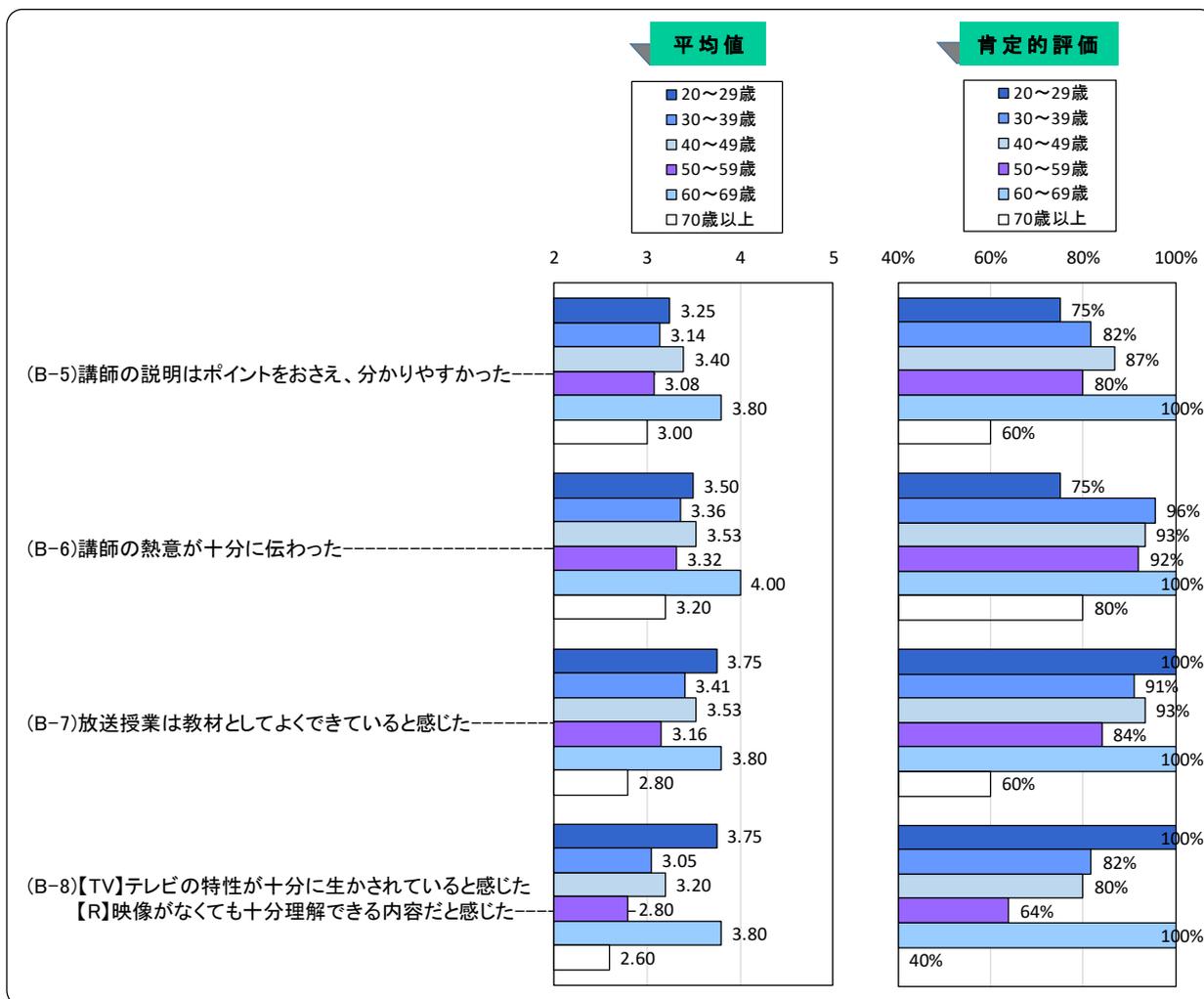
図2-69 【大学院】回答者全体の放送授業の評価（時系列）



年齢階層別では（図 2-70）、30 歳代～50 歳代までは、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」は 40 歳代が 87%と高く、(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」は 30 歳代が 96%と高かった。

(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」と (B-8)「【TV】テレビの特性が十分に活かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」は 30～40 歳代が 8 割と高く、「B-8」については 50 歳代が 6 割半ばと極端に低かった。

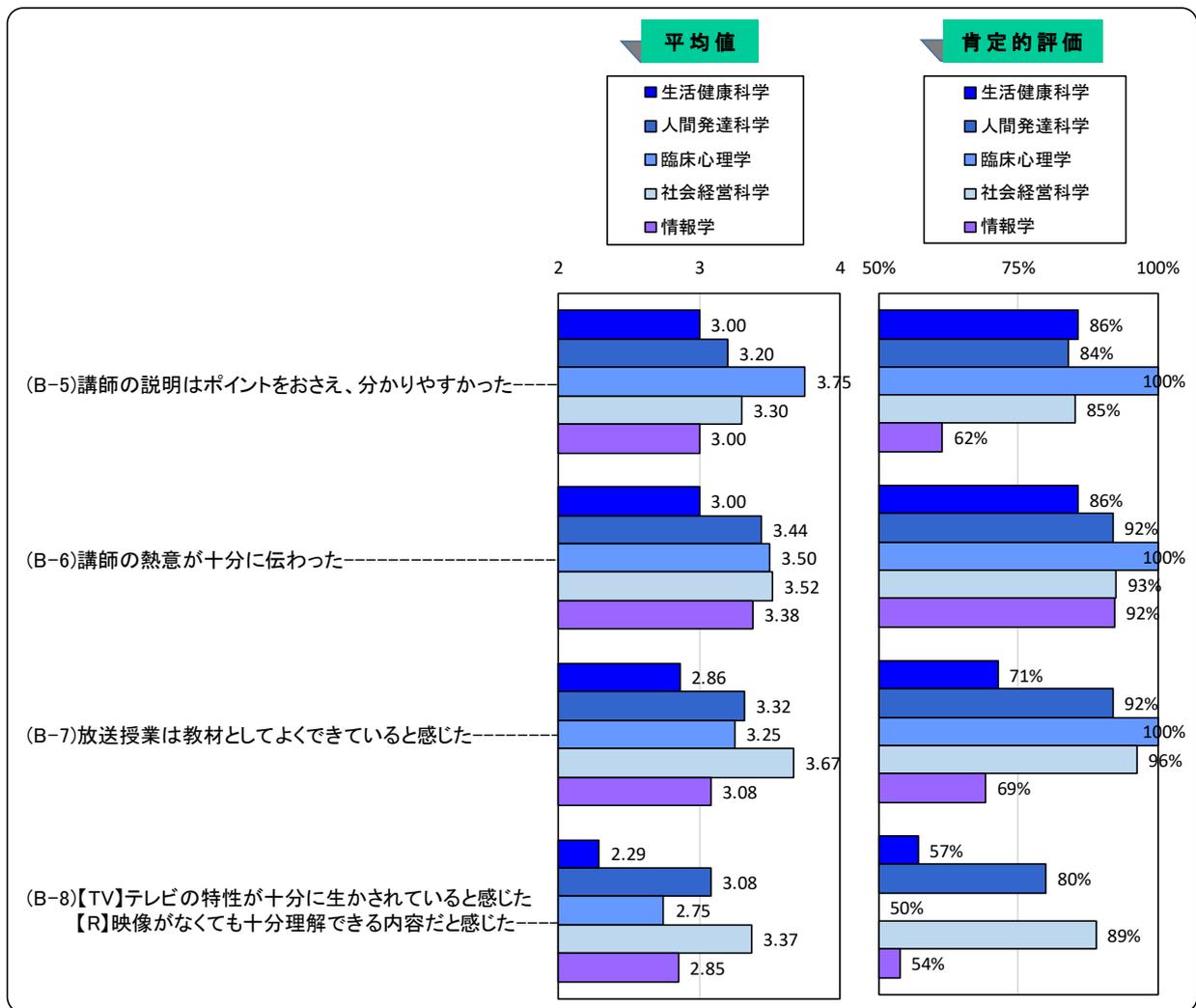
図 2-70 【大学院】年齢階層別の放送授業の評価



所属プログラム別では（図2-71）、「人間発達科学」と「社会経営科学」は、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」と(B-6)「講師の熱意が十分に伝わった」では同水準で、「B-5」は共に8割半ば、「B-6」は共に9割であった。

一方、(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」と(B-8)「【TV】テレビの特性が十分に生かされていると感じた／【R】映像がなくても十分理解できる内容だと感じた」については「社会経営科学」の方が、評価が高く、「B-7」で9割半ば、「B-8」で9割であった。

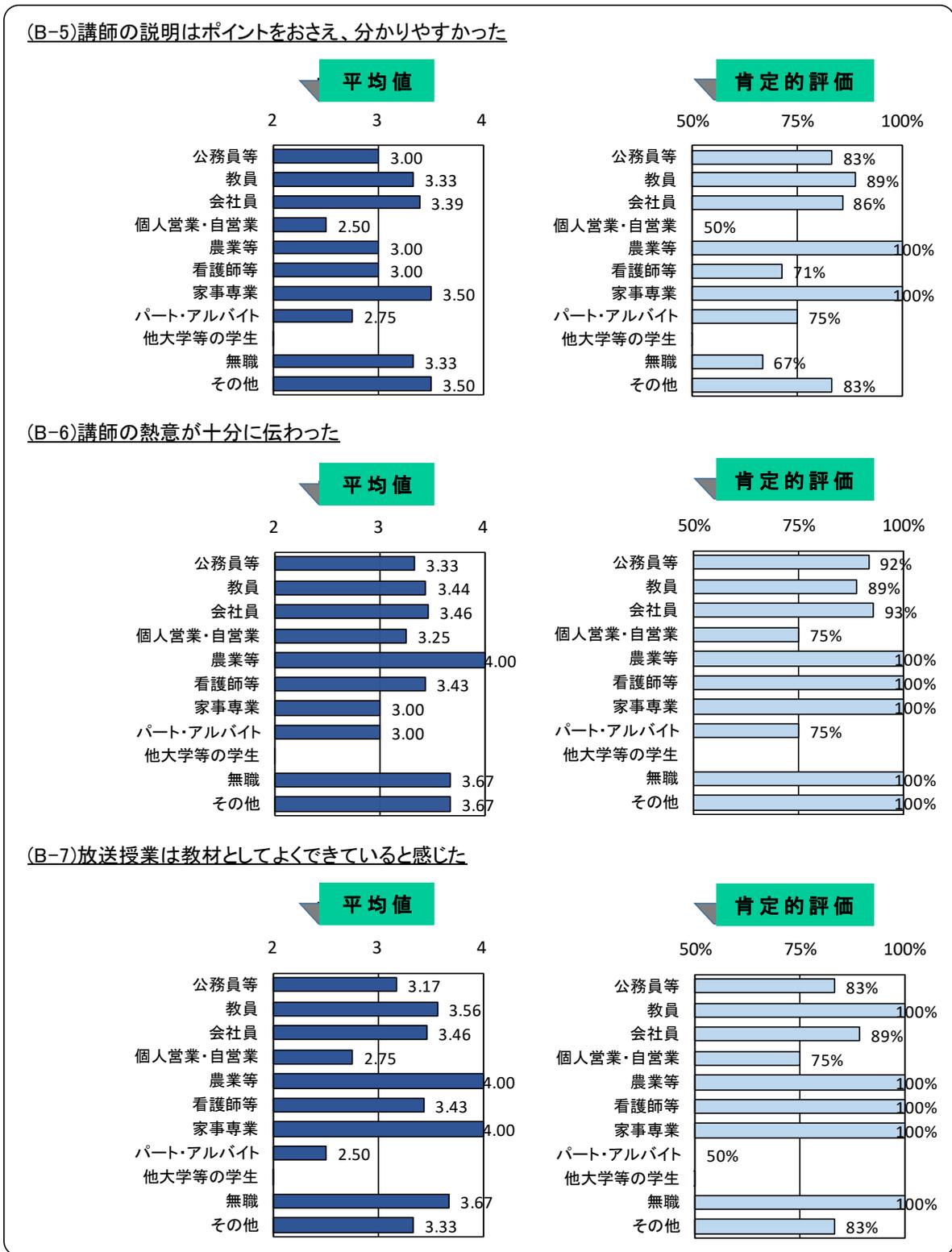
図2-71 【大学院】所属プログラム別の放送授業の評価



職業別では（図2-72）、(B-5)「講師の説明はポイントをおさえ、分かりやすかった」～(B-7)「放送授業は教材としてよくできていると感じた」では、会社員は全体とあまり変わらなかった。

(※全体の肯定的評価「B-5」:82%、「B-6」:92%、「B-7」:88%)

図2-72【大学院】職業別の放送授業の評価



(4) 印刷教材

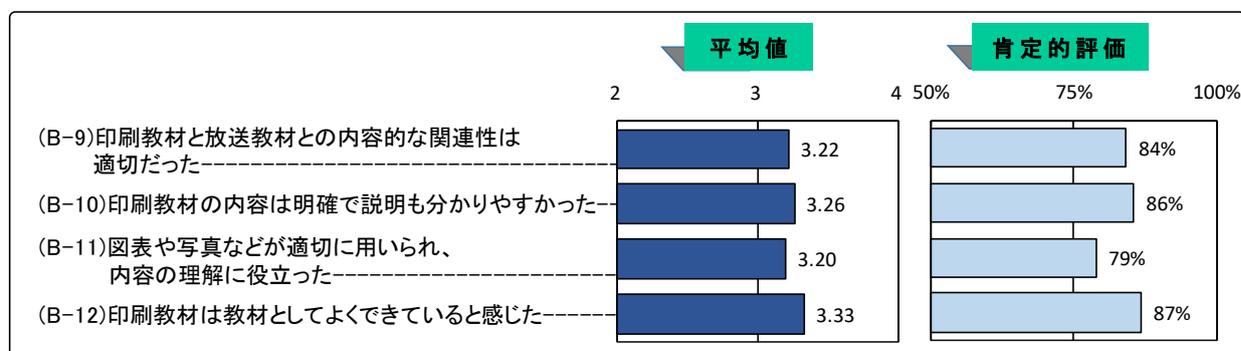
ここからは印刷教材について、評価項目ごとにみていく。

印刷教材の評価項目では（図2-73）、印刷教材に対する直接的な評価である

(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」、(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」、(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」では84～87%の評価であった。

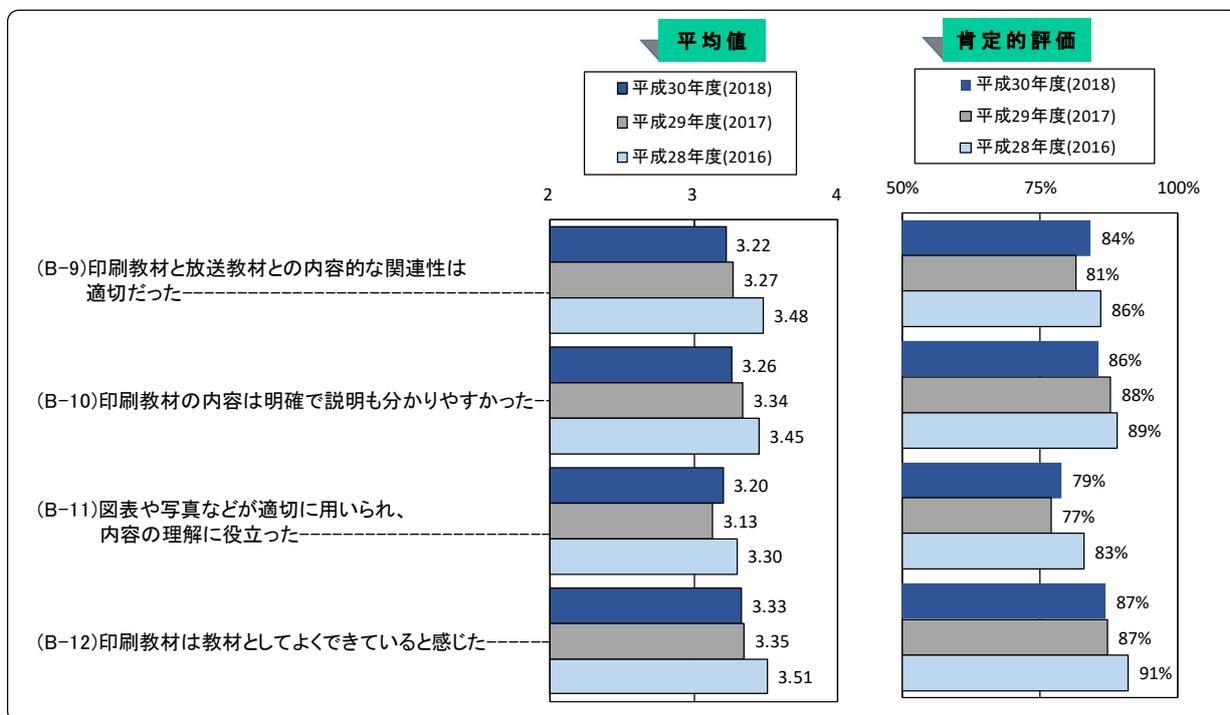
(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役立った」は79%でこの4項目の中では最も低い評価であった。

図2-73 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価



印刷教材の評価を時系列で見ると（図2-74）、以下の4項目では本年度と過去2年度は同じレベルであった。

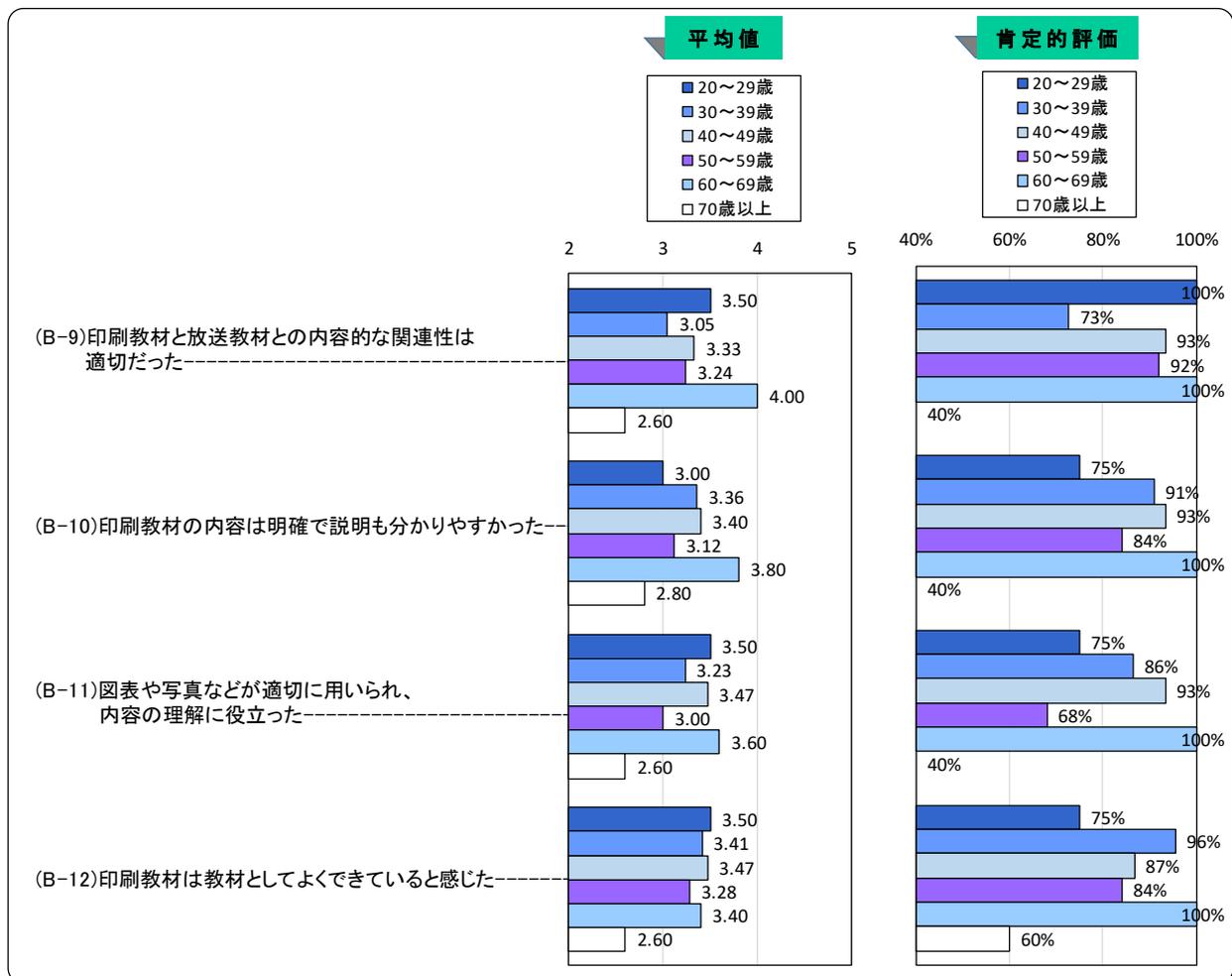
図2-74 【大学院】回答者全体の印刷教材の評価（時系列）



年齢階層別の評価（図2-75）で、30歳代、40歳代、50歳代をみると、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」は30歳代が7割前半と極端に低く、40歳代、50歳代は9割前半で、大きな差がみられた。

(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」～(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」の3項目ではいずれも50歳代の評価が低く、30歳代と40歳代については、「B-10」と「B-11」では40歳代（各93%）が、「B-12」では30歳代（96%）が高かった。

図2-75【大学院】年齢階層別の印刷教材の評価

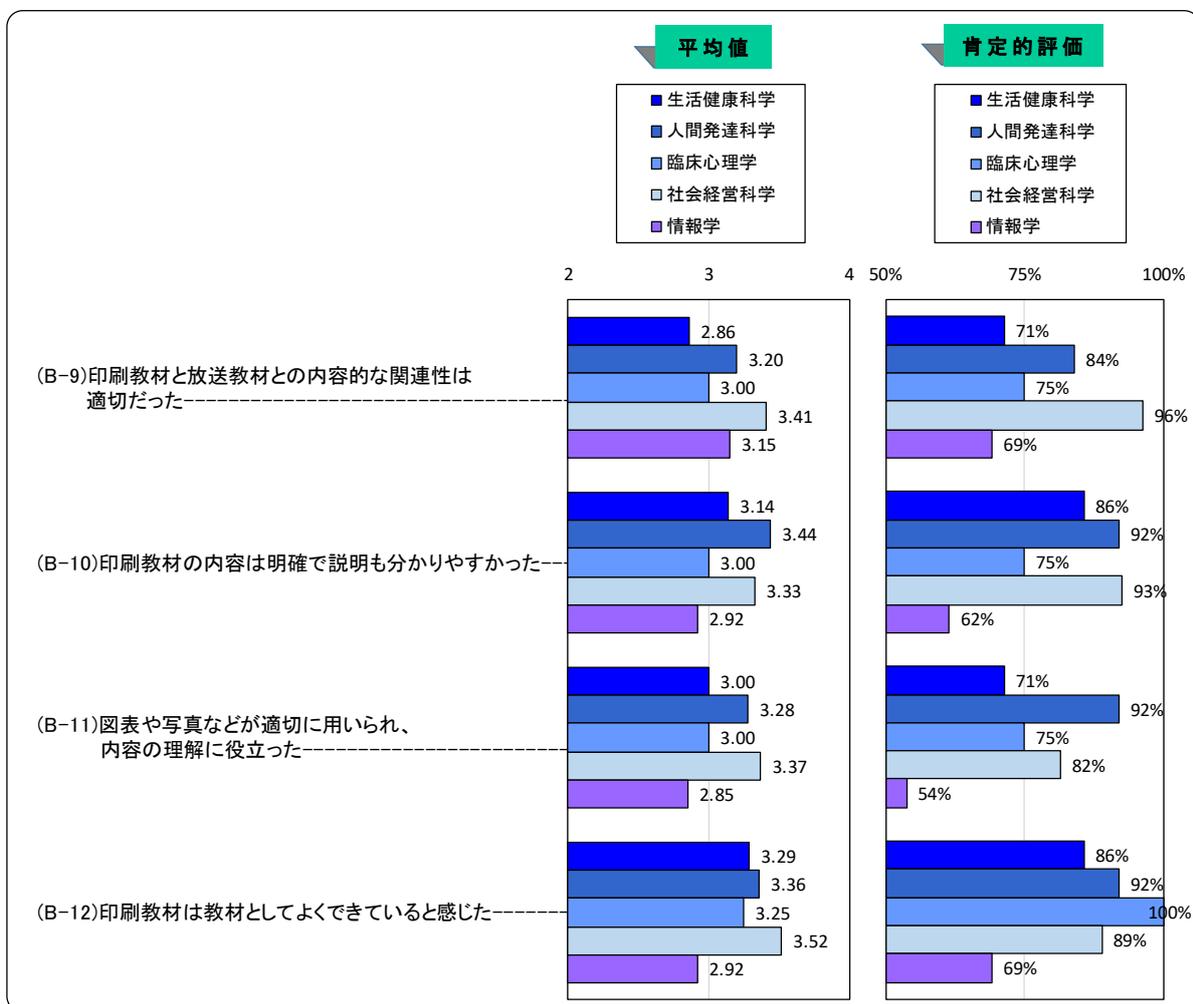


所属プログラム別の「人間発達科学」と「社会経営科学」の評価をみると（図2-76）、(B-9)「印刷教材と放送教材との内容的な関連性は適切だった」では、「社会経営科学」は「人間発達科学」を12ポイント上回り、96%に達していた。

(B-11)「図表や写真などが適切に用いられ、内容の理解に役に立った」にも両者間に大きな差があり、「人間発達科学」が92%と「社会経営科学」を10ポイント上回っていた。

(B-10)「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」は「人間発達科学」と「社会経営科学」は同水準の9割前半で、(B-12)「印刷教材は教材としてよくできていると感じた」も両者共に9割前後と同じ水準であった。

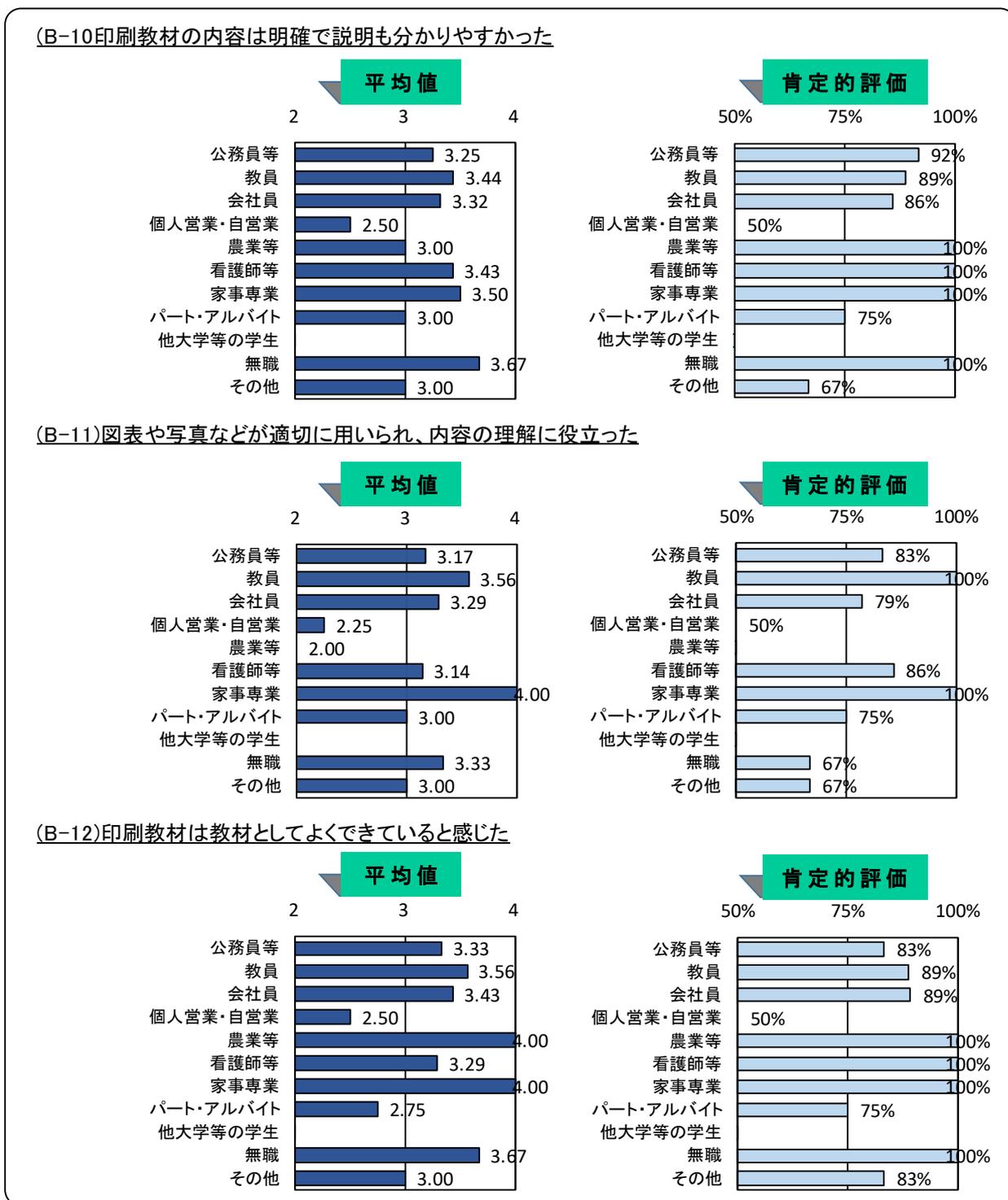
図2-76 【大学院】所属プログラム別の印刷教材の評価



職業別（図2-77）で「会社員」についてみると、以下の全ての項目で「会社員」と「全体」にほとんど差はみられなかった。

（※全体の肯定的評価「B-10」：86%、「B-11」：79%、「B-12」：87%）

図2-77【大学院】職業別の印刷教材の評価

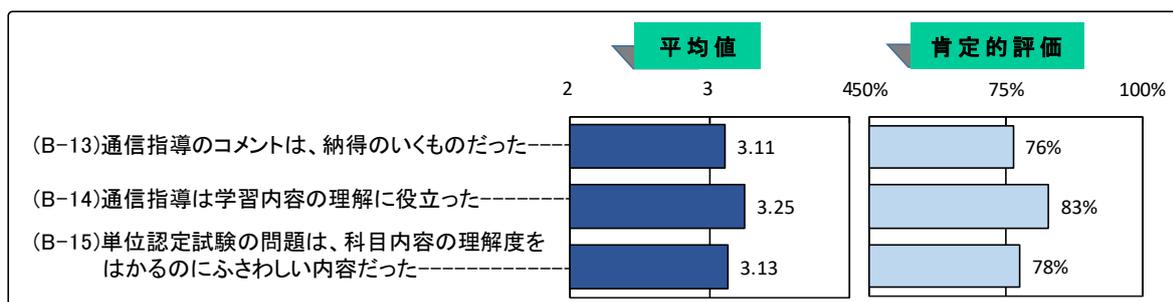


(5) 通信指導・単位認定試験

最後に通信指導・単位認定試験の評価について項目ごとにみていくことにする。

通信指導については(図2-78)、(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」と(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」は7割半ばから7割後半の評価、(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」は8割を超え、この項目間では高評価であった。

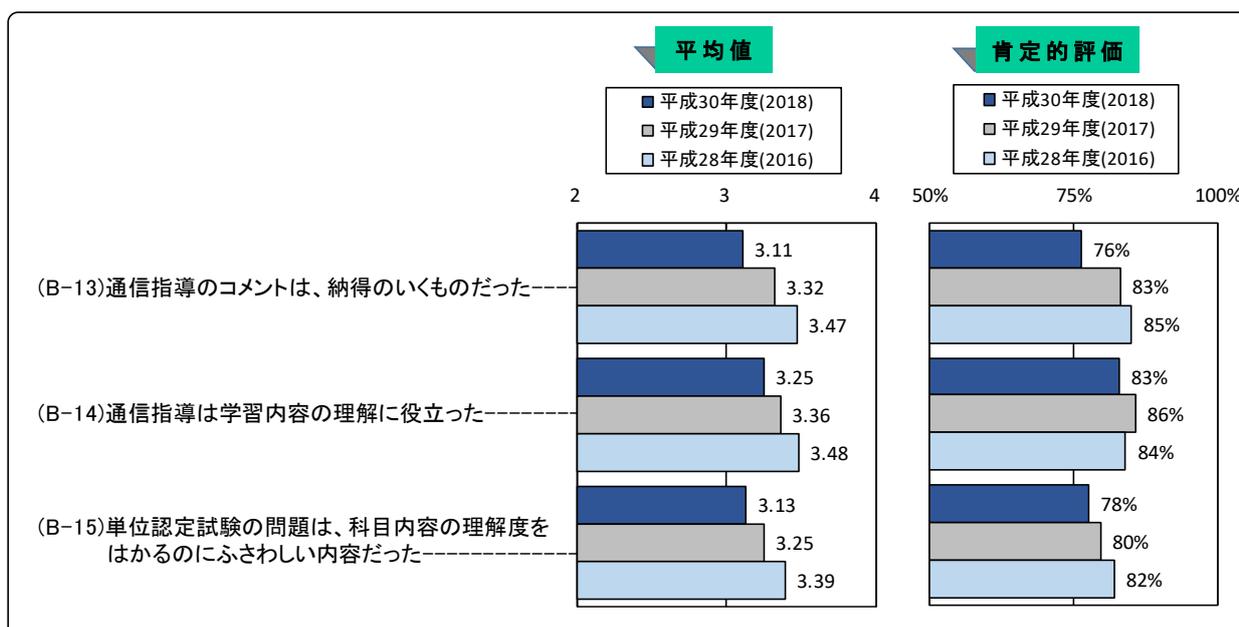
図2-78 【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価



通信指導・単位認定試験の評価を時系列でみると(図2-79)、過去2年度の比較で(B-13)「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」は昨年度より7ポイント減の76%で、大きく評価を下げていた。

(B-14)「通信指導は学習内容の理解に役立った」と(B-15)「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」については、僅かな減少がみられるが、レベル的には同じであった。

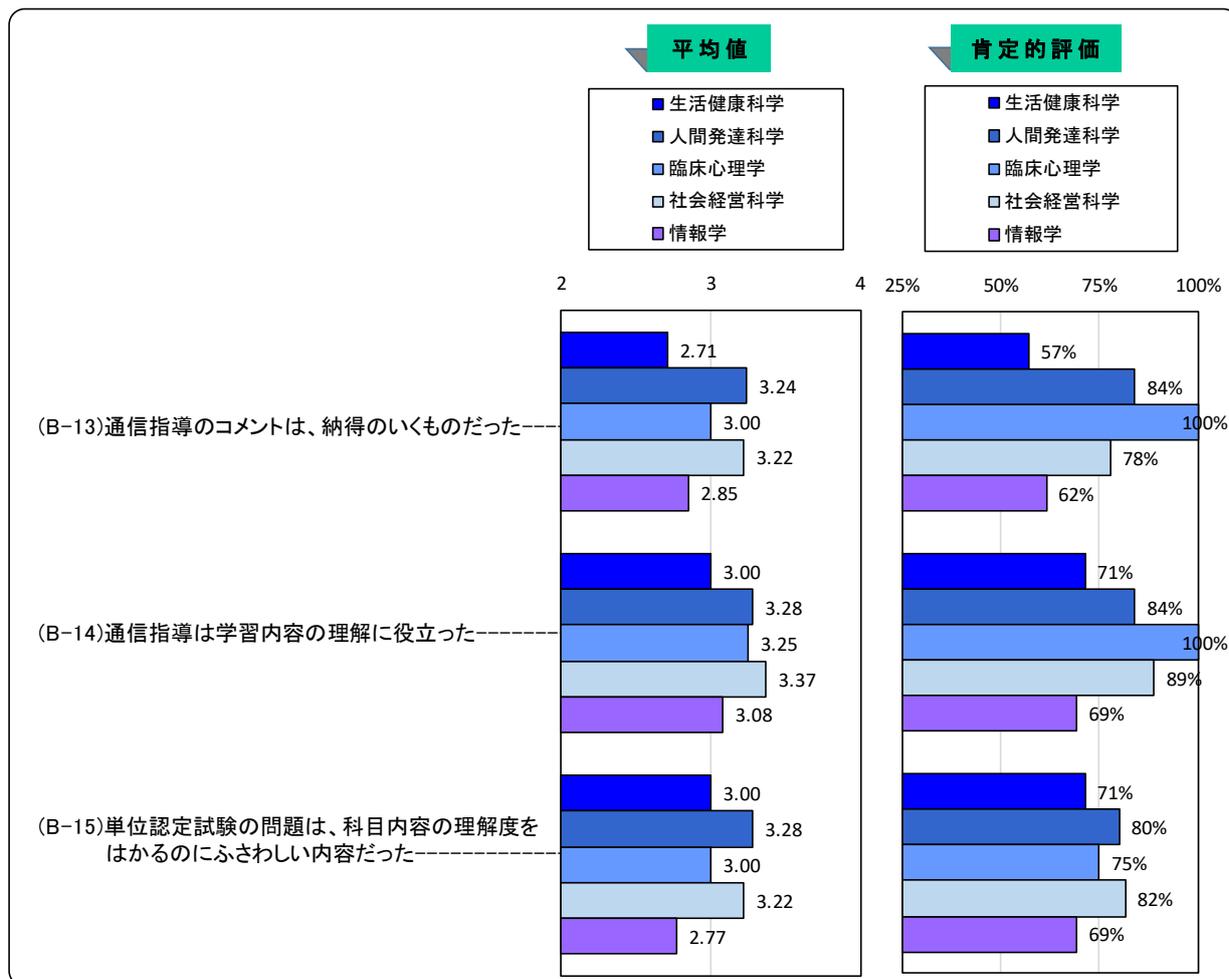
図2-79 【大学院】回答者全体の通信指導・単位認定試験の評価(時系列)



所属プログラム別で（図2-80）、「人間発達科学」と「社会経営科学」についてみると（B-13）「通信指導のコメントは、納得のいくものだった」では、「人間発達科学」の方が、（B-14）「通信指導は学習内容の理解に役立った」は、「社会経営科学」の方が高評価で、「B-14」については「社会経営科学」が89%と9割弱に達していた。

（B-15）「単位認定試験の問題は科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」については「人間発達科学」と「社会経営科学」は8割前半で同水準であった。

図2-80 【大学院】所属プログラム別の通信指導・単位認定試験の評価



Ⅱ－２－４．大学院の重回帰分析

大学院でも学部同様、重回帰分析で全体の満足度 B-(20) を目的変数とし、それ以外の項目を説明変数として分析を試みる。

最終的には「全体の満足度」に寄与する項目を明らかにすると共に、その影響力の強さを知ることを目的としている。

項目名	変数	対象
目的変数	y	全体の満足度 B-(20)
説明変数	x_1, x_2, \dots	各項目 A①～③、B(1)～(19) : 全 22 問
係数	a_1, a_2, \dots	重回帰分析によって得られる偏回帰係数

重回帰式 $y = a_0 + a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_{22}x_{22}$ (説明変数が全 22 問の場合)

サンプルサイズが十分でない場合や説明変数が多すぎると全体の満足度を表すために適した重回帰式を得られないことが経験的に分かっているため、重回帰分析の中で、説明変数間で強い相関関係がある場合、その一方の項目を自動的に削除する「変数減少法」を用いて解析を行うことにする。

使用するデータは質問項目 I . A と B の全設問を全て回答した 76 人のローデータを使用する。(本年度はオンライン利用の調査で全員が全設問を回答していた。)

■大学院の重回帰分析

大学院では「変数減少法」を試みたが、全体の満足度に対する単相関と解析で得られた偏回帰係数の符号が逆転する不合理な結果が、A-2「放送授業を十分に視聴した」、B-1「放送授業の難易度は適切だった」、B-4「印刷教材の内容は適切な分量であった」の 3 項目でみられたため、それらを除外して再び解析を行った。

■分析精度

自由度修正済み決定係数とは、得られた重回帰式が目的変数に対してどれだけ説明力(寄与率)があるかを示す指標で、「1」に近いほど良い結果で、この分析では 0.737 であった。

ダーヴィンワトソン比とは、残差同士の系列相関(自己相関)を示す指標で、0～4 までの値を示し、1 以下や 3 以上だと残差(誤差)に規則性があり、解析自体あるいはデータ自体に問題があり、「2」近辺の値ならよいとされ、その値は 2.288 となった。

◆分析精度

決定係数	0.751
自由度修正済み決定係数	0.737
ダーヴィンワトソン比	2.288
残差の標準偏差	0.457

今回の重回帰分析では下表の分散分析表が示すとおり、有意水準 0.01 の判定で、かなりの精度で式の当てはまりの良さが確認できた。

(有意水準とは危険率と同義で 0.01 の場合、判定を誤る確率が 1%ある事を表している。)

◆分散分析表

変動	偏差平方和	自由度	不偏分散	分散比	p 値	判定
全体変動	59.408	75				
回帰による変動	44.608	4	11.152	53.500	0.000	[**]
回帰からの残差変動	14.800	71	0.208			

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05

下表にある標準偏回帰係数とは説明変数の相互比較を可能にするためのもので、各説明変数の目的変数に対する影響力の度合い(寄与率)がこれで分かる。

標準偏回帰係数が最も高かったのは B-10 の「印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった」で標準偏回帰係数が 0.284、次いで B-15 の「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」(標準偏回帰係数 0.277)、他に B-19「この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)」(同 0.239)、B-7「放送授業は教材としてよくできていると感じた」(0.233) で、全体の満足度に対するそれぞれの寄与率に大きな違いは無かった。

(表最下段の定数項とは説明しきれない残りの部分である。)

この結果から、「全体の満足度」(肯定的評価 86%) を上げるためには B-10、B-15、B-19、B-7 の肯定的評価の向上に努めることで「全体の満足度」が上昇するものと考えられる。

ただ、B-19 (肯定的評価 90%)、B-7 (同 88%)、B-10 (肯定的評価 86%) は受講者の 9 割から 9 割近くの支持率を得ているため、その評価を高めるのは容易ではないと思われる。

従って、「全体の満足度」を上げるためには、B-15「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった」(同 78%) の肯定的評価を上げるための施策に取り組むことが有効と考えられる。

目的変数	標準偏回帰係数	説明変数	判定
B-20.全体評価	0.284	B-10 印刷教材の内容は明確で説明も分かりやすかった	[**]
	0.277	B-15 単位認定試験の問題は、科目内容の理解度をはかるのにふさわしい内容だった	[**]
	0.239	B-19 この科目の内容を全体としてよく理解できた(理解度)	[*]
	0.233	B-7 放送授業は教材としてよくできていると感じた	[*]
		定数項	[]

最後に施策を進めていく上で、役に立つと思われる、B-15「単位認定試験の問題は、科目内容の理解度ををはかるのにふさわしい内容だった」と相関の高い項目を上位5位までを挙げる。

【大学院】B-15 の理解度と相関の高い上位12項目

順位	項目名	B-15との 偏相関係数	判定
1	B-4 印刷教材の内容は適切な分量であった	0.373	[**]
2	B-14 通信指導は学習内容の理解に役立った	0.255	[]
3	B-1 放送授業の難易度は適切だった	0.249	[]
4	B-13 通信指導のコメントは、納得のいくものだった	0.207	[]
5	A-2 放送授業を十分に視聴した	0.201	[]
参考	B-20 全体の満足度	0.446	[**]

凡例	有意水準	凡例	有意水準
[**]	0.01	[*]	0.05